

日本語の時間表現に関する認知意味論的研究

寺 崎 知 之

謝辞

本論文の執筆にあたって、ご多忙な中で主査を務めて頂き、論文の内容、構成、その他手続きのあらゆる面でのご指導を頂き、ご迷惑をおかけ致しました谷口一美先生に心より深謝致します。

そして、学生時代に指導教官を担当して頂いた山梨先生には、10年以上の長きに渡り、あらゆる面でご迷惑をおかけするとともに、遅々として進まない本論文の執筆状況にも関わらず心強い言葉とお心遣いを多数頂きました。また、本論文を執筆するにあたり、論文全体の構成から、問題点の御指摘と広範に渡る様々な示唆を頂きましたことを、心より御礼申し上げます。

また、旧山梨研究室の方々、ならびに谷口研究室などの人間・環境学研究科の方々には多大なる御助言、御協力を頂きました。常に高いレベルでの指摘と助言を与えて頂いた先輩諸氏、進捗状況などに関して一方ならぬ心労をかけてしまい、常に暖かい助言を下された後輩の皆様には多大なる感謝を。

そして何より、不出来な息子の人生もただ暖かく見守り続けてくれた、郷里の母親には最大級の感謝と、これからの恩返しの約束を。

第1章 序論	1
1.1. 概説.....	1
1.2. 研究の背景と目的.....	2
1.3. 本論の構成.....	5
第2章 諸分野における時間概念	7
2.1. 時間観の変遷.....	7
2.1.1. 古代から近代への時間観.....	8
2.1.2. 絶対時間.....	10
2.1.3. 時間の相関説.....	11
2.2. 時間の認知.....	14
2.2.1. 時間の感覚器官.....	14
2.2.2. 時間記憶.....	15
2.3. 言語学の中での時間.....	16
2.4. まとめ.....	17
第3章 本論における視点と理論的背景	18
3.1. 認知言語学における時間の表れ.....	18
3.1.1. 認知に必要な時間.....	18
3.1.2. パースペクティヴと視点の移動.....	22
3.2. メタファー理論による時間表現.....	24
3.2.1. 抽象から具体への方策.....	24
3.2.2. 時間と具体物のメタファー関係.....	26
3.2.3. 空間メタファーと時空間関係の考察.....	27
3.3. 多義語の分析における時間語彙.....	29
3.3.1. 多義語のプロトタイプ認定.....	29
3.3.2. プロトタイプ認定への疑問点.....	30
3.3.3. 逆方向へのプロトタイプ認定.....	31
3.4. 時間語彙を巡る課題と両義的原義仮説.....	32
3.4.1. 時空間推義.....	32
3.4.2. 両義的原義.....	34
3.5. 本論の視点と主張.....	38

3.5.1. 時空間関係の要素別検討	38
3.5.2. 「順序」の重要性と両義的原義の維持.....	38
3.5.3. 「両義的原義」の意味づけの再考	39
3.5.4. 本論の取り得る射程.....	40
3.6. まとめ.....	41
第4章 名詞カテゴリにおける時空間認知.....	42
4.1. 名詞カテゴリにおける時間定義.....	42
4.1.1. 名詞のプロトタイプ・レベル	42
4.1.2. 名詞と時間ドメインの関わり	43
4.2. 時間語彙と空間語彙の差別化	44
4.2.1. 意味分布の揺れと偏り	45
4.2.2. 典型的な名詞カテゴリに表れる時間性	45
4.3. 時空間に派生する「サキ」の分析	48
4.3.1. 空間を表す「サキ」の分析.....	48
4.3.2. 時間を表す「サキ」の分析.....	54
4.4. 「サキ」の意味分化の再考.....	65
4.4.1. 「サキ」のプロトタイプを巡る問題	65
4.4.2. 両義的原義図式を用いた「サキ」の分類	68
4.4.3. 両義的原義図式からの再考察	74
4.5. まとめ.....	79
第5章 形式名詞と助詞による意味分化.....	80
5.1. 「アタリ」に見られる空間からの分化事例	80
5.1.1. 空間を表す「アタリ」	81
5.1.2. 時間を表す「アタリ」	82
5.1.3. 「アタリ」における時空間差異の要因.....	84
5.2. 時空間を表す形式語の概観 -アイダとウチの選択-	85
5.2.1. 「アイダ」の時空間差異	85
5.2.2. 先行研究における「アイダ(ニ)」と「ウチニ」	87
5.2.3. 「ウチニ」と「アイダ(ニ)」の比較.....	92
5.2.4. 「アイダ」の意義素の適用.....	93
5.2.5. 「アイダ」の時間用法の広がり	94

5.2.6. 「アイダ」に見られる独自性と時間的性質のまとめ	98
5.3. 「トコロ」の助詞による時間意味変化.....	98
5.3.1. 日本語テキストによる「トコロ+助詞」の機能説明と問題点	99
5.3.2. 助詞の意味格.....	101
5.3.3. 助詞の操作子機能	102
5.3.4. 空間名詞「トコロ」と助詞の関係	107
5.3.5. 「ヲ」と「ニ」のスキーマ.....	109
5.3.6. 「トコロ+助詞」の用法	112
5.3.7. 「トコロ+助詞」のまとめ.....	119
5.4. まとめ.....	122
第6章 副詞的要素に表れる時空間認知.....	123
6.1. 品詞論における副詞的カテゴリ.....	123
6.1.1. 副詞分析への導入	123
6.1.2. 副詞カテゴリの定義.....	124
6.2. 副詞的名詞句	127
6.2.1. 副詞的名詞句の分類考.....	127
6.2.2. 日本語の「副詞的名詞」との比較	133
6.2.3. 副詞的名詞句についてのまとめ.....	136
6.3. 空間的分布を表す時間語彙.....	138
6.3.1. 「空間的分布を表す時間語彙」とは何か	138
6.3.2. 視野仮説と探索仮説.....	140
6.3.3. 探索仮説の検討と両義的原義図式	145
6.3.4. 時間に関わる副詞類の分類と検討	150
6.3.5. 「空間的分布を表す時間語彙」のまとめ	157
6.4. まとめ.....	158
第7章 結論と展望	159
7.1. 各章のまとめ	159
7.2. 総論.....	163
7.3. 今後の展望.....	163

第1章 序論

1.1. 概説

言語学に含まれる諸分野には様々な名称が付され、目的意識も異なれば、その手法も、意義も、主張される論においても多岐にわたる。そんな中で多くの研究者が求めて止まないものは、「言語の意味」という茫漠たる存在であろう。こうした言語の「意味」を追求する試みははるか古代から連綿と続くものであるが、その方策は時代を経て変化していった。研究の対象とする言語を取り扱う上で、最も客観的な手がかりは形式や構造といったある程度固定化されていると考えられる側面になり、そこから表れる「意味」の問題については、取り扱いの困難な、曖昧な存在として二次的な分析対象になりやすい。こうした傾向は近年まで維持され続け、言語学分野の発展は、形式の研究、つまり音韻・形態などの分析から始まり、時代の流れとともに少しずつ意味の領域へ、そして現代は語用論の試みへと至る。こうした進歩の過程は、本質的に「曖昧なもの」を取り扱うことが困難であり、学問領域として成立し難かったことを示すものであろう。また、こうして外的要因によって切り出された言語という対象は、あたかもそれ自身が分離された各部門・モジュールを持つものであるかのように取り扱われ、それぞれの領域の中で分化されていった。言語自体にそうした区分があるものかどうかは定かではなく、「意味と形態」という分化すらもそれが正しい受容の仕方であるかも検討の余地の残る問題である。

こうした問題意識の中から立ち現れた学問が、現代にも変遷を続ける認知言語学と呼ばれる分野である。認知という言葉も随分と「曖昧なもの」であり、たとえば精神的な働きであるとか、とにかく現場主義的な、アドホックな理論構築でしかないという批判も常に受け続けるものになりがちであるが、認知言語学の本質は、人間本来の認知機能に根ざし、そこに実際の現象がどのように接続されるかを慎重に扱うための道具立てであり、その本質は生得的能力と、経験的な実体との相互作用にある。認知主体としてのヒトの外界を認識する能力を基盤に、そこに経験的な基盤を付加して実体を決定することこそが、認知言語学の統一された目的意識であると言ってよい。つまり、認知能力基盤という一方の極と、実世界から得られる各々の経験というもう一方の極という2つの原理を統合的に反映させることで、言語という「対象」の姿が浮かび上がるということである。言語の「意味」とは、こうして生成された言語という対象の、最終的に辿り付く成果であるといえる。

認知言語学という学問を成立させる上で重要な概念は数多存在するが、独自の価値は、やはりその動的なプロセスにこそ見出すことができる。既存の言語学分野においても、例えば辞書的な記述

であるとか、文法的な知識などといった静的な記述研究は進められてきているが、言語主体を中心とした認知のプロセス、言語とメンタルプロセスなどについては、これまであまり顧みられなかった存在であった。こうしたメンタルプロセスについては、例えば以下に挙げるように言語学の基本的な問題に関係する。

- (i) 言語的知識と言語外的知識の境界性の問題
- (ii) 言語の概念体系とカテゴリー化の問題
- (iii) セマンティクス、プラグマティクスに関する知識の区分の問題
- (iv) 言語変化と転義のプロセス
- (v) 文法カテゴリーと意味領域の拡張の問題
- (vi) 視点の投影と意味解釈の問題 (山梨 1995: 5)

こうしてあげられた「外界知覚」に関わる重要な問題意識は、「言語がどうあるか」「ヒトがどうあるか」の問題に加え、「ヒトが外界をどのように捉えるか」を研究の俎上にあげる。そして「捉える」という行動、プロセスが関わる中で、無視できない存在として出現する最も「曖昧なもの」こそが、本論で主に扱おうとしている存在、「時間」なのである。

1.2. 研究の背景と目的

本論文は、大きく2つのことを目標として掲げる。第一に、人の認知に関わる現象の1つである「言語」を通じ、その中における「時間」を観察することを手段とし、そこからフィードバックされる時間の認知、人の認知のありようについての探究を目標とする。認知活動を行う上で、そこに「動的な外界との関係性」についての考察が必須であることは、認知言語学の目的意識を考える上で明白であるが、その「動的なプロセス」そのものを言語として表したとき、つまり、「時間を把握し、言語として表したとき」にどのような形で表れ、それがヒトの時間的な知覚プロセスをどのように反映しているものであるかは、非常に根源的な問題である。「曖昧なもの」を実際の言語として形成する能力があるということは、ヒトの言語運用能力を対象とする中で、大前提とされながらも、その詳細は紋切り型の時間論で片付けられる傾向にあった。実際に「時間の把握を反映した言語を扱う」と一口に言ってもいくつかの方法が考えられるだろうが、本論においては、例えば以下の事例のような現象を取り扱うことで、「言語に関わる時間」の分析を行う。

- (1) a. 読書をしている {ところ/時} に、太郎がやってきた。

b. 3時間仕事をした {ところで/?時に}、お茶にした。

c. 3時になった {ところで/時に}、お茶にした。

(田中 1997)

(2) a. この路線には、トキドキ無人駅がある

b. 晴れトキドキ曇り

(1)は、「トコロ」という名詞が表す、場所的、時間的な表示の制限について示したものである。「～したところで (に)」という表現は「～したタイミングで」と表せる時間的な要素が強く含意されるが、元来「トコロ」という名詞は「所」であるから、空間的な場所の表示に用いられるものである。そして、併記した「時」という名詞と比較した際、「時」の方がやや不自然に感じられるような場合がある。何故こうした現象が起こるのかは、「トコロ」や「トキ」といったそれぞれの名詞に内包される、時間的・空間的な認知の形態を認定することで精査できると考えられる。また、(2)は日本語の「トキドキ (時々)」を用いた例であるが、これらも(1)と同様に、空間的な要素と、時間的な要素のどちらにも関わりを持つ。このような「時間」と「空間」という要素を含む語には、一体どのような関係があり、それぞれがどのように「時間」と「空間」の要素を表しているのか、「事態の把握」というヒトの認知能力の基本から問い直したい。

第二に、言語そのものについて、時間という概念がどのように切り出され表現として立ち現れるか、様々な言語表現の実際的な証拠から概観することを目的とする。(1)で代表される名詞「トコロ」は空間的な場所の表示に用いられる「空間的な名詞」として認識されているが、これが時間要素を表現することが可能となる背景には、人間のメタファー知覚の能力が深く関わっているとされる。しかし、日本語のみに限定したとしても、時間の携わる表現、機能は多岐にわたり、その全てが空間的な表現を間借りしたメタファー表現で表されるわけではない。「トコロ」という名詞を取り出せばそれは「空間的な語彙の拡張」と見ることが可能であるが、名詞「トキ」であればそれは純粹に時間の概念を対象として取り出した名詞であり、他にも「曜日」「秒」といった名詞は時間そのものの存在を切り出した表現である。これらの表現に加え、以下のように様々な表現の中で、時間は空間的要素と複雑に絡み合い、同時に存在している。

(3) a. 一週間

b. 日没

c. 草むしり

d. 長いトンネル

e. 長いトンネルが終わった。

f. 大統領

g. 彼は大統領だ。

これらの表現について、「空間か時間か」という二元論で意味を語ることは不可能であり、一方を全てもう一方からの借用だとは認められない。しかし、(3a)と(3c)に含まれる時間要素の有り様は異なる部分があると思われるし、センテンスにしても、(3e)と(3g)ではそこに含まれる時間の有り様は同様とは思われない。種々の表現について、そこに含まれる「時間性」とは一体どのように設定され、どのように分類されるべきであるのか。空間と時間の同時性を手がかりとして観察していく。

認知科学の中の言語学として位置づけられた認知言語学において、常に最も重要視されるものは、その名の通り、ヒトの認知の様式である。ヒトがいかにして外界を知覚し、それがどのような形で言語という生成物として立ち現れるか。そこにどのようなヒトの認知が形作られているのかを探ることこそが、認知言語学の原初的な目的意識であるといえる。一口に「外界の認知」と言っても実に様々な対象があり、古くは色の知覚の問題、図と地の識別による焦点の問題、指示詞による他者との関係性の問題、他者の内面までに踏み込んだ心の問題など、およそヒトが現実世界で生きていく上で、意識にのぼることが可能な対象は、全てが言語として表示される権利を持ち、必要性があるといえる。そんな中で一際特異な立ち位置にある対象が、「時間」である。あまりに身近であるためになかなか取り沙汰されることの無い「時間」という対象であるが、こと認知言語学においては、その取り扱いを巡っての議論は幾層もの苦心の累積である。認知言語学とはそもそも「ヒトの認知」に基盤を置いた方法論であるから、その「認知」のためには必ず「事態」を必要とし、その「事態」は常に時間的な豊かさを持った経験でなければならない。あらゆる認知に時間が関わり、その過程をもって「言語」という結果が産出されるのである。

認知活動に常に時間という要素が関わることは自明であろうが、この、結果として産出される言語自体に内包される「時間」要素をどのように取り扱うかは、大きな問題である。例えばしばしば取り扱われる時間的な言語学のトピックといえば時制 (tense) の論争がある。以前 NHK で放送され、Daniel L. Everett 氏の研究で有名になったブラジル原住民の用いるピタハン語は、常に現在の事のみを話し、未来という時制が存在しないとされて話題になった。もちろん、ピタハン語を話す人々が明日という日が来ることを知らないわけがないであろうし、過去に起こったことが、未来の次に来るといった誤った認識を持っているわけではないだろう。しかし、あくまでも事態知覚の方策として、「未来」という概念を必要としない言語があるのだとしたら、それはヒトの知覚の根幹を探る1つの手がかりとなりうるだろう。同様にして、細かな語彙の1つ1つにも、その言語を話す人々の事態知覚の方策は確実に立ち現れることになる。

改めて、認知の方策としての言語という視座に立って取り出すと、本論文の主な研究手法は大き

く2つにまとめることができる。第一の方策は、こうした時間知覚の言語への現れ方に関して、時間と空間の関係性を今一度問い直すことである。時間という抽象概念については、ともすると空間的知覚の副産物のように扱われることの多い対象である。本論で改めて取り上げるが、認知言語学においても、その中心的な接し方はメタファー理論に大きく依拠している。言語表現として醸成される過程で、抽象概念である時間についてはどうしても具体物の関与が不可避であり、具体物、空間的事物を表す言語を依り代として「辛うじて」表示されるものが、時間的な語彙であると考えられてきた。実際、そうした「表現の困難さ」は時間という対象を考える上で無視できない特性であり、ヒトが具象物の言語を借りて時間を捉えようとする営みは間違いなく存在している。しかし、あらゆる表現において、全て空間的具象物への依存の結果と見ることは、時間知覚という大きな問題について、一面的な物の見方へと墮してしまう危険性を孕んでいる。時間に固有な言語表現が存在していることも否定しようのない事実であり、「時間独自の言語」や、「時間に関わることで得られる新たな言語事実」について、空間的な言語の借り物ではなく、時間概念を中心とした調査研究が求められる。

第二の方策は、こうした「時間を中心とした分析」から、既存の日本語学で扱われてきた具体的な現象について認知言語学的な分析を行い、日本語表現に関しての新たな視点を与えることである。本論文は、実質的分析段階においては、いくつかの日本語表現について、いわゆる日本語学的な研究を下敷きにしつつ、「時間と空間の関係性」を新たな切り口として、その意味解釈に改めて説明を加える。これにより、より実際的な「事態」や「現象」に即した、生きた日本語表現についての認識が得られるものと期待され、意味論の分野はもとより、日本語教育の現場などで有用な、より実際に近い意味の記述が可能になると考えられる。

1.3. 本論の構成

本論は、まず認知言語学を中心としたいくつかの言語理論や哲学分野において、時間と空間の関係性がどのように扱われてきたのかを2章で触れる。時間についての研究は物理学、哲学とあまりに多岐にわたる分野に広がるものであるため、本論では、この中でも言語学と、それに近い分野に限定して概観することとし、民俗学的な古代から現代への時間観の変遷、その中でも特に、日本という国家社会にあった時間の姿を確認する。また、簡便ではあるが、物理学的な視座に立った「科学としての時間観」についても立ち入るべき分野であるため、浅学ではあるがここで確認しておきたい。他分野における時間研究の方策を概観することで、新たな視点から「言語における時間」を扱うための、より総合的な時間像を得ることができるだろう。

3章では、本論で扱う理論的道具立てについて俯瞰し、以降の分析でどのような立ち位置から時間要素を観察するかを提示する。認知言語学という分野においては、前述の通りに「動的プロセス

を前提とした認知活動」こそが言語を形成する重要な概念であるため、その前提となる概念には時間の関わる部分が多い。そんな中で、本論で中心的に取り扱うべき認知言語学的道具立てとは何であるか、時間ドメインという言葉の皮切りに、パースペクティブの問題、そして最も重要な概念メタファー理論の問題へと言及し、そこに内在する問題意識を取り上げる。ここで得られた課題は、他にも多義語分析におけるプロトタイプの問題などに関わり、「時間に関わる語彙」の複雑さを示すことになるだろう。そうした複雑さを捉えるためのモデルとして、本論の提唱する「両義性」について、その概観を示すことで新たな洞察を加えるための道具立てを整える。

4章以降では、いくつか視点を変えて事例研究を行っていく。その一歩目となる第4章では、大きく「名詞カテゴリ」に含まれる語彙について取り扱うことになる。品詞ごとに区分けすることについては、最終的にはその境界に迫ることになるために議論の余地を残すが、ここではそのための準備段階として、「名詞的名詞」と時間の関わりを考察し、更に「サキ(先)」という日本語を取り上げることで、時間と空間の双方に意味領域を広げる興味深い事例を取り上げていく。「サキ」における時間表現の形は、既存の研究で前提とされていた「空間の借り物としての時間語彙」の姿にアンチテーゼを投げかけるものである。

5章では、転じて空間的な意味合いの強いとされる「アタリ」に始まり、空間的な名詞から生成されたと思われる時間表現の有り様を観察する。ここで取り上げる「トコロ」については、(1)で掲げた通りに「所」であり、場所を表す表現だが、これが時間意味で用いられるようになり、形式名詞と認識され、更に助詞との接合を果たすことで、次第にその形態が副詞的になっていくことを観察する。

6章では、こうして境界領域に寄った名詞表現からの派生で、更に副詞の領域へと踏み込んだ研究に焦点を当てる。副詞カテゴリは名詞要素よりも時間表現に関わりの深い動詞に携わる表現であり、より直接的に「時間の描写」に関わるカテゴリである。こうした副詞類が名詞とはグレイディエンスを成し、境界的であることを示す現象として「副詞的名詞句」と呼ばれる語群を検討し、また、一般的に扱われる「空間表現から時間表現へ」という流れとは逆の方向になる、時間副詞から空間を示す言語表現についても、この副詞的表現との関わりで取り上げる。

こうしていくつかの視点から得られた時間の姿について、7章でとりまとめて、結論とする。

第2章 諸分野における時間概念

言語学的な見地から「時間語彙」というものを取り扱っていく上で、「時間」という概念が様々な分野でどのように認識され、研究されてきたかを俯瞰する必要がある。本章では、いくつかの分野から必要と思われる「時間についての考察」を引き、ヒトがどのように時間と接し、時間を考えてきたかを概観する。これによって、時間がどのようにして言語要素と関わるかを具体的に観察するための3章への接続を果たすこととする。

2.1. 時間観の変遷

言語学で扱われる時間とは何かを問う際に参考になると考えられるので、まずは以下の例を引用しよう。

TIME - “one-dimensional” “unidirectional”

the human mind as movement.

“the world” as Moving through time.

“the world” as being constant and time passing by it. (Fillmore 1997:45)

Fillmore が分析の前提とした時間の性質は、「一次元的なものであり、かつ一方向性を持つ不可逆なもの」として捉えられている。こうした「時間観」は、おそらくはガリレオを祖としてニュートンによって提唱された絶対時間を基にしたものであると考えられる。「絶対時間」という言葉は、ニュートンが設定したものであり、これは「物理現象に則した、ただ1つで、どのようなことがあっても進み方を変えられない時間」ということができる。具体的には1年は365日であり、1日は24時間、1時間は60分、1分は60秒である、ということそのものを指す。時間を定める基本単位である1秒は、現在は「セシウム 133 原子の基底状態の2つの超微細準位の間の変位に対応する放射の周期の9,192,631,770 倍に等しい時間」とであるとされる。しかし、こうした「時間観」をそのまま言語学の分析手法として採用できるかどうかについては、意見の分かれるところである。碓井(2004)においては、「確かに時間というものを認知主体無しに客観的なものとして捉えた場合、時間はこのように定義付けられるかもしれないが、あくまでこれはニュートン等の絶対時間を記述したものであり、認知主体をそこに置いた場合、時間というものの定義自体が変わってくると考えら

れる」との主張がみられ、いわゆる認知を分析の基盤として置く際には、こうした「絶対時間」という概念が必ずしも道具立てとして適切なものであるとは言い難い。「認知としての時間」に辿り付くまでに、どのように時間を取り扱うべきなのかは、検討の余地がある。

2.1.1. 古代から近代への時間観

古代における人間の時間観というものがどのように措定されていたものかは定かではないが、原始的な共同生活において必要とされる時間感覚の1つに「循環」があったことは哲学・宗教学・神話学・民俗学などの分野から提示されている。対象を古代日本人に限定してはいるが、田中 (1974) では、冒頭から以下のように論が始まり、「循環的時間感覚」と「直線的時間感覚」がどのようにして日本人の中で構造として形成され、展開していったのかを扱っている。

古代人にとって時間の推移は、直接的にはまず昼と夜の交代によって経験されるものであったろう。(ibid.: 7)

「原始的心性」と「古代的心性」とを分け、前者に循環的・永遠回帰的時間を意識し、後者に歴史的・直進的時間意識を見ようとする考え方がある。そして前者はすでに見た繰り返しの自然、あるいはそれと一体化した農業的営為が考えられ、後者にはその循環を破って一方向に進む人間世界の歴史性が考えられる。(ibid.: 79)

原始的には、人間が捉える「時間」には、自然のサイクルとして与えられた「循環」があった。唐代の詩人、劉希夷の有名な詩には「年年歳歳花相似たり。歳歳年年人同じからず」とあり、「花」に代表される自然界の万物は1年をサイクルとして「同じ」ものが繰り返されるという世界観である。狩猟や農耕で生をなした原始人類にとって、循環する時間こそ生活のための知識、感覚として必要であり、同時的に「直線的時間」を埋め込む必要性は薄かった。そこに「直線的時間」(田中の言葉を借りるならば「歴史的・直進的時間」)が組み込まれていくには、日本人の場合には権力への志向性、もしくは仏教的な思想の導入が大きかったのではないかとされている。

古代王権は、自己の権威の由来をとくために、かつての原始王権のように、伝承の非歴史的時間性の中に埋没させるのではなく、可能なかぎりあらゆるものによって、権力の現実性を補強しようとするために、自己を歴史的時間性のうちに位置づけようとし、そこで神話という非歴史的伝承の世界の中に、系譜にもとづく、フィクションとしての、最初の歴史が導入され、いわゆる『神代史』が生み出されることになった。(ibid.: 79-80)

過ぎ去る時間は往生という明確な意味を持った新しい時間へと変化する。その時人間は流れゆ

く時間に常に浮び漂う存在ではなく、極楽という彼岸の世界へ向う時間を主体的に生きるのである。そこにはこれまでとは全く違った新たなる時間意識が発生したのである。(ibid.: 83)

こうした社会的・文化的変遷により、人類は様々な必要性から「直線的時間観」を必要とするようになった。無論、日本以外の歴史を紐解けば、更に昔から「時間の直線性」についての言及は盛んに行われている。時間と言うものが時計や暦で測られるもの、つまり、直線的に発展するようなものであるとする概念は、どのようにして培われてきたものなのだろうか。

古来、時間についての分析を試みた学者のパイオニアといえば、紀元前の哲学者にまで遡る。例えばアリストテレスは、「時間とは、繰り返すモノの**運動**があつて初めて生じるものであり、モノの運動を定量する時に生まれる」と主張する。モノの変化があつて初めて、そこに時間という概念が生み出されるのである。この思考法は約 2000 年もの時を経てライプニッツ¹に受け継がれ、彼は「事柄が起こった時に、その前後関係を理解するため時間が立ち現れる」という考えを著した。つまりこれらの時間観においては、具体的なモノや出来事があり、その後から時間がそれらの関係を整理するために必要になってくると考えたのだ。また、アウグスティヌス²は「私達が生きているのは現在しかない。だから、過去や未来は、私達の心が思い出したり、期待したりするところから初めて立ち現れてくるものである」と考えた。つまり、時間とは、人間の心の働きによって生じてくるものということになる。こうした時間観の一般的な浸透については、文化や宗教観などによつても様々に変化はするが、今から 200 年、300 年程度遡った文明社会においても、時間が循環するものであるとする原始的時間観が消えたわけではなく、それらは同時に成り立ち、相補的に時間の一側面を表す概念として共存している。時を経て上記のニュートン力学のような「科学」が浸透してからも、時間の循環性という性質は未だ人々の生活の中にも根強く残っているものであり、当然のことながら、「ようやく時刻が 12 時を回った」や「今年もまた春が来る」などの言語事例としてそのような概念を見て取ることも可能である。

こうした「循環する時間観」が次第に薄れ、「線形的時間概念」が支配的になる過程には、キリスト教による影響が色濃いと考える意見がある。もちろん暦の伝達などの歴史的な影響も無視できないが、これにくわえ、イエス・キリストの磔というキリスト教の中心教義は、反復を内包する循環的時間概念とは相容れるものではなかった。それ故に、時間というものは循環するものではなくて、線形的なものでなければならなかったのである。

しかし、こうしたキリスト教的時間観は、正確に近代的線形化とイコールで結ばれるものではない。聖書研究者の強調する時間観は、近代的な時間の観念とは異なり、数量的、抽象的な無限性と

¹ Gottfried Wilhelm Leibniz (1646~1716) ドイツの哲学者・数学者。

² Aurelius Augustinus (354~430) 古代キリスト教の神学者。

して表象されるものではなく、「創造」と「終末」のような質的「時間」の間に張り渡されている時間である。アウグスティヌスの言葉によれば、「天と地を作る前に神が何をしたかと問うものがあれば、その人は、天地創造の前にも時があったと考えるわけであるが、時そのものも創造とともに作られたのである」。つまり、こうしたヘブライズムに存する時間は、無限に伸びゆく均質性としてのニュートンの絶対時間との対比においては、「始め」と「終わり」によって決定されている「線分的」な時間である（見田 1999）。これらは、以下の図のようにまとめられる。

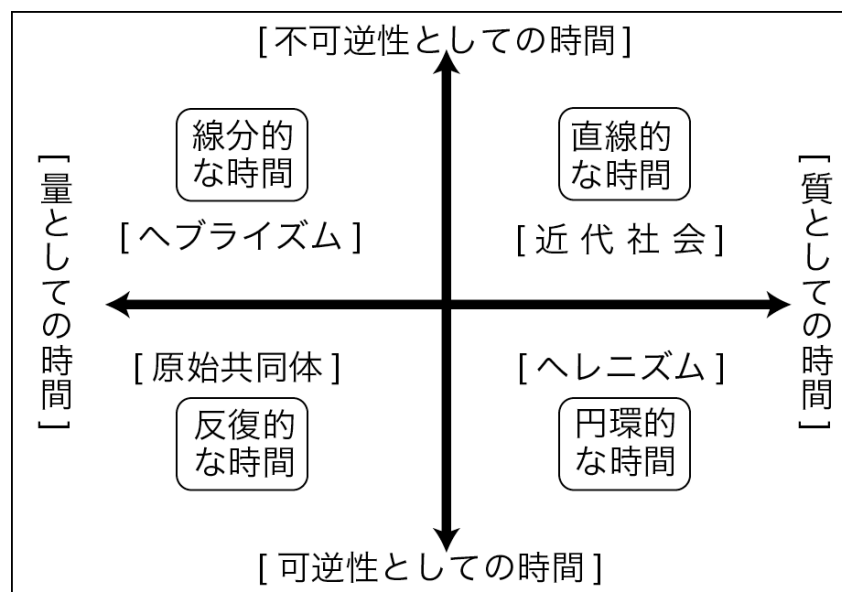


図1 原始的時間観の分類（見田 1999:35）

近代的な時間の「線形化」を強く押し進めた要因として、機械時計の進歩という要素もあげられる。リュイス・マンフォード³の言葉を借りるならば、機械時計は「人間の関わりあう出来事から時間を引き離し、独立した科学世界という概念を信じるのに独特な役割を演じた」のである。それまでの時間記録計と、機械時計との大きな相違点は、それが示す「時間」が連続的であるか否かという部分である。正確に数年に渡り連続して時を刻む機械時計があつて初めて、時間は「均一性」と「連続性」という近代の概念内容を持つことになった。つまり、この時点でいわれる時間の「一方向性を持つ不可逆なもの」という性質は、あくまで「時計の動き」によって表示された「時間」の一つの姿にすぎないのである。

2.1.2. 絶対時間

哲学、人類学の範疇を超えて、次に時間の姿を追い求めたのは、主に物理学を中心とした科学の

³ Luwis Mumford (1895~1990)。アメリカの文明批評家。

フィールドである。機械時計の発明を機に、時間の均一性、連続性といった概念を形成するために、時間は物理的に新たな姿を与えられることになる。初めて時間を幾何学的直線で表したのが一体誰であるか、という疑問に対する回答は無いが、こうした概念の形成に大きな影響を及ぼした学者には、かのガリレオ・ガリレイと、アイザック・ニュートンがいる。ガリレオは慣性などといった運動の概念を構築する際に、そこに現れる「時間」の正体に踏み込み、その道の先駆者となった。ガリレオに影響を受け、ニュートンの直接の師となったアイザック・バロー⁴は、以下のような考えを持ち出し、「時間」と「運動」の概念を注意深く区別したという。

時間は現実の存在を表すものではない。距離を表すのに空間が必要とされるように、存在の持続を表すのに、ある種の能力、可能性を表示する時間と言う概念が必要である。時間の絶対的、固有な性質からすれば、時間は運動を含意している訳でもないし、同時に静止を含意してもしない。物質の運動、静止に関わらず、また我々の眠りや目覚めによらず、時間は同じようにその道を進んで行く。だが時間は測り得るものであるために運動を含んでいる。運動なくして我々は時間を知覚することができない。我々は明らかに、時間を一様に流れ去るものと見做さなくてはならない。(Whitrow 1972:125)

この主張がベースとなり、時間は幾何学的直線との類似を多く認められることになる。時間は、幾何学的線分に対応する時間間隔から形成され、各部分は全て相似的である。その上、継起する瞬間の単なる足し合わせとも、1つの瞬間の絶え間ない流れとも見なすことができるのである。時間は「すべてのものの存在の持続」であり、「私は、同時に生成、消滅したものが等しい時間存在したということを認めない人が居るとは信じられない」とも述べている。こうしたバローの時間観を受け継いだのがニュートンであり、ニュートンの提示した絶対時間概念は、それ自体が独自の権利を持って存在するものである。時間は始点も終点もなく、何事が起こっても、それとは独立に持続し続ける。

2.1.3. 時間の相関説

一方、ニュートンと同時代に生きながら、異なった主張を行ったのが、上述のライプニッツである。ライプニッツは、瞬間それ自体が独自の権利で存在するという絶対時間概念を否定し、出来事の方が時間より一層基本的だと主張した。彼によれば、瞬間とは単に、同時に起こる出来事を分類したり、整理したりする抽象概念にすぎない。彼は、時間を実体としてではなく、出来事の起こり方の順序と定義したのである。以下にライプニッツの論じた時間観が垣間見える。

⁴ Isaac Barrow (1630~1677)。イギリスの数学者。

神は、何故もう1年早く、あらゆるものを創造しなかったのかと問い、このことから、神が、何故他の日ではなしにわざわざその日に事物を創造したかという理由がまったく存在しないのだと推論したがる人がいたとしよう。もし時間が事物に依存すること無しに存在するのであれば、この推論は正しい。何故ならば、ある瞬間には事物が存在し得るのに、他の瞬間には存在し得ないという理由はないからである。

(Whitrow 1972:130)

ライプニッツは、何も存在しない時にも瞬間は存在し得ると想像することの不合理性を説いている。こうして瞬間よりも出来事の方が基本的であるとするライプニッツ説は、「時間の相関説」として知られ、「出来事から時間が得られるのであって、逆ではない」という考え方に基づいている。また、物理学における時間の問題は、かのアインシュタインの相対性理論にも立ち現れる。光という対象を含む難解な物理学の問題の中で、アインシュタインは「運動」と「観測者」と「時間」の関係について、独自に思索を繰り返した。

その結果、「われわれが時間について判断を行う場合、それは常に、『同時に起こった出来事』についての判断なのである」という答えに至る。非常に包括的な表現ではあるが、これは「時間間隔の測定」には、常に同時性の判断が含まれているということであった。具体的に言えば、出来事が起こった時刻を、時計の針の位置と一致させて決めるということである。「あの汽車はここに7時に到着する」というとき、それは「私の時計の針が7時を指すことと、あの汽車の到着とは、同時に起こる出来事である」ということを意味する。このとき、「汽車の到着」と「時計の針が7時を指すこと」の同時性を確認できるのは、その観測者以外には存在しないのである。「観測」という行為自体、そこには時間性が含まれる。アインシュタインの仮定では、真空中では、光線や電波を含む電磁的信号が、自然界に存在する最も速い伝達信号であり、これらの「信号」の知覚者こそが「観測者」であり、最終的に、彼の理論は時間を宇宙と観測者との相互関係と見なすことになった。

こうした絶対時間と相対的時間の関係性について総覧し、物理学と哲学の両側面からアプローチしたのが、マッハ⁵である。ニュートンらの提唱した絶対時間（並びに絶対空間）の定義に疑問を呈したマッハは、空間の絶対性が不定であり、なおかつ不必要でもあることを提言し、同時に絶対時間についてもその存在を否定する。「時間は変化の継起の秩序である」というテーゼを中心として、素朴な感覚から絶対的な時空間存在を取り扱っている。その中では、「生理学的時間」という人間の感じる時間感覚と、物理的に現象間の相関を持って示される「計測的時間」の区別が示され

⁵ Ernst Mach(1838~1916) オーストリアの物理学者、哲学者。

る。

時間とは変化相互間の依属関係である、というのが私たちのなしうる唯一の回答です。私たちがひとたび適切な変化、たとえば地球の公転軌道上での位置を比較の基準に選べば、ありとあらゆる変化がこの一つの変化に依属するものとしてしめされます。(Mach 1977: 153)

物理学的規定はすべて相対的である。それゆえ、すべての幾何学的規定もまた、物差しに対しては相対的にしか妥当しない。測度概念は関係概念であり、それは物差しそれ自身についてはもはや何も述べてはいない。(ibid.: 113)

われわれは、直接的に空間や空間位置を感覚するように、直接的に時間位置を感覚するのである。空間感覚なしには幾何学が存在しないように、このような時間感覚なしには時間測定法はありえないであろう。(ibid.: 117)

これらの思考を基盤とし、マッハの時間観は以下のようにまとめられる。

時間と空間の本質は物理学的対象の順序関係に存するのであり、その順序関係は私たちによって持ち込まれるばかりでなく、現象の内部連関や密接な相互依属関係の中にも存立しているものだ。(ibid.: 165)

結局、物理的な現象から導き出される「絶対時間」と呼ばれたものは、我々が感覚的に獲得している「時間」を、外界の物理学的性質を1つの比較対象物として基準化し、その結果として得られる1つの指標に過ぎないということになる。

2.1.4. 生体の中の時間

物理学の分野では、「時間とは何か」を外在的に存在する「時間」の仮定の下で考察したが、機械時計の発達や、光や運動を論拠とした時間の考察を抜きにしたとしても、生物の生活において、時間は密接に関わるものである。例えば渡り鳥は渡航の方向を太陽や星などの天体の位置を用いて判断するというが、これらの能力は、天体の位置と、それが示す方向を時間と関連づけていなければ機能しないものである。また、ミツバチは餌場を示すダンスをすることで知られるが、このダンスの情報の中には、餌場までの距離、つまりそこまでにかかる時間の情報も盛り込まれているという。ヒトという1つの生物種も、その進化の過程において、ある種の時間能力を確固たるものとしている。分かりやすい事例を取りあげるならば、ヒトの心臓は外界からの情報が一切無くとも、機械時計がどんなに間違った時間を知らせようとも、基本的には一定のリズムを刻み続ける。このよ

うな機能は、ヒトの持つ最も小さな体内時計の例と言えるだろう。

また、しばしばこの「体内時計」という言葉を耳にすることがあるが、人間は大小さまざまな時間の枠組みを、その生体活動の中に取り入れる。24時間を1サイクルとした概日リズム（サーカディアンリズム）は、一日周期で血中のホルモン濃度などを調整する。正確に24時間で刻まれるわけではないが、日光などの明暗の情報を得ることで、このリズムは調整されることが知られている。また、ヒトの感じる時間は、記憶という要素と密接に結びつくとの見方も有力である。脳の記憶に関する部位を損傷した人間が、その時間感覚においても大きな損傷を負うという事例が多く存在しているのである。ロバート・フック⁶は以下のように述べる。

われわれが時間を認知するようになるのは、いかなる感覚によるのかを問い質してみる。われわれが感覚から得る情報は凡て瞬間的なものであり、その対象から生ずる印象を通じて、持続するに過ぎない。（中略）このことから時間についての印象を理解するのに、何らかの器官を想像することが必要なことが分かるであろう。そして、これこそ通常われわれが記憶と呼ぶものに外ならないと私は考える。

（Whitrow 1972: 41）（下線は執筆者）

フックは、何らかの「記憶器官」と呼べるものが目や耳などと同様に存在することを想定しており、これを「諸感覚からくる神経が1点に集まり出会う辺り」と考える。これが、現在でいうところの脳の記憶能力になるということだろう。つまり、「記憶すること」がそのまま「時間を理解すること」に直結するということになり、ヒトの「時間能力」には、何らかの「出来事の記憶」「出来事の認知」が密接に関わるということになる。

2.2. 時間の認知

2.2.1. 時間の感覚器官

それでは、「時間を認知する」ということは一体どういうことであろうか？ フックが「主感覚からくる神経が1点に集まり出会う辺り」と表現している通りに、時間認知能力は、他の精神的諸能力と同様に、単なる感覚反応、つまり味覚や嗅覚などの問題ではなく、1つの潜在的能力と考える必要がある。もちろん、人間は現象の変化をあらゆる器官で知覚する。興味深いことに、生物学的な見地に立ったとき、時間的な識別能力が最も敏感な感覚器官は耳であるという。目に映る最小の視覚時間間隔はほぼ200分の1秒程度であり、これよりも速い速度の変化には、連続的な写像が映るのみである。しかし、音的な刺激の場合、意識的に音を区別できる聴覚の下限は2000分の1

⁶ Robert Hooke 1635~1703。イギリスの物理学者・生物学者。

秒程度であるという。両方の耳に音が到着するときにかかる時間の差を手がかりにして音の発信源の方向と位置を決められることから、このような細かな差異が明らかになっている。このことは、非常に興味深い現象であると言える。両の耳の間の距離というものが、結果的には音声刺激の入力時間の差として現れ、この「距離に依る時間の差」によって、人間は「音の発生源との距離」という情報を把握するのである。

前後して起こる出来事の認知の過程は、それらを知覚する感覚諸器官によって左右される。仮に、このような感覚器官以外に人間が「時間を直接的に感知できる器官」を持つと仮定すると、時間間隔を決定する他の諸器官は、時間の感知という面においては大した意味を持たないことになる。従って、そうした感覚は時間そのものではなく、時間の中で進行していた物事の結果を生ずるもの、ということになる。果たして、こうした「知覚した出来事の情報」と「時間」というものは、何らかの分化が可能なものなのであろうか？

これまで見てきたような「記憶」との関わり、そして「空間的位置情報と時間との関わり」などから考えて、そこには分け隔てるのが困難な関係性があると思われる。ただし、時間そのものは、単なる感覚によって把握されるものではなく、精神組織が思考と行動を統括しようとする過程の中で感知され、把握される「知覚」なのであると考えられる。

2.2.2. 時間記憶

「知覚」よりもいくらか大きなスコープで時間という感覚を扱った研究に、矢野 (2010) があげられる。前節のマッハの言の通り、全ての事象の時間的関係性はその順序にのみ規定されるが、過去の出来事についての記憶を思い出すという活動を行う際にも、物理的な基準以上に、記憶に基づいた経験的な認知活動に大きな影響を受けることが分かっている。よく言われる「最近の出来事なのに、もっと昔のように感じられる」といった経験や、「ずっと昔のことなのに、まるで昨日のようだ」といった感覚まで、時間に関する記憶については、非常に曖昧であり、様々な知覚の要因によって左右されるものになっている。過去の経験について、「どの程度過去の出来事であるか」を策定する方策として、矢野 (2010) においては「位置ベースの時間判断プロセス」と「距離ベースの時間判断プロセス」という2つの方法をあげている。前者は例えば「2013年12月6日に車を買った」という記憶であり、後者は「今から大体2年前に結婚した」というような記憶（記録）法である。マッハの分析に引き寄せるならば、前者は計測的時間に依拠した記憶、後者が生態的時間に依拠した記憶といえる。矢野は認知心理学の実験手法を用いて、この距離ベースの時間判断プロセスが前後する様々な要因を取り上げ、いかにヒトの時間感覚が主観的な要因に影響を受けるかを取り上げている。また、同時に位置ベースの時間判断にあっても、それが主観的な要因に影響され、実際とは異なった距離感を与える現象についても言及されている。

2.3. 言語学の中での時間

言語学のパラダイムの中では、「時間とは何か」という直接的な問い立てが行われることは稀であるが、言語学という分野は常に時間に関する問題に肉薄しており、特に哲学との接続において、時間と言語の関係性は問題として立ち現れることが多い。野矢 (2002) は変化と時間に関する哲学的問題を取り扱った研究であるが、この中でも、どのような言葉を用いて、どのように事象を表現するかという問題が、常に問題の本質としてついて回る。

たとえば「Nは三年前大学に入学し、いま哲学科にいる」、こんな文章があったとします。このとき「N」というのが指示している対象はいったい何なのだろうと考えると、まず「Nは三年前に大学に入学した」と言っている時の「N」はいま目の前のNなのか、三年前のNなのか、どれを指示しているんだ。(中略) ふうふうこういう話をするときは時間の話を考えませんから、漠然と「目の前にいるあの人」ですませているんですけれども、そこに時制を入れて、時間の側面を考えてみると、とたんに問題がややこしくなってくるんです。(野矢 2002: 24-26)

民俗学・物理学・哲学といった分野で扱われてきた時間についての言明は、結局のところ、時間をどのように捉え、表すかという言語の問題に立ち返ってくることになる。古くからの言語学の中では、テンスやアスペクトなどの問題がこれを代表していた。いわゆる日本語学の中において、これらの問題に関わる現象は多岐にわたり、未だ「日本語における時間観」は議論の的となる。また、意味論の分野に絞っても、「時間を表す」ことの難解さは他の学問分野と変わることはない。具体的に言語学で扱う時間との関係性にも様々なものがあり、代表的なところではテンスやアスペクト、時間位置や長さの表示などが考えられる。日本語ではどのようにして扱われているか、代表的な事例は以下のようなものである。

- (4) a. 9時に、電話があります。
- b. 3時間、車を止めていた。
- c. 結婚するので、あいさつに行った。
- d. その時、学生達は書き終わり始めていたらしい。
- e. 最初の一ヶ月間、毎朝、10分で、ご飯を作った。 (中村 2001 : 1-3)

(4a)では「9時に」という副詞句が時間位置の表示、述語の助動詞「マス」によって未来というテンスが示されている。(4b)では「3時間」という副詞句が時間の長さを示し、「テイル」によって

結果を表すアスペクト、助動詞「タ」が過去というテンスを示している。(4c)の例の「結婚するの
で」は、直接的にテンスやアスペクトに影響を及ぼさない理由の従属節であるが、これによって、
「行く」が「結婚する」よりも前の出来事だと分かり、時間位置を示す役割を果たす。さらには(4d)
のように補助動詞が複雑に重ね合っ様々な時間的狀態を表すし、副詞句の場合も、(4e)のように
複雑な時間情報を表すことが可能である。また、(4b)の「3 時間」などは副詞句でもあり、名詞と
しての表示も可能な語であり、形態論的な議論も可能であろう。

こうして、言語学の中では「言語に表される時間」についての研究が盛んに行われているわけだ
が、そこから回帰的に「いかにして時間が言語に表れるものか」についての議論というものは、複
雑な分野にわたってしまうためかまだまだ議論の余地が残されているといえる。

2.4. まとめ

本章においては、関連すると思われる諸分野において、時間がどのように扱われ、時間のどの
ような性質が取り沙汰されているかを概観した。本稿の大目的の1つに「時空間の関係性について、
改めて言語学の視座から問い直す」というものがあるが、そのために必要な前提として、隣接した
諸分野における時間観は欠かせないものになっている。こうした様々な視点、歴史学、物理学、民
俗学、人類学にいたるまで、多くの文脈で「時間とは何か」が問われているにも関わらず、言語学
においては、「時間とは何か」という核心的な問いにはなかなか踏み込むことができず、特定の前
提を基に、不文律として固定された時間の姿がまかり通る現状がある。この傾向は、ヒトの認知の
ありように踏み込んだ認知言語学の分野において改善されつつあり、「時間を知覚するヒト」とい
う主体的活動として時間との接し方を考察されるようになってはいるものの、その中心に「時間」
を置くことは引き続き困難である。本章では、改めて「言語」という立ち位置から時間という対象
を観察するために、哲学的思索から始まる時間観を確認し、そこから物理学・哲学を並行して取り
扱ったマッハの議論へと接続することで、現在の認知言語学の枠組みに必要であると思われる「時
間」の姿を示すことで、これらの知見を言語学的な理論の背景へと落とし込む足がかりとしたい。

以下、3章では、言語学の中で時間の本質に関わる問題がどのように表れ、どのように扱われて
いるのかを観察し、本論において、どのような側面から分析を行うかを特定していくこととする。

第3章 本論における視点と理論的背景

この章では、言語学、特に認知言語学の分野において、時間がどのように取り扱われ、理解されてきたかを見る。その上で、2章であげたような様々な視点との差異、問題点を検討し、最終的には本稿における中心となる主張を提示する。3.1. 節では認知言語学的な枠組みの中で時間という要素がどのように扱われているか、中心的な理論として Langacker の定義や山梨の実例から確認する。3.2. 節では、更にその一部として空間に関するメタファー理論を概観し、既存の理論への疑問点と、本論での主たる論旨の一部であるメタファー理論と時空間関係についての論をまとめる。3.3. 節では、メタファー理論から更に具体性を帯びた実例を用いた多義語の取り扱い方として 初山 (1995) などを中心としたプロトタイプ認定法から、時間語彙と空間語彙の接点を掘りさげていき、問題点を洗い出す。そして、3.4. 節でこうした問題の解決策として、国広 (1997) の時空間推義や、筆者の過去の研究である寺崎 (2009) の中の両義的原義図式を取り上げ、その反省と解決案についての検討を行う。

3.1. 認知言語学における時間の表れ

言語のメカニズムを人間の認知能力に根ざしたものと見なす認知言語学においては、事態の有り様とその受容に関わる部分が言語運用に大きな影響を及ぼすため、とりわけ時間という要因が重要になってくる。まずは中心的な認知言語学の理論の中で、時間という要因がどのように関わってくるか、総論的立場の強い Langacker (2008)、山梨 (1995, 2000) などから概観する。

3.1.1. 認知に必要な時間

3.1.1.1. 時間のドメインの存在

認知言語学の理論体系の中で、時間は最も根源的な経験の中の一要素として現れる。まず、認知言語学の中でも重要な術語にはイメージ・スキーマ (image schema) がある。これは概念以前の存在であり、認知能力を認める上での大前提とされ、身体的な経験を繰り返すことによって得られる、比較的単純な一定のパターンや形式、規則性などとされる。日常的に経験されることから得られるイメージの総体として、頻繁に取り扱われる事例としては例えば容器のスキーマ (Johnson 1987) などがあり、これは個々の容器のイメージを指すものではなく、空間への出入りに関わる具体的な経験の中で繰り返し表れる、抽象的な構造そのものを示す。Langacker (2008) においては、イメージ・スキーマとは「特に視覚、空間、動き、そして力と関連する日常の身体経験から抽出されたスキーマ

マ化されたパターンである (Langacker 2008: 41)」とあり、このイメージ・スキーマの記述の中に、最も基本的であると思われる時間に関する能力がある。

ある特定の経験ドメインにある、これ以上何にも還元することのできない**最小の概念**(minimal concepts)は、ある基本的な感覚に基づいている。空間のドメイン内には線、角、湾曲の概念が、視覚のドメイン内には明るさや焦点色の概念が、時間のドメインには順序の先行性の概念が、そして運動のドメイン内には筋肉の力を使うといった概念が、最小の概念として存在している。

(ibid.: 42 下線は筆者)

論旨に含まれないため、Langacker は「時間とは何か」という方向性での議論は行っていないが、この「順序の先行性の概念」という端的な表現から、2章で取り扱ったような「時間知覚」の本質的要素がイメージ・スキーマの構成に必要な不可欠であることが述べられている。前章でマッハの明言した通り、「時間の本質は物理学的対象の順序関係に存する」のであり、「順序の概念」を最も基本的な能力であると見込むことは必然である。ただし、ここで気をつけておかなければならないのは、もし時間知覚が経験ドメインにおける最小で基本的な概念であると認められたとしても、それが直接的に言語に立ち現れるものかどうかは定まらないという事実である。イメージ・スキーマによって得られる概念について、Langacker は以下のように述べる。

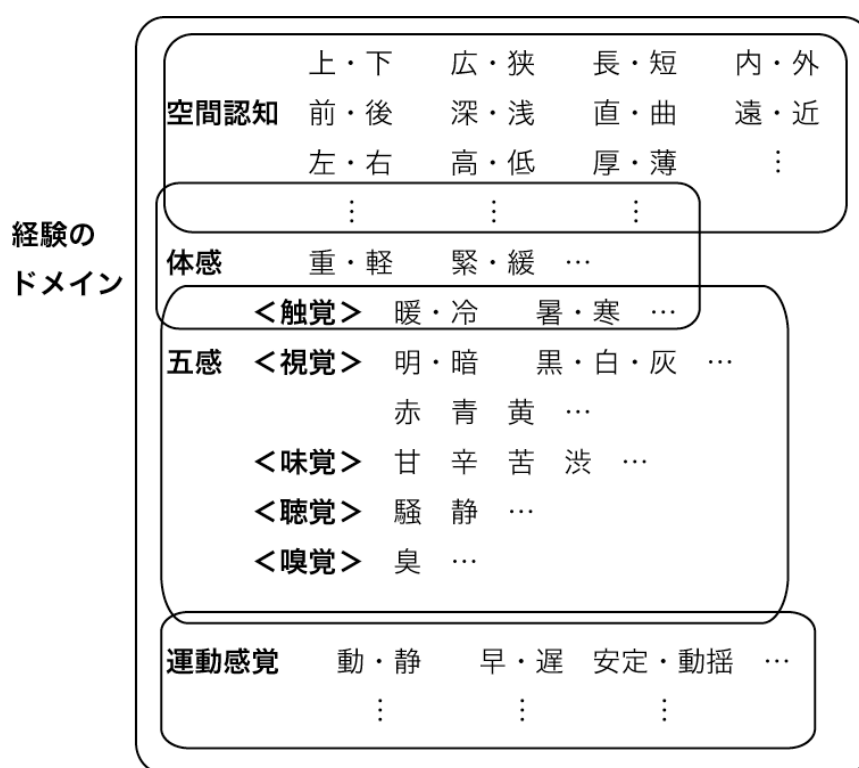
最も重要なことは、言語が表す意味として喚起される概念は**明確ではない**ということである。概念は明確な方法で世界を反映したり、世界と一致することはない。また、概念は客観的な状況から直接的に自動的に得られることもない。したがって概念意味論は、日常言語に多く見られる創造的な認知プロセスと心的な構築物を明らかにしていかなければならない。(ibid.: 45)

こうした概念の有り様について、同じく経験のドメインの記述で具体例を挙げているのが山梨(2000)である。この中で、やはり時間のドメインは認知の基本ドメインの1つとしてあげられている (ibid.: 40) が、この基本ドメインと具体的な経験ドメインの間には隔たりがあり、時間についての記述は慎重なものとなっている。

外界認知に関わる経験のなかでも、特に場所・空間の認知に関わる経験は、日常言語の意味の発展の場として重要な役割をになっている。この種の経験は、場所・空間を直接的に反映する経験として理解されているのではない。場所・空間にかかわる経験は、前・後、上・下、遠・近、高・低、左・右をはじめとする認知主体の主観的な解釈を反映するさまざまな次元によつ

て特徴づけられている。場所・空間にかかわるこの種の次元は、われわれが投げ込まれている世界の位相空間的な概念の背景となっているだけでなく、我々の日常生活における主観的な概念の体系を特徴づけている。ここで問題とする主観的な概念の領域としては、時間、性格、対人関係、情報量、能力などに関わる意味領域が考えられる。例えば、「1時間前」、「30分後」のような表現から明らかなように、時間の概念の叙述には、場所・空間的な次元の一つである前・後の次元が関わっている。(ibid.:121 下線は筆者)

表1 経験のドメインの一例 (山梨 2000: 120)



ここで述べられていることはつまり、「時間知覚」については根源的な能力であり、ヒトの認知を考える上では必要不可欠ではあるが、実際の言語として表れる「前」「後」などの表現は、空間的な経験に依拠したものになるということである。このような「時間知覚そのものの根源性」と「言語表現」の隔たりについては、注意する必要がある。

3.1.1.2. 概念化に関わる2つの時間

時間に関するもう1つの重要な要素として、概念化に関わる時間区分があげられる。動詞カテゴリに代表される認知言語学的な対象の多くは、静的に存在するのではなく動的なものである。事態

の概念化という行為は、「究極的には心的プロセス（もしくは神経学的活動）である(Langacker 2008.: 102)」ため、必ずそこには時間が関係する。基本カテゴリーの定義において、時間が表れるのはプロセス関係と非プロセス関係を差別化する際である。

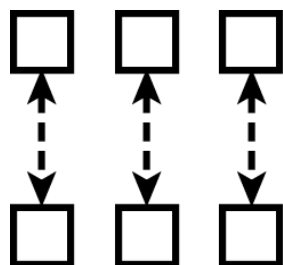


図2 存在と存在の複雑な非プロセス関係 (Langacker 2008: 126)

基本カテゴリーにおいて関係 (relationship) を表すだけならば、どれだけ複雑な関係性でも存在 (entity) と矢印や線による関係性だけで示されるが、多くの動詞など、プロセスを示す際には必ず時間軸の矢印 t が必要になる。

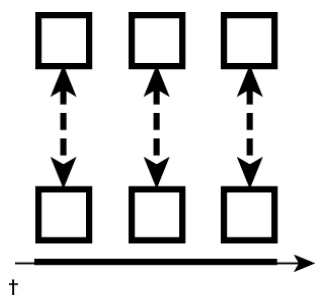


図3 存在と存在の複雑なプロセス関係 (ibid.: 126)

そして、こうした時間の表示の中にも更に2つの区別が存在しており、Langacker は概念の**媒体** (medium) として捉えられる時間を**処理時間** (processing time)、時間そのものを対象とする場合には**把握時間** (cenceived time) として明確な区別を成すとする。たとえば針をチクッと刺すような瞬間的な経験でも、そこには必ず何らかの時間の継続性、プロセスが展開されており、この時の時間幅、時間の継続性を処理時間という。対して、moment, period, week, next year などの言語表現によって時間が認知ドメインとして機能し、そこでプロファイルされる場合には、これを把握時間という。下の図は傾斜を転がり落ちるボールの概念化の事例であるが、概念化をする行為自体は、処理時間 T_1 から T_4 の間に出現する。図中の大きい四角はそれぞれある時点に活性化している概念に対応し、ボールはその中で各時点に特定の地点を占める。これらの地点は集合的に、事態が出現

すると考えられる期間の長さ t_1 から t_4 を定める。

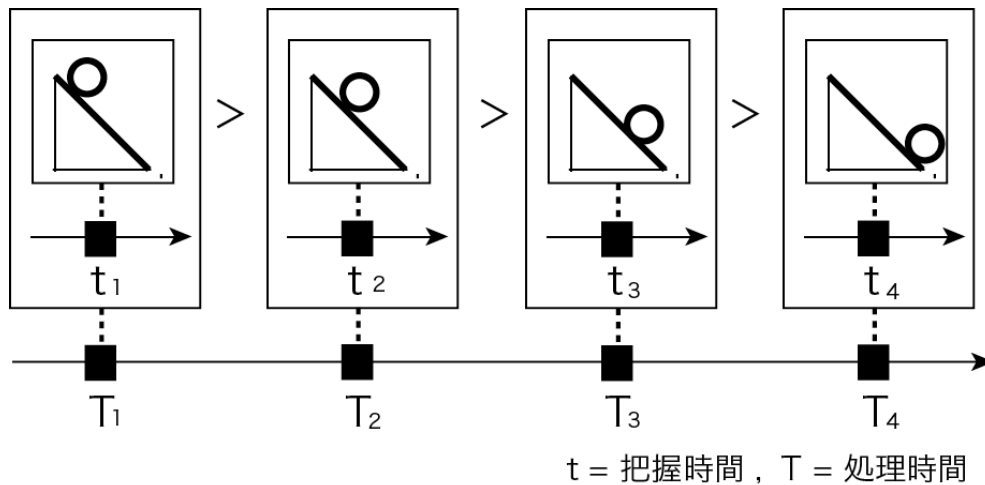


図4 処理時間と把握時間の表れ方の違い (Langacker 2008: 140)

3.1.2. パースペクティブと視点の移動

把握時間との関わりで視座を変えたとき、認知言語学的に興味深い対象にパースペクティブ (perspective) の問題が挙げられる。パースペクティブは視点の配置 (viewing arrangement) であると説明されるが (Langacker 2008: 96)、主観的な認知には必ず何らかの視点が存在し、このパースペクティブが知覚の際の時間、動的性 (dynamicity) に関係を持つ。視点の配置とは、観察者と観察対象 (観察されている状況) の全体的な関係性であり、通常はデフォルト状態が規定されている。この視点は、デフォルト状態であるが故に意識されにくいもので、言語学者が作例する文などでよく現れる。

- (5) a. The lamp is above the table.
 b. John kissed Mary. (ibid.: 96)

しかし、実際には観察者 (概念化者) の取る位置取りは様々であり、デフォルト配置では収まらず、そこに時間的な動的性を伴うことで、特別な表現として立ち現れることが知られている。

- (6) a. It's pretty through this valley.
 b. She's been asleep for 30 miles.
 c. The trees are rushing past at 90 miles per hour.
 d. The forest is getting thicker (ibid.: 97)

(6)であげられた表現は、どれもみな具体的な表示はないにも関わらず、観察者の移動を喚起させるものとなっており、(6b)では for 30 miles という距離表示によって時間を表し、(6d)では変化を表す描写によって概念化者の移動を含意するものになっている。こうした「観察者を含めた移動に関わる表現」にはいくつかのパターンがあり、山梨 (1995) では、少なくとも3つの移動が関係しているとしている。

(7) 山梨 (1995) による三つの移動の提示

- A. 外部世界の知覚される対象の移動
- B. 外部世界を知覚する主体の視線の移動
- C. 外部世界を知覚していく主体自身の移動 (ibid.: 205)

(7A)であげられた「対象の移動」は Langacker のいうところのデフォルト的配置から描写されやすいものであり、典型的な変化のプロセスといえる。(8)で表れる walk という動詞や、up, to, under などの前置詞は Nick の移動について表したものである。

(8) Nick walked up the dark street to the corner under the arc-light, …… (山梨 1995: 205)

(7C)の「主体自身の移動」は、(6)の Langacker の事例でも取り上げられたものである。また、この(7C)に類似しているが、観察者自身が移動するわけではなく、知覚の際に観察者の視線のみが動く(9)のような場合が、(7B)に分類される「主体の視線の移動」が表れたものである。この中では、down, on, to などが視線の動きを表している。

(9) From a little raised terrace at the end of the garden one looked down a long fertile valley on to the town... (ibid.: 206)

こうしてパースペクティヴや視線の移動が言語表現に影響を及ぼすことにより、「移動」というプロセス的な対象が、実際には動的要素を持たない非プロセス的な表現と関係を持つことになる。山梨 (1995) では Langacker (1990) から以下の例を引いている。

- (10) a. Vanessa jumped across the table.
- b. Vanessa is sitting across the table from Veronica.

(10)において、(10a)で用いられた across は、実際に Vanessa の物理的な移動に関わっているが、(10b)の場合には(7B)で示されたような視線の移動を表したものであり、事態としての動性を示すものではない。もちろんこうした現象は日本語にも数多く見られるものであり、以下の(11)は視線の移動により実際には静的であるはずの坂道の状態がまるで動的プロセスを持つかのように描かれており、なおかつ、パースペクティブの差により、その形が(11a,b)のように形を変える。

(11) a. 坂道が真っ直ぐ下りている。

b. 坂道が真っ直ぐ上がっている。 (山梨 1995: 210)

こうして、時間的な関係性を含む表現は認知的な事態把握の有り様を反映し、様々な形で現れることになる。次節以降では、こうした語の意味について、意味論的な理解がどのように分析されるかについて言及していく。

3.2. メタファー理論による時間表現

3.2.1. 抽象から具体への方策

現在の認知言語学のフィールドにおいて時間に関わる語彙を考察する際、「比喩 (メタファー)」による分析が、最も一般的であるように思われる。この分野での先駆的な研究としては Lakoff and Johnson(1980)があり、Lakoff and Johnson は時間についてメタファーを用いて表現される方策・動機について、Lakoff and Johnson(1999)では以下のように定義している。

All of our understandings of TIME are relative to other concepts

→ Motion, Space and Events

TIME is not conceptualized on its own terms → Metaphorically and Metonymically

時間の理解には、関連するその他の概念との関連が必須であり、それ自体を定義することが出来ないからこそそのメタファー (およびメトニミー) が求められる。これらに関連づける要素としては時間の性質に directinal (方向性) や irrecersible (不可逆性) などの用語を与えて説明しているが、それに加えて、客体としての「時間」以外にも、それを認知する主体としてのヒトとの関わりについて言及しており、動く時間のメタファー(Moving Time)と、それを捉える主体の移動のメタファー(Moving Observer)の2つに分けて時間とメタファーの関係性を論じている。

このようなメタファーを用いる理由付けとしては、以下のような述懐がある。

一般に、時間にはそれ自身のことばがない。そこで、ことばを借りる。どこから借りるか。一番ふつうなのは、空間からの借用である。そもそも「時間」の「間」は、「あいだ」であり、空間のことばである。「空間」の「間」と共通だが、これは「間」の意味が「空間」と「時間」のどこか中間にあることを意味しない。あくまで「空間」からの借用である。

(瀬戸 2005: 200)

この瀬戸 (2005) の例をひもとかずとも、時間表現というものが「単体では存在し得ない」とする論調は一般的である (前節の山梨 (1995) も参照)。

私たちは如何にして抽象的な概念である時間を認知し、それらを言語化しているのか。これまで抽象概念である時間は認知が容易な空間を S D (Source Domain) とした写像により認知され言語化されると考えられてきた。(碓井 2004:1)

現時点ではメタファーの確固たる定義は (コンセンサスとして) 定まっていまいだろうが、およそ以下のような定義を定めれば大きく間違っていないだろう。

2つの事物・概念の何らかの類似性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表す比喩。(舩山・深田 2003: 76)

こうしたメタファーによる理解を支持する動機としては、2章でも取り扱った「時間」という対象そのものの曖昧性、抽象性が最も重要であろう。

空間というのは人間が直接身を置くことのできる場所であり、視覚や触覚によって直接把握できる具体的な領域である。一方、時間は私たちが五感などによって直接把握できる対象とは考えられず、空間と比べて抽象的な領域である。このような空間と時間の本質的な違いを考えると、時間という把握しにくい対象を、空間というより把握しやすい対象を通して理解するという私たちの認知方略 (cognitive strategy) の言語への反映として、空間から時間への一方向的な意味の拡張があると考えられる。(舩山・深田 2003: 145)

メタファーという道具立ての重大な存在意義の1つに、字義的言語を用いて伝えるのがきわめて難しいであろう考えの表現手段を提供する、ということがある (「表現不能仮説 (inexpressibility hypothesis)」。Gibbs (1994) には以下のような例がある。

(12) The thought slipped my mind like a squirrel behind a tree.

その思考は木の陰のリスのように私の心から走り去った。(Gibbs 1994:130)

(12)で示されたメタファー表現においては、思考の持つ素早さや突然さ、捉えようの無さなどの諸特徴を字義的な言葉で叙述するのが難しく、メタファー的な文を字義的言語に翻訳しようとしても、結局のところは本質的にはメタファー的な言語になってしまう(例: The thought went away (その思考は過ぎ去った)と The thought evaded me (その思考は私から逃れた))。表現不能仮説によると、字義的発話では容易に、あるいは明確に表現することがまったく不可能な考えも、メタファーによって表現が可能であるとする。上記の瀬戸 (2005) の記述を見る限りでは、「時間」という対象は「明確に表現することがまったく不可能な考え」ということになる。

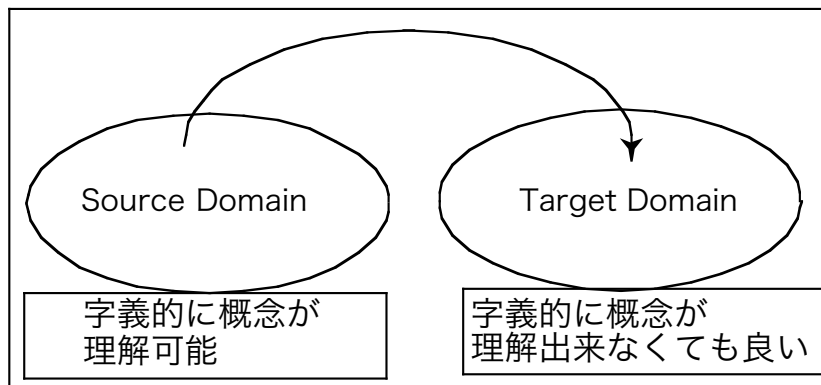


図5 「表現不可仮説」のドメイン間関係

3.2.2. 時間と具体物のメタファー関係

時間という概念が、具体的にどのように具体物の概念とメタファーによって結びついているとされるかを見てみる。Gibbs (1994) であげられた例を引用しよう。

(13) That hast so long walk'd hand in with time.

(あなたを抱かせて下さい、「時」と手を取りあい

長い旅路を歩まれた生きた年代記であるあなたを) (Gibbs 1994: 166)

(13)は戯曲の中に現れた一例で、この中には最も重要な3つの含意を示しているとする。1つは「時間は動いている」、1つは「時間は当該の人物から見てある方向を向いている」、1つは「時間はその手で何かをしている」。つまりこのメタファーは以下のメタファーの表れということになる。

(14) <時間は人である (TIME IS PERSON) > ← 擬人化

そしてさらに、擬人化は時間の「動き」の性質を捉えたものであるから、極論してしまえば、時間のメタファーは以下のメタファーに統合出来る。

(15) <時間は動くものである (TIME IS MOVING MOTION) >

もちろんこれで時間の関係する全てのメタファーが統合されるわけではないが、時間を具体的なものと対応させるメタファーの1つである「Moving Time Metaphor (MTM)」(Lakoff & Johnson 1980)が観察出来る。この時、メタファーの写像関係にある起点領域 (Source Domain) は「動くもの」であり、対象領域 (Target Domain) は「時間」である。この時「動くもの」とは空間において認知出来る概念に他ならないため、こうしたメタファーが「空間要素による時間のメタファー」、つまりは「空間メタファー」と呼ばれる。

3.2.3. 空間メタファーと時空間関係の考察

「空間メタファー」は、それ自体がごく直感的に理解されるため、概念が広く適用され、多義語の理解 (舩山・深田 2003) や、格の解釈 (山梨 1993) などにも用いられ、時間語彙の基本的な理解となっている。実際、時間の関わる表現の多くに、空間的な要素が介在しているのは事実であろう。しかし、こうした空間メタファーが時間表現を対象とした分析において何の前提も無しに用いられることは、空間に関わる表現に過度に依拠した、実際以上の汎化を招いてしまう危険性がある。人間が「時間に固有の知覚能力」を持つことは2章で検討された通りであるので、時間の関わる言語現象において、どこまでが空間やその他の表現から発生したものであり、時間独自の領域がどこに存在するのか、慎重に線引きを行う必要があるだろう。

改めて確認するが、(15)に表れた「Moving Time Metaphor」は、起点領域に「動くもの」があり、対象領域に「時間」がある。この時、概念メタファー理論の基点から導かれる当然の帰結は、「**時間は、字義的には動くものではない**」という事実である。なぜなら、「時間が本来的に動くもの」であるならば、「TIME IS MOVING MOTION」という記述は、単なる事実の叙述であって、概念メタファーの表示になりはしないからである。先に触れた「表現不能仮説」に則っても、「『時間』というものは元来字義的に表されるものではないため、『動くもの』という字義的に表される概念を用いて表している」ことになる。しかし、ここで1つの問題が現れる。それは、「**時間とは動くものであるか**」ということである。この問いに答えるのが困難であることは、2章でも確認した通りである。「時間は運動を含意している訳でもないし、同時に静止を含意してもいいない」のであるし、

「われわれが感覚から得る情報は凡て瞬間的なものであり、その対象から生ずる印象を通じて、持続するに過ぎない」と考えられるのである。表現不能仮説に則り「時間は動かないものである」と仮定する場合に限り、「字義的に表されないものを表す手段」として、メタファー関係は生きてくることになる。となれば、ここでは「動く(MOVE)とは何であるか?」という問題が表れることになる。

実際のところ絶対的な「動くこと(MOVE)」や「時間」の定義というのは不可能に近い。そこで鍵となるのは、あくまでヒトの知覚する時間であるという点である。つまり、ここでいう時間には必ず「知覚者」が存在し、時間知覚という行為をもって初めて、時間というものが立ち現れるという時間の相関説である。つまり、時間を知覚する際必要なことは、何らかの「相対的基準」であり、次元を等しくした対象どうしの比較をもって、時間や動きを捉えるという考え方が有効になる。こうした視点をいくらか明示的に示した研究として、黒田(2007)で検証している「〈状態の変化〉との関係を考慮した〈移動〉のオントロジー」を借用したい。この中で試みられていることは、「状況／フレーム基盤の意味記述のための基本的事態のオントロジーの明示化」である。つたない理解で簡略化すれば「移動とは何か」を、意味の経験科学の基盤で体系づけるための整理だ。ここで述べられる問題意識は必ずしも本論の目的意識と一致するものではないが、取り扱う命題は近いものであり、同文中でも「メタファー研究の最重要課題はターゲットの有効な特定法を確定すること」であると述べられている。以下に、黒田(2007)であげられた具体的な設定部分のみを抜き出していく。この中で時間 t の扱いは「基本概念」として用いられており、定義が定められているわけではない。しかし、この中で「移動」、ひいては「状態の変化」という事態を定義するために「空間」と「時間」が基本概念として与えられていることは注目すべきことである。

x が〈移動体〉(=Trajector) であるのは、ある期間 P 内の時点 t, t' ($t < t'$) について、 $1(x, t') \neq 1(x, t)$ が成立する(つまり x が別の時点 t と t' とで別の位置 1 と $1'$ にある) 時、その時に限る。
(黒田 2007)

つまり、移動という事象の定義は、対象の「位置(空間)」と「時間」という2つの変数から定義されると考えてよい(もちろん観察者の位置などのさらに細かな要素も絡んではくるのだが、ここでは説明の都合で単純化している)。このことは別の視点から考えるならば、時間が「物事の移動」と「空間」によって定義されることになるし、「空間」は「物事の移動」と「時間」によって定義されるということにもなる。この論文ではさらに「状態の変化」の定義にも拡張されているため、究極的には「変化」が「時間」と「状態」に定義され、すなわち「時間」は「変化」と「状態」に、「状態」は「変化」と「時間」に依存するということにもなる。また、ここにおける定義では

状態⇨位置であるから、変化⇨移動である。よって、場合によっては空間を必要としない（もしくは問題としない）時間も存在することになる。このモデルを採用するならば、理論的枠組みを定めるフィールドにおいて、時間と状態（空間を含む）は不可分な存在となる。どちらか片方で存在するということはあり得ず、どちらか片方のみで表現されることも本来ならば無い。つまり、状態は時間を含み、時間は状態を含む。2つの概念を分化しない、もっと大きな意味解釈が存在している。どちらかの意味を顕在化させることで、時間表現と空間表現の意味が派生するものであると考えられるのである。こうした空間義と時間義の両義性というものは、これまでも注目されていた現象であることは間違いない。例えば、碓井 (2001) では「時間的用法のマエ」を例にして実際に検証し、この「マエ」という語彙に完全な分化は行わない。

空間表現と時間表現の間は、はっきりと二分出来るものではなく、両者間は緩やかなグレイエンスを成している (碓井 2001: 43)

メタファー関係についての具体的な分析は4章に譲るが、さしあたっては、空間メタファーという方策を用いる際にも、時間そのものの知覚という現象を考えた場合には、どのような事態把握が行われ、その結果として具体的な表現が立ち現れるものか、精査する必要があるということを確認しておく。

3.3. 多義語の分析における時間語彙

上記の通りに、「空間メタファー」という道具立ては、前提として用いる場合には慎重に検討する必要がある。そこで、こうした「メタファー」という道具立てを明示的に用いずに、他の視点から「時間語彙」という対象の存在を検討した先行研究についても触れておきたい。

3.3.1. 多義語のプロトタイプ認定

初山 (1995) では「多義語の複数の意味（多義的意味）は対等な関係にあるのではなく、何らかの意味で基本的なものとそうでないものがある」(初山 1995: 623)と述べ、これを**プロトタイプ的意味**として認定する方策を検証している。この中で特に「空間」と「時間」の両方の意味を持つ形容詞を多く取り上げ、それらの検討から時間と空間の関係性について、「時間をプロトタイプ的意味として持つものではなく、意味転用は『空間』から『時間』へ一方的である」としている。例えば「深い」や「浅い」はとりうる名詞の量的な違いから空間的意味の方をプロトタイプ的であるとするし、「近い」と「短い」の例では、以下のように時間的な用法では制限があるので、空間の意味の方がプロトタイプ的であるとするのである。

(16) a. 車が角を廻るまで、降りた近くに立って見送ってくれる。

b. *近くにオリンピックが開催される。

(17) a. 花子は髪を短く切った。

b. *私はアメリカに短く滞在した。

(昀山 1995: 631, 634)

(16)は、名詞化され格助詞に先行する「近く」の場合は「空間」が表せて「時間」が表せないことを示しているし、(17)では「短く～する」が時間の場合に言えないことを示している。また、同時に「狭い」「広い」「大きい」「小さい」などの形容詞の場合は一次元（線）の「空間」を表すことが出来ず、一次元的にのみ捉えられる「時間」へは転用出来ないと述べている。

3.3.2. プロトタイプ認定への疑問点

上記の研究は、実際の言語事例に現れる時間語彙、空間語彙の違いから帰納的にその性質を予測しており、方法論として正当であるといえる。しかし、数多存在する言語事例から帰納的に一つの結論を導くには大きな困難が伴うのも事実であり、例えば以下の例文にあげられるような疑問が残る。

(18) a. お盆近くにオリンピックが開催される。

b. 近々オリンピックが開催される。

c. 質問に短く答える。

(18a,b)は(16)との比較である。確かに「近くに」と名詞化した(16b)はおかしいが、何らかの時点との関係を明示して(18a)のようになれば自然となる。(16a)で「降りた近く」という「場所を表す句+近く」を用いる例文と対比するならば、こちらの方が妥当な比較といえるだろう。もちろん「近くに公園がある」のように関係性を明示しない場合にも空間表現は自然だが、この場合は何らかの文脈で「近く」が何に関係しているのか（つまり、何の近くなのか）が示された場合だろう。普通は、この基準点には発話者自身の場所が当てはまる。時間の場合には、発話者の置かれた現在を基準点として「近くに」を用いることは出来ないが、それに代わる「近々」という語がある。もちろん、「近々」は空間的に用いることは出来ない（*近々缶ジュースがある）し、この場合の「近く」は「現在」の近くに限られる。この時の「近々」と名詞化した「近く」の差はどのように判定すべきなのだろうか。

(18c)は(17)との対比で、「短く～する」という用法でも、特に不自然ではないことを示す。ただし、

この場合は(3b)の「短く滞在する」が何故不自然なのかを説明する必要がある。また、初山は「長い」についてはプロトタイプ意味は明らかでないとしており、「短い」とは判断を分けている。一次元的な「線性」や「次元性」を動機として写像されるのなら、一見して対義語に見えるこれらの語で判断が一様でないのは一体何故なのだろう。

3.3.3. 逆方向へのプロトタイプ認定

実際の用例からのプロトタイプ認定法は、豊富な知見を与える効果的な試みであるが、同じような方法論を用いて、時間語彙・空間語彙に関して逆の主張を行うことも可能である。以下の例を見よう。

- (19) a. 京都は大阪と名古屋のアイダにある。
- b. 正月と節分のアイダに、原稿の締め切りがある。
- c. 私が仕事をしているアイダ寝ているなんて。
- d. 3日間（ミツカカン）ずっと勉強しどおしだった。
- e. しばらくのアイダ、留守にする。
- f. 長いアイダ待たせてごめんね。
- g. このアイダのことなんだけど。

(19a)は空間における「アイダ」の例である。認知科学的に「アイダ」がどの程度の間隔ならば適用されるか、などの細かな問題はあるが、空間位置を示す「アイダ」にそれほど複雑さもなければ、拡張される要素もない。しかし、これが時間要素をとる場合、やや複雑になってくる。(19a)に直接対応すると思われるのは(19b)だろう。この場合は、「正月」と「節分」という2つの「時点」に挟まれた時点を示す。他方、(19c)のように1つの動作、イベントをとることによって、「アイダ」はその該当する期間を広範に渡って指すことも可能である。日本語においては、(19d)のように、特定の時間を表す名詞の後に「間（カン）」をつけることで、(19c)と同じように期間を表すことが可能だ。この時に興味深いのは、(19c)や(19d)のように助詞を伴わない「アイダ」を用いる場合、基本的には指し示された期間をすべて覆う意味になるということである。

- (20) a. 私が仕事をしているアイダ寝ているなんて。
- b. 私が仕事をしているアイダに、誰かお客さんが来たでしょう。
- c. ?私が仕事しているアイダ、誰かお客さんが来たでしょう。

この用法は「アイダ」が「カン」や「マ」など読みが変わっても同様である。

- (21) a. 猛獣が獲物を捕らえる、そのカン僅かに2秒。
b. *猛獣が獲物を捕らえる、そのカンに僅かに2秒。
c. 鬼の居ぬマ洗濯。
d. *鬼の居ぬマ洗濯。

上記の(19a~d)の例では、その「アイダ」が「何のアイダ」なのかが認定しやすいが、(19e~g)に至っては、ついに「アイダ」を指定するに必要な「2つの時点」「幅を持つ期間」すら消えてしまう。(19g)は「アイダ」のとりうる「期間」のニュアンスさえあるのかどうか定かでない。このように、「アイダ」という語を例にとると、用法としては明らかに時間語彙の方が幅広いものになる。となると、この「アイダ」という語のプロトタイプの意味は時間要素の方、ということになり、初山の主張する「空間から時間への一方向性」の反例となるように見えるのである。

3.4. 時間語彙を巡る課題と両義的原義仮説

ここまでの先行研究の俯瞰を通じて、「時間語彙」と「空間語彙」を巡る考察に浮かび上がった疑問は、以下のようにまとめられる。

- ① 空間メタファーによる分析は、十分な説明能力を有しているか？
- ② 空間メタファーによる説明が有効であるなら、その射程はどの程度のものであるか。
- ③ 時間に独立な言語表現は存在するのか。また、存在するとしたらどのように表れるか。

このような問題に対し、寺崎 (2009) は、新たに「両義的原義」という概念を提唱して解決を図っている。以下にその概要を記述し、改めて検討を行うこととする。

3.4.1. 時空間推義

まず、「両義的原義仮説」を提唱するために、その元となった国広 (1997) の「時空間推義」という考え方を取り上げる。

3.4.1.1. 多義語の意味分析の方策としての時空間推義

初山らの研究同様に日本語の多義語や語の意味の派生について言及したもう1つの研究として、国広 (1997) をとりあげる。この中で国広は、「時空間推義」という概念を提唱し、その中では時間

と空間、そして「現象、物」という3者の関係を、ある種平等な関係にあると捉えている。

「時空間推義」は、ある物事と、それを必然的に取り巻いている空間と時間三者の間を注意の焦点が移動する結果生じる派生的意味を指す。(中略) この推義の枠組の中では、現象、時間、空間のどれから出発しても構わない。

(国広 1997:218)

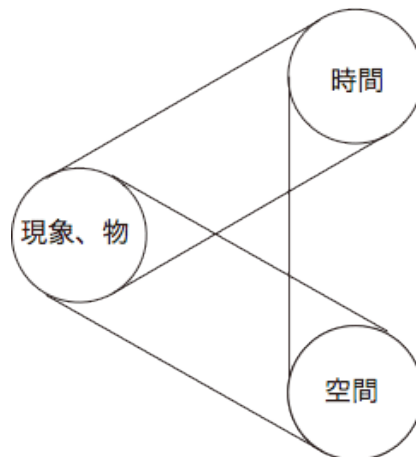


図6 「時空間推義」の図式 (国広 1997: 218)

この中で、国広は複数の語の意味派生について、こうした「時空間推義」が働いた結果であると述べている。以下に名詞「雨」の例を抜粋する。

最初に「雨」という語が生まれた時、“降雨”という現象そのものを指したに違いなく、現在でも我々がまず意識するのは降雨現象であろう。(中略) 次に時間の流れの中で捉えた時、<雨の降る日>が出てくる。「雨の翌日は空気がきれいだ」とか、「ひと雨ごとに暖かくなる」というのが「雨」の時間的用法である。現行の辞典での記述はここで終わりであるが、実はもう一つ空間を視野に入れた用法がある。

<雨が降っている戸外>

これは、「雨の中に傘もささずに出て行った」という場合の意味である。このように、「現象・具体物—時間—空間」の間を注意の焦点(=認知焦点)が移ることを「時空間推義」(space-time metonymy)と呼ぶことにする。

(国広 1997: 52)

この他、「夜」や「日」などの語も具体例としてあげ、様々な語が、時間と空間という2つの要素で意味を分化している様子が伺えるとする。また、国広は同書の中で、これとは別に「時空比喩」

というカテゴリも設けており、「空間的な事物は目に見え、時間は直接には目に見えないので、『空間→時間』の比喩の方が基本的である」と述べる一方、空間と時間は非常に密接に結びついているので、多くの時空比喩は歴史の最初から見られたのではないかと推察する。具体的には、「流れる」「続く」などの語をあげ、歴史的証拠から「流れる」は空間からの比喩であるが、「続く」は時間義からの比喩ではないかとも述べている。

3.4.1.2. 時空間推義への疑問点

時間と空間の意味の間に横たわる「現象」の存在を視野に入れる点で、こうした「時空間推義」は意味の結びつきに重大な意味を持つと考える。その上で、国広の主張に残された問題点は、1つは「現象・物」という対象をどのように捉えるのか、ということであろう。「時空間推義」の図式（図6）では、ここで「現象・物」として扱うものが「空間」とは別の次元で語られることになる。また、「推義」と名付けた現象と、「比喩」として扱う現象の線引きがどこで行われるのかということも、これまでの議論と結びついて無視出来ない問題である。例えば時空比喩の一例としてあげた「続く」の意味内容は以下のように2つの比喩関係から与えられるとまとめている。

<続く>

- ・(主語の指すものが) 時間的に切れ目なく認められる。
- ・(主語の指すものが) 空間的に切れ目なく認められる。

この時の時間と空間の関係性を、「どちらかの状態から片方の次元の意味に派生した」とする理由は今のところ無い。むしろ「時空間推義」の説明で用いられたように、あくまで記述に対する注意の焦点が異なることが、意味の差異に繋がると考える方が自然ではないだろうか。

3.4.2. 両義的原義

3.4.2.1. 事態把握に則った「両義的原義」の定義

以上のような「事態把握」に則った「現象」「時間」「空間」の3つの要素の関係性を焦点として、寺崎(2009)では以下のような時間観を大命題として提示して主題とした(図7参照)。この図において、まず、あらゆる事物の認知活動において、具体的な「事象(イベント)」に基づいた具体的な経験が動機として存在し、その「事象」そのものから得られる外界把握の総体を、「両義的原義(図中A)」として定義する。これは、2章で扱った「出来事によって知覚される、運動と不可分な時間」を想定しての設定である。これは「動きを伴わない時間は存在するのか」という疑問に対する最も素朴な解答でもある。つまり、運動を含む外界の状態は全て「時間」に依存し、それと同

時に時間という概念自体も、外界知覚によって与えられる瞬間的な「状態」に依存していることの現れである。つまりこの段階、「両義的原義」においては、その「事象」の持つ「意味」は多くの場合きわめて抽象的なものであり、そこにおいて「時間」と「空間」は未分化な状態であり、いわば国広の時空間推義の図式において3点の全てを内包した中央点と見なすことも出来る。そして、こうして得られた「両義的原義」から、改めて言語として「意味」を出力し、具体性を持って概念化する際に、その内に存する「時間的要素」と「空間的要素」のどちらに焦点を当てて「意味する」のか、という選択を行うことにより、ここから「状態義」と「時間義」に分化する（図中B及びC）。「時間義」は「時間的要素に焦点を当てた意味内容」であり、「状態義」は「それ以外の要素に焦点を当てた意味内容」である。ここで「時間義」に対応する要素として「空間義」としないのは、そこに空間的要素であるかどうか不確かなもの、事象、事物の内部状態や性質などの時間と関わりを持つと考えられるものも含むためである（「強い」「赤い」などの形容詞において顕著であろう）。そして、「状態義」と「時間義」が各々分化の度合いを強め、他方の要素を完全に含まなくなった場合には、これが特別に「完全状態義（図中D）」及び「完全時間義（図中E）」として定義されうる。ただし、こうした「完全な」意味内容というものは、あくまで理想化されたモデルの中に定義した1つの極点として存在するものであって、実際の言語活動の中で、そのような「理想化された意味内容」が現れるかどうかは、ここでは問題にしない。

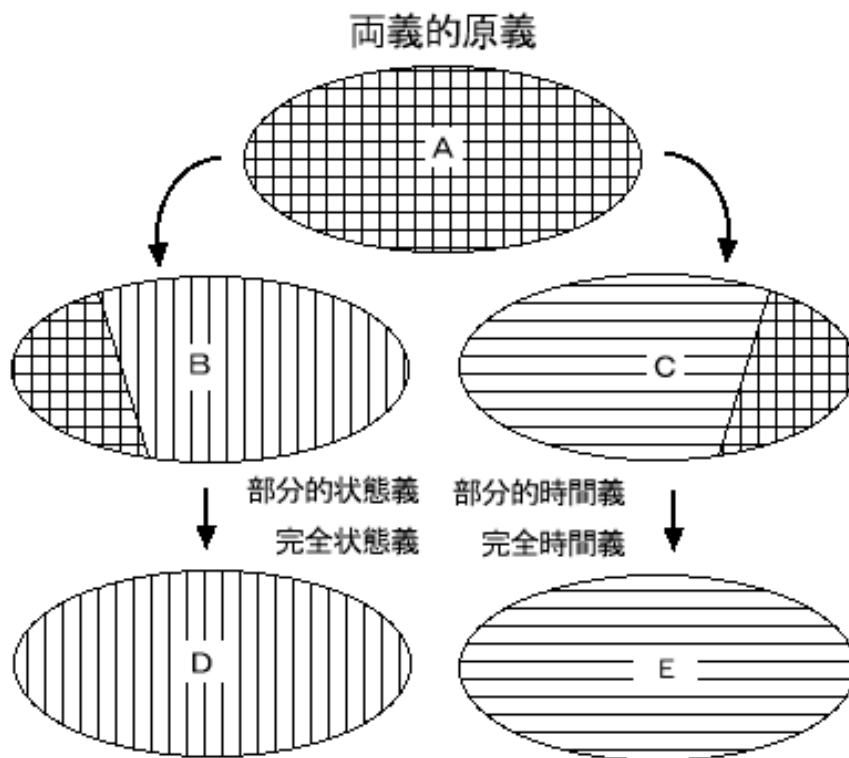


図7 両義的原義図式 (寺崎 2009)

3.4.2.2. 「両義的原義」の適用例

この両義的原義は、プロトタイプの設定を行わず、いわば曖昧な状態で意味要素だけを抽出し、空間のみに優位を認めずに意味記述を行うために設けられたものである。実際の用例について、どのように適用されるかを以下で簡単に確認する。まず、国広の時空間推義の説明でとりあげられた「雨」の事例であるが、この場合、具体的な現象「降雨」として与えられるのは、本質的に「両義的原義」である。「雨が降ってきた」の場合、そこに含まれる空間性は発話者のいる位置、与えられた情報の種類によっても様々であるし、時間についても同様である。この両義的原義から、時間要素に焦点を当てて「時間義」として「雨」を用いる場合が、国広のいうところの「雨の降る日」の意味となり、「状態義」として「雨」を用いる場合が、「雨の降る屋外」の意味になる。

(17a) 花子は髪を短く切った。

(18c) 質問に短く答える。 (再掲)

また、形容詞のプロトタイプの意味の項で扱った「短い」の意味についても同じように検証する。この場合に両義的原義がどのようなものであるか、という定義は困難であるが、そこにある種の「量的な少なさ」を仮定するならば、空間要素に焦点を当てた(9a)の例が「状態義」であり、時間要素に焦点を当てた(18c)が「時間義」として定義出来る。ここで注意すべきは、この場合に(18c)が「完全時間義」とされるかどうか、という部分である。この時の「短い答え」は、もちろん「短時間で終わるような、時間的に短い応答」とも捉えられるが、「返答の文字数を考えた時に、短い文章で事足りる返答」と考えるならば、そこには空間的な要素も含みうる。

3.4.2.3. 両義的原義図式の問題点

このように、空間のみに優位性を与えず、時間義・空間義に平等な意味分化を認めるのが両義的原義図式の特徴であるが、意味論的立場からの分析手法としては、根本的な問題を多く抱えていたのは事実である。

問題① 有効性の乏しさ

元々の出発点が空間メタファーの過剰汎化への懸念、メタファー理論の有効射程への疑問から生み出された図式であるため、基本的には「メタファーを用いない意味記述」のためだけの道具立てであるが、そもそもメタファー理論の適用自体が認知意味論や旧来よりの日本語学における説明方

策として作られたものであり、それを否定しただけでは、実際の現象に説明を付すことにはならなかった。

問題② 実証性の不在

「具体的な事象に基づいた具体的な経験が動機として存在し、その事象そのものから得られる外界把握の総体」が「両義的原義」であるとされるが、そもそもその「総体」の定義が曖昧であり、詰まるところは「はっきりしていない部分を曖昧なままに保留する」だけの枠組みになってしまっている。また、実際の外界知覚を考えた際、時間と空間が渾然一体となった知覚の枠組みというのは、想定こそされるものの、その実証を示すことは甚だ困難である。国広の「時空間推義」はあくまで焦点移動の問題として、自体認知の有り様に深く言及せずに説明能力を持たせているが、両義的原義図式においては、この「原義」の姿が示されないことには、論としての実証性に欠ける。

問題③ メタファー理論の有効性の捨象

そもそもの始点の問題で、メタファー理論は一切用いずに意味分析を行うことを目的としたが、これにより、過剰にメタファー理論を切り捨ててしまうことになってしまった。メタファー理論自体は人間の認知能力に根ざした重要な理論であり、これを一切否定することで、本来必要であったはずの概念までもが使用不能になる可能性がある。

問題④ 言語事象の無差別化

認知言語学の中だけに限定しても、様々な言語現象において、そこに立ち現れる時間の姿は多様であり、端的なところでは名詞・動詞といった品詞の差だけでも、そこに関わる時間の姿は等しく観察出来るかどうかは定かではない。両義的原義図式の場合、そうした対象の性質を考慮せずに全てを同じ尺度にしてしまうため、細やかな分析には不適當である。

以上のような多くの問題点を顧みて、両義的原義図式の「時間と空間を含めた外界把握の総体」という未分化な事態把握については変わらず意義があるとみるが、実際的な現象を取り扱う際には、より細密で具体的な説明能力を付加させる必要があることが分かる。以下、本論での視点と、次章以下での分析の方策について述べる。

3.5. 本論の視点と主張

3.5.1. 時空間関係の要素別検討

寺崎 (2009) においては、主に「空間から時間へ」「時間から空間へ」という視点から大きく2つの事例を取り扱うことで時空間関係を平等に見ることが可能であるという論旨を構築したが、本論においては、事前に時空間の区別をなくし、旧来よりの品詞論により、いくつかの言語カテゴリを総覧する方法を採用する。具体的には、以降4章において主に名詞カテゴリと呼ばれる事例、5章以降では加えて副詞を扱う。品詞論は現在においても議論の分かれるところであり、個々の言語事例を品詞というカテゴリで明確に分けることは困難であるが、実際に各々の語の実例を参照し、それぞれの用法に時間的要素がどのように関わるかを観察することで、改めて品詞の分化に対する洞察を得ることも可能であると考えられる。また、予めおおよそのカテゴリ分類を行ってから各カテゴリを扱うことで、「両義的原義図式」で浮かび上がった問題点④「言語事象の無差別化」の問題がある程度は緩和されることも期待されるだろう。

3.5.2. 「順序」の重要性と両義的原義の維持

本論において、寺崎 (2009) の「両義的原義図式」のように明確な主張の中心を設けるとするならば、それは**時間の持つ順序性**の主張ということになる。これまで2章・3章であげられてきたいくつかの主張から、「時間とは何か」という茫洋とした問いかけに対する唯一の回答としては、「時間とは順序である」という啓示が得られ、これこそが、言語現象や言語哲学を総覧する上で必要な問題意識であると考えられるためである。

時間とは変化相互間の依属関係である、というのが私たちのなしうる唯一の回答です。私たちがひとたび適切な変化、たとえば地球の公転軌道上での位置を比較の基準に選べば、ありとあらゆる変化がこの一つの変化に依属するものとしてしめされます。(Mach 1977: 153) (再掲)

時間と空間の本質は物理学的対象の順序関係に存するのであり、その順序関係は私たちによって持ち込まれるばかりでなく、現象の内部連関や密接な相互依属関係の中にも存立しているものだ。(ibid.: 165) (再掲)

空間のドメイン内には線、角、湾曲の概念が、視覚のドメイン内には明るさや焦点色の概念が、時間のドメイン内には順序の先行性の概念が、そして運動のドメイン内には筋肉の力を使うといった概念が、最小の概念として存在している。(Langacker 2008: 42) (再掲)

また、碓井 (2001) においても、はっきりと結論が出たわけではないものの、「順序」という要素は無視出来ない重要性を持つとの指摘があり、言語表現に立ち現れる時間の姿を捉えるためには欠

かせないものであることが伺える。

筆者は「順番」という概念はひとつのドメインを確立するほどに非常に言語において重要な概念であると考えている。その根拠としては英語や多くの言語において「順番」を表す「序数」が存在すること（e.x.”first” ”second” “third”）さらに時間や年月といった我々と密接な関係を持つ概念にも「順序」が使用されているためである。（例 12月とは1月から数えて12番目の月である）（確井 2001: 31）

具体的に「順序」（順番）という要素をどのようにして分析の要とするかは、それぞれの言語事例にあたって改めて考える必要があるが、本章で取り上げた問題に即して概説してしまえば、上の引用で確井の述べた「順序のドメイン」とは、それ即ち「時間のドメイン」そのものであると言ってしまってもいいのではなかろうか。「順序性」というものが時間にオリジナルに与えられた性質であるならば（マッハの言葉で換言すると、「変化相互の依存関係」が時間と空間の本質であるならば）、これはメタファー理論において、時間要素をソースドメインに用いることが可能になり、「空間から時間へのメタファー表現」と「時間から空間へのメタファー表現」の双方が存在可能であるという可能性を示唆するものである。また、時間の本質を「順序」に見るならば、時空間推義における焦点化においても、時間要素の何が焦点とされるのか、という問いにも答えが得られるだろう。「順序性の実存」については実証が困難であると考えられるので、実質的に問題点②であげた「実証性の不在」については根本的な解決には至らない可能性が高いが、それ以外の問題点、①「有効性の乏しさ」については、順序性という1つの性質を基にした一貫した説明力を持つことで様々な要素に対応できるようになり、理論的な存在価値が上昇する。

3.5.3. 「両義的原義」の意味づけの再考

両義的原義を維持するとは言っても、問題②「実証性の不在」が解消されない限り、本論はその屋台骨が揺らいだ状態にあることは事実である。また、問題③の「メタファー理論の有効性の捨象」は、「両義的原義仮説」の設定が大きな歪みを生むことの端的な表れであった。そこで本論においては、「両義的原義」の存在はあくまでも「人の事態認知の起点」とであると想定するにとどめ、そこからの「具体的な言語としての意味の創出」については、メタファー理論で説明される様々な操作が起こることを認める。元来の「両義的原義」は「時間と空間がヒトの認知において等しい地位を確立すべきである」という理念により捻出されたものであるが、改めて線引きが求められるのは、事態の受容と、そこから実際に行われる言語の創出、意味の産出である。つまり、「両義的原義仮説」で取り上げた通りに、ヒトは事態を空間・時間といった区別無く、渾然一体とした総体で受容

していることは引き続き前提条件として認めるべきであると考え、そこから新たに生み出される言語という実体については、この「時間と空間の等位性」が維持される保証は無いということである。ことに「具体性の強い空間と抽象性の高い時間」という対比構造は無視できない差分であり、空間語彙と時間語彙の産出に多分に影響を与えるものである。このことは、前述のメタファー理論やプロトタイプ理論を巡る議論にも典型的に表れており、言語全体における量の問題を考えた場合、空間語彙が圧倒的に多く、具体性を持ち、そのことが写像関係にも影響を与えることは事実である。しかし、本論における「両義的原義」の存在は、そうした空間と時間の関係性はあくまでも「差異」であることを指摘し、一方向性が確定的なものではないことを示唆するためのテーゼである。時空間に分け隔てて考えられていた要素が元来は複合的に与えられるものであったことを前提とし、全てのメタファー関係が一様に決定するわけではないことを指摘するに留めることで、メタファー理論などが言語産出において重要な役割を果たすことを認めながら、その一部に、時間の扱いについて齟齬が存在する可能性を指摘するものになる。

3.5.4. 本論の取り得る射程

以上の「要素別に検討する」「時間に固有の性質として『順序性』を取り上げる」「両義的原義仮説をあくまでも事態認知の在り方のモデルに留める」の3点を定めることにより、本論は寺崎(2009)の課題となった問題点のいくつかを解消出来ると考える。問題①「有効性の乏しき」については、時間知覚の骨子として「順序性」が与えられることで、時間という独自の次元で特有の変化を見せる時間語彙の姿を捉えることが可能になる。また、意味の分析においても、順序性がどのように関わっているかという視点から俯瞰することにより、元来「両義的原義」に与えられていた「時間義」がどのように言語の意味として立ち現れるかをより仔細に分析することが可能になる。

問題③「メタファー理論の有効性の捨象」については、両義的原義を言語産出のための理論として扱わず、受容のメカニズムであると認識するに留めることで、実際の産出の一部に関わるものとしてメタファー理論を取り入れることが可能になる。また、特定の語彙の意味を分析し、どこまでが「時間的な順序性に依拠するもの」でどこまでが「メタファー的な写像関係にある」かを見ることにより、時間と空間の関係性をより明確に見定めることが可能になる。問題④「言語事象の無差別化」についても、要素別の検討を行うことで視座が定まり、「両義的原義」の存在を探る上での1つの方向性を示すことができる。

唯一、②「実証性の不在」に関しては、本論では明確なサポートをするには至らない。「ヒトがどのように外界を知覚するか」を言語の事例のみから見定めることは困難であり、あくまでも「仮説」の域を出ない。しかし、ここで重要になるのは、「ヒトがどのように時間を認知するか」という問題ではなく、「ヒトがどのように時間の中で実際の体験を知覚するか」という経験のプロセス

の問題である。本論では、以下の4章以降で「時間に固有と思われる言語の意味産出」の事例をいくつか検討していく。ここでは、ヒトが事態を「経験」する上で、時間そのもの、つまり出来事の起こりの「順序」を必然的に受容し、Langackerのいうところの最小の概念（minimal concepts）として最も重要な基盤としていることを提示できるものであると考える。そうなれば、その背後にある「両義的原義」の存在を幾らかでも示唆出来るのではないだろうか。

3.6. まとめ

本章では、2章で取り上げた古典的時間観を踏まえた上で、認知言語学的な道具立てで時間をみるときの方策をいくつか概観した。まずは時間関係以外にも全般的な基礎理論となる「基本ドメイン」の概念や「イメージ・スキーマ」などを取り上げ、それらの概念がどのように時間を措定し、必要としているかをまとめた。個々の先行研究で時間のとらえ方には差はあるものの、認知主体の知覚に表れる時間に注目する点は共通しており、様々な概念形成に時間との関わりが観察出来る。そして、具体的な表現としての「時間」を取り扱う上で欠かせないのが、3.2. 節で取り上げた空間メタファー理論であった。メタファー理論の取り得る射程に関しては未だ議論のただ中にあり、本節の扱いでは不十分なものであるが、本論では最終的に時間の独自性について焦点を定めることが目的であるため、メタファー理論についてはいくらか制限を施しており、それがどの程度の規定であるのかをここでまとめている。こうして検討される「メタファー以外の言語派生の方向性」については、後の4章、ならびに6章などで具体的に提示する。また、3.3. 節以降は具体的な語彙の問題に絞り込み、多義語のプロトタイプ分析という手法についてもその根本的な目的意識と意義を確認し、空間を基にした一方向的な分析についての疑問を提示している。

そして3.4. 節では、既存の理論の理解を深めるための一助として、寺崎 (2009) で主たる論旨となっていた「両義的原義図式」をとりあげ、改めて妥当性を検討した。「原義」という名称は未だ曖昧さが残るが、そこに「時間固有の性格」が何であるかを具体的に設定し、時間意味が立ち現れる際の制限、時間のみが持ちうる権限などを絞り込むことで、明確な「時間ドメイン」の性格を与えている。本論の主たる論旨としてこれを「順序性」という言葉でまとめ、以降の章においても、この「順序性」を重視しながら見ていくことになる。また、あくまでも受容のメカニズムとしての「両義性」を規定するものであり、そこからの産出のメカニズムについては、別次元での分析が求められることについても言及している。

以降の章においては、本章で取り扱った個別の語彙について、品詞という区分けを手がかりに具体的な分析を行っていく。始めに取り扱うのは本章でも中心となった名詞カテゴリであるが、「時間と空間」というキーワードとの関わりの中で、名詞が助詞との繋がりを持つ場合や、副詞として扱われる場合など、様々な派生を観察していくこととする。

第4章 名詞カテゴリにおける時空間認知

この章では、いくつかの言語要素に表れる時間の性質を観察するための一視点として、名詞カテゴリを取り扱う。品詞による区分は多言語に渡った研究では曖昧なものになりがちであり、日本語研究に絞ったとしても意見の分かれるところであるが、ある程度対象を絞り込むため、4.1. 節では「名詞カテゴリ」の外延をなぞるべく、基本的な設定がどのように行われているかを概観する。4.2. 節ではこうして得られた典型的な名詞カテゴリに含まれる語群についても、その表示対象によって様々な時間との関わり合いがあることに触れる。具体的には、典型的な名詞カテゴリとしての概念原型をかたどる空間的・物質的な名詞群においても、文章の中での叙述に関わって、そこに時間的な働きが観察出来ることに触れる。4.3. 節以降では、より境界的な事例として、日本語の「サキ」を取り上げる。寺崎 (2009)でも中心的に取り扱った対象であるが、改めてその時空間での振る舞いを精査する。4.4. 節ではこうして洗い出された「サキ」の意味について「両義的原義図式」で取り扱った分析を再検討し、改めて本論における立場から「時間に独自の意味内容」を提唱、定義していく。

4.1. 名詞カテゴリにおける時間定義

本論では便宜上、本章以下5章、6章と、典型的に品詞と呼ばれるカテゴリの分類をひとつの基準として個々に分析を行うことになるが、時間というテーマを扱う関係上、ことに各カテゴリ間の分類には線引きが難しい部分もあり、多分に境界的な事例を扱うことになる。しかし、何をもって品詞とするかという定義を定めないことには基点も定まらないため、先んじて「典型的な品詞カテゴリ」について概観しておく。本節では Langacker のあげた名詞のプロトタイプ・レベルについて確認し、その概念が実際に日本語の名詞にどのように適用されるかを見ることで、そこから時間へと論を進めるための起点としたい。

4.1.1. 名詞のプロトタイプ・レベル

Langacker (2008)においては、あらゆる概念はスキーマ・レベルで意味的に特徴付けられるものであり、このスキーマから経験を経て産出される概念原型から、文法概念のプロトタイプ・レベルが形成されるとしている。最終的にスキーマ的な特徴付けがどの概念にまで適用できるかという問題は残されているが、名詞や動詞といった品詞概念はスキーマ的な特徴付けが成されており、各々にプロトタイプとして機能するモデルが存在しているという。以下に挙げられているのが、名詞につ

いての概念原型である。

(22) Langacker (2008)における名詞の原型(Langacker 2008: 132)

- a. 物体は物質 (material substance) により構成される。
- b. 物体は、主として空間に存在し、空間内で境界を持ち、独自の位置を占めるものとみなされる。
- c. 一方、物体は時間的に永続するかもしれないが、時間ドメインで特定の位置を占めるとは考えられない。
- d. 物体は、参加するどのような事態とも独立して概念化出来るという意味で、**概念的に自律**している。

この設定から分かることは、典型的な名詞と呼ばれる概念は(22c)の条件を満たすために、本質的に時間との関わりを持ちにくいということである。このことは、先にあげた非プロセス関係の表示図式からも明らかであろう。

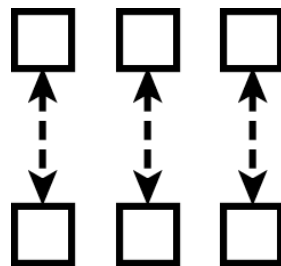


図2 存在と存在の複雑な非プロセス関係 (Langacker 2008: 126) (再掲)

しかし、本論で取り扱う名詞の多くは、こうした名詞の典型的範疇からは逸脱したものが多く、その領域は時間ドメインまで拡大して捉える必要がある。

4.1.2. 名詞と時間ドメインの関わり

Langacker が名詞の原型としてあげた典型的な名詞類というと、(22a) (22b)の条件を満たす物質的、空間的な存在物ということになる。日本語に寄せて例を考えるなら、以下のような名詞群があげられるだろう。

(23) 具体物を表す名詞カテゴリ

〔私、ビール、橋、机、右手 etc〕

これに対し、概念原型では名詞と対極に位置するとされるのが動詞であり、この動詞との関わりを持つ名詞類は、それぞれに時間要素を内包するものとなる。例をあげるならば、動詞を名詞化したもの、サ変動詞として取り扱えるものなどである。

(24) 動詞からくる名詞カテゴリの例

〔芝刈り、皿洗い、小走り、平泳ぎ、蹴り、怒り etc〕

(25) サ変動詞として用いられる名詞カテゴリの例

〔旅行、会議、挑戦、印刷、避難、現実逃避 etc〕

これらのカテゴリについては、動詞との関係性において議論されるべき対象であろうが、本論では立ち入った議論は行わない。それ以外では、直接的に事態を指示する名詞類も存在する。これらにも直感的には程度の差があり、直接的に時間そのものを示すカテゴリや、イベントを表示する名詞のカテゴリなどがある。

(26) 時間そのものを示す名詞カテゴリ

〔8月 来年、20分、今 etc〕

(27) イベントを表す名詞カテゴリ

〔運動会、総選挙、結婚式、休日 etc〕

本章では、こうした「時間を示す名詞」の様々な振る舞いの中から、判断の難しい事例をいくつか取り扱い、名詞というカテゴリの中でどのように時間性が立ち現れるのかを見ていくこととする。

4.2. 時間語彙と空間語彙の差別化

時間性を観察すると言っても、何をもって「時間的であるか」という定義は非常に困難であり、各々の語彙や用法に、「一定の尺度で時間的である」という認定を与えることはほぼ不可能である。例えば上の (25)の例であがっている名詞群にしても、「会議」と「避難」ではそこに感じられる時間性に差が生じている可能性もある。このように「時間性」という曖昧な言葉ではあるが、一定の意味を与える必要があるため、本論における「時間性」「空間性」の意味を確認しておく。

4.2.1. 意味分布の揺れと偏り

まず、3章でも提示した「両義的原義図式」に則ってこの問題にトップダウン的な仮説を与えるとするなら、空間語彙・時間語彙という区分をデフォルト値として語彙自体に与えられることは困難である。あいまいな言い方になるが、あくまでその語が用いられたその場の意味において、その語に現れる「時間的な要素」「空間的な要素」に大小が生じているのみである。以下の例を見よう。

- (28) a. 郵便局は駅の前にある。
b. 「相原」はあいうえお順だと一番前だね。
c. 前から気になっていたことがあるんだ。

(28)の例では、同じ「前」という語を用いているが、(28a~c)と、そこに現れる「時間性」「空間性」に差異が感じられる。(28a)で用いられる「前」は空間的な要素を指示する意味合いが強く、(28b)はやや微妙である。(28c)になると、時間的な意味合いが強くなっていく。このように、1つの語彙においても、そこに現れる「時間成分」「空間成分」はまちまちであり、実際の使用によって割合が変化する。「前」という名詞について、それが本質的に時間的であるか、空間的であるかという問いに対しては、注意を払う必要があるだろう。他方、(23)のような具体物を表す名詞カテゴリは Langacker の概念原型に従って物質的であり、時間性に乏しい空間語彙に認定されやすく、(26)の時間そのものを示す名詞カテゴリの場合には、名詞という品詞カテゴリに属しているが、こちらは時間要素の高い語彙と認定されやすい。

4.2.2. 典型的名詞カテゴリに表れる時間性

時間成分による意味分化の見方は、どのような語彙においても、そこには何らかの時間性を含むことを認めることになる。それは典型的名詞カテゴリとされたような語群にも例外ではなく、事態把握の有り様によっては、名詞そのものが何らかの事態を表すために用いられる用例というものも存在する。本章の以降の分析においては具体的にいくつかの語に絞って観察していくことになり、こうした時間性の表れ方を取り扱う機会がないため、ここでその事例について触れておく。

4.2.2.1. 「Nが始まる／終わる」テスト

典型的名詞カテゴリにおける時間性を探るために「始まる」と「終わる」という動詞との接続に関する調査を行った。何故「始まる／終わる」であるかということ、「Nが始まる／終わる」「Nの始まり／終わり」といった構成にした時、必然的にNにおける時間性が現れるのではないかと考えられるためである。山梨 (1995)においては、「時間による空間叙述」という題材でこのような現象を

取り扱っており、標準的な名詞意味からは表れないはずの時間的要素の介在について、以下のよう
に述べている。

一般的には、時間的な概念は、空間的な概念による叙述を通して理解されるように見える。し
かし、逆に空間的な概念が、時間的な概念によって叙述される例も存在する。(山梨 1995: 227)

(29) a. The field begins here and ends there.

- b. この間からみると、池の水は見えるが、どこで始まって、どこで終るか一応廻った上で
ないと見当が付かぬ。(『草枕』:118)
- c. 笹藪が墓地に変わり、石段がおわった、そのすぐ右隣…(安部公房:『燃えつきた地図』:
188)

これらの事例は「時間表現の“begin”や『始まる』『終る』といった動詞が空間的な領域を限定す
る叙述に使われている」事例として紹介されており、動詞の働きが空間を指示するものとして観察
されている。このような事例が一般的であるならば、こうした用例が他にもあるかどうかをコーパ
スで確認し、特定の動詞の関係する名詞の性質を伺うことが出来るだろう。実際に「Nが終わる」
という形式をコーパスで検索すると、そのほとんどが上記の(24)~(27)のカテゴリーに含まれる名
詞を取っており、「時間成分を含む名詞」の、特定時間が起動、終了することを示している。ただ
し、一部そうとも言い切れず、(23)のような具体物を表す名詞をとる「Nが始まる/終わる」形式
も存在している。実数で表すと、「Nが終わる」形式は全登場例約 1.300 例⁷のうち、10 例弱がこの
用法に当てはまる。

- (30) a. どれほどの高さなのか、下界は朧にかすんでいた。仙界という言葉が脳裏をかすめる。
長い坂が終わり、前方に冠木門が見えてきた。崇高さを感じさせる構えだった。
- b. 僕はだんだん胸苦しくなってきた。知らず知らず無口になり、そわそわしてポケットの
中の小銭を何度も数えたり、ハンカチで何度も口もとを拭いたりした。早くクラゲの水
槽が終わってくれればいいのにと祈った。
- c. はじめてこの話を聞いたとき、ぼくもちょっとびっくりした。でも、やってみると本当
なんだ。そう思って水平線を見つめると、たしかに、あそこで海が終わっているように
錯覚する。

⁷ 以下の事例は全て「日本語書き言葉コーパス」より。

各々全体数に対する用法の割合から考えると、「始まり／終わり」のベースとなる用法が時間的な特徴を表していることは確実である。その上で、(30)の「終わり」が意味するものは何なのか。まず、(30a)の用法は、この「〔具体名詞〕が終わる」形式の中でもよく見られるパターンで、場所名詞をとるものである。他の例には「青森市の市街が始まる」「湿原が終わる」「木道が終わる」などの用例が確認出来る。こうした「〔場所名詞〕が終わる」形式に共通するのは、その中に「移動」の文脈が強く喚起されるということである。(30a)で言えば「長い坂道」を上ったり下ったりして、「坂」でない場所に出ることを意味するわけで、そこに現れるのは「坂」と関わる主体の「動き」による時間成分である。こうした「〔場所名詞〕が終わる」形式は「終わる」によってかなり強力に「移動の文脈」を起動するため、(30b)のように、一見すると「移動」することの一般性が低い名詞においても、同じような意味を持たせることになる。分かりにくいのは(30c)の例だろう。この例の場合、流石に水平線に向かって「移動」して「海が途切れて別なものになる領域」に移動するイメージは想起しにくい。似たような例には以下のような表現もあり、「時間成分」との兼ね合いが難しいところである。

(31) しかし、まだまだ序の口、「これではいけない」と自分にいいきかせ、もうひと頑張りすると、ドームの天井が始まる中間の回廊に出ることが出来た。

(31)は、移動の文脈を含むとすると「どこか別な領域から天井に入る」ことが要求されるが、形状を考えるとそれも困難である。あくまで「壁と天井の切れ目」を示して「ドームの天井が始まる」と表現しているのである。

4.2.2.2. 「Nの始まり／終わり」テスト

以下のような「Nの終わり」形式は、約340例中、10例弱である。

- (32) a. どうやら、男風呂の方は、五、六人の団体客が入っているようだった。中庭の終わったところに、折戸があって、白い猫は、その折戸の下を、くぐって、消えてしまった。
- b. 能登の雪は、越後の雪とどう違うのやらん。このことを貞信に聞くわけにはゆくまいが...雪の終わりは、つららのとける音や小鳥たちの騒ぎでわかる。
- c. そして年末も近く、この手紙の終わりは、ご家族ご一同様のご健勝とご多幸を祈ります。とあった。

(32a)は上記「Nが終わる」とほぼ同じで、「中庭が終わったところ」としても問題無い表現。「と

ころ」と共起していることから場所的な意味合いが強いことが分かり、さらに、「中庭」は「坂」「木道」などの直線的な移動を喚起しにくく、移動による「終わり」がイメージしにくい(30c)に近い例である。他方、そうした「[場所名詞] + 終わり」の例とは一線を画するのが(32b)である。「雪」自体は具体名詞なので時間成分を感じさせにくい、これに「終わり」がつくことによって「降雪」という事態のイメージが喚起される。「雪」という名詞自体に、それと接する認知者の時間的経験が裏付けられていることの証左といえる。そして、場所名詞と同様に頻度の高い「Nの終わり」に、(32c)のような「特定のテキストの終わり」がある。このほかにも「宣言文の終わり」「記事の終わり」などが確認出来る。こうした例の場合、「空間要素/時間要素」という分け方が微妙になるが、「テキスト」の場合、そこには必ず「読むこと」「書くこと」などの特定方向を持つ動作が関係する。この時、「坂の始まり」などが表示する移動のイメージ同様に、何らかの動作に伴う時間変化がサポートされることにより、これらの例に時間成分が立ち現れることになる。

こうして単語レベルではなく文レベルでの視点からは、物体名詞にも何らかの時間的要素が介在すると解釈することが可能であるが、次節からの分析については、なるべくこうしたレベルでの時間要素については取り扱わず、語レベルでの名詞内部の時間要素の表れ方を精査していくこととする。

4.3. 時空間に派生する「サキ」の分析

本節以下では、日本語の「サキ(先)」という語を例にとり、この「サキ」がどのように時間語彙、および空間語彙として用いられ、それがどのように関係しあうかを検討する。「サキ」については寺崎(2009)で中心的題材として扱ったものであるが、改めて、その振る舞いが時間の持つ本質である「順序性」とどのように関わってくるかを分析する。

4.3.1. 空間を表す「サキ」の分析

名詞「サキ」を取り扱った先行研究の多くは、その分析を「時間のサキ」と「空間のサキ」に分けて行っている。これは、3章でも見た空間メタファー理論の前提が根強いためであり、Source Domain と見られる「空間のサキ」の分析から、Target となる「時間のサキ」を指定する試みである。本論でも、この分類に則り、第一に「空間のサキ」の研究を概観する。

4.3.1.1. 現象素を用いた「空間を表すサキ」

サキという語には、様々で、時には互いに矛盾するかなのような多義が含まれるが、国広(1997)

ではサキという言葉の現象素⁸を1つ定め、これと視点の位置を組み合わせることで、統一的な説明を試みている。ここで提示された現象素とは以下のようなものである。

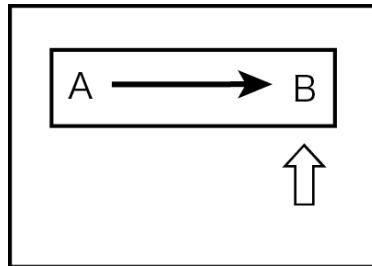


図8 「サキ」の現象素 (国広 1997: 250)

図8の中で、白抜きの矢印(↑)で示したのがサキの部分である。そして黒い矢印(→)は事物の「方向性」を示すとする。この「方向性」には2通りの場合があり、1つは、物が形の上で方向性を示す場合(槍のサキ、ペン先、など)。そしてもう1つは、形の上では両端に変わりがなくとも、全体が一方向に進んでいる場合(サキを切って走る、行列のサキ、など)。つまり、この現象素の示す「サキ」の必要条件は、「形」もしくは「動き」であるということである。さらに、この図8の派生形として以下のようなものも提示されている。

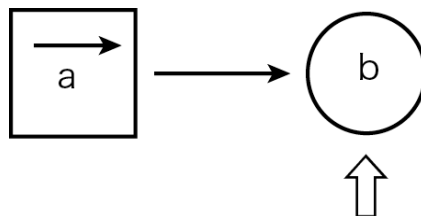


図9 「サキ」の現象素の派生 (国広 1997: 251)

図9は、移動体の全体から移動方向に投射された外部に、指示の矢印(↑)が向く場合もあることを示すものである。この場合、指し示されたbは単なる空間、位置の場合もあるし、具象化、時空間推義を受けて物体や人間となる場合もある。

- (33) a. このサキ行き止まり。
 b. 旅行サキ、主張サキ

⁸ 「現象素」とは、「語の用法と結びついた外界の現象・出来事・物・動作など、感覚で捉えることの出来るもので、言語外に人間の認知の対象として認められるものである」との説明が付されている。(国広 1997:176)

c. 霧で10メートルサキも見えない。

こうした例では、図中aで示されたものは基本的に移動体であることが前提となるが、(33)の場合は、必ずしもaが移動体ではない。しかし、移動しない場合でも視線がaからbに伸びていると考えられるので、これが移動となる。厳密に言えば、「移動体から見て前方の遠い所」という語義になる、とある。

4.3.1.2. 認知言語学の枠組みによる「空間を表すサキ」

碓井 (2001)では、国広の現象素による分析の有効性を全面的に認めつつ、さらに認知言語学の道具立てである参照点構造を用いて、より詳細な「サキ」の語義記述を行っている。まず、碓井は「サキ」を決定付ける要因として、以下の4つを取り上げている。

(34) 「サキ」を決定付ける要因

- ① 細く長いもののスキーマ
- ② メンタルパスの方向性
- ③ モノの形状（先端が尖っている等）
- ④ モノの移動性

(碓井 2001: 54)

1つ目の要因は「細く長いもののスキーマ」である。私達が「～のサキ」という語を用いた場合、「細く長いものの先端」というイメージが自ずと想起される。それはこれまでの経験から、私達があるモノの「サキ」という場合、その対象は長く、細いという形状を持ち合わせていることが大多数であることによると考えられるためである。この喚起されるイメージを「サキ」の重要な要因の1つとして認める。このスキーマの重要性は、以下のような例から確認出来る。

(35) a. *じゃがいものサキ

b. ?なすびのサキ

c. きゅうりのサキ (ibid.: 55)

(35)の例では、「じゃがいも」のような丸いものは「サキ」と共起することが出来ないことを示す。一方、「きゅうり」のように細く長いもの場合は「サキ」と共起することが可能である。いくらか特殊な事例としては、「行列のサキ」などの例があげられる。これについて、国広 (1997)では「形の上では両端がなくても、全体が一方向に進んでいる場合である。形は縦長で、進む方向は縦方向

でなければならない」(国広 1997: 251)と述べられているが、これに対して碓井 (2001)では「『行列のサキ』は全体が一方向に進んでいない場合でも使用可能である。従って『行列のサキ』の場合、国広が指摘するように全体が一方向に進んでいる必要はない」(碓井 2001: 58)と述べ、その根拠として以下の例文をあげる。

- (36) 開店前の店の前には 300m の行列が出来た。その行列のサキはここからでは見えない。
(ibid.: 58)

この場合、行列自体に移動する要素が無いにも関わらず「サキ」が使用可能であり、これを(34)の②であげた「メンタルパスの方向性」と密接に関わっていると位置づけた。「細く長いもののスキーマ」で示された「サキ」の例は、物体もしくは空間の形状上、視覚的に明らかな形で「サキ」が認識出来るものであった。これらは「サキ」の事例の中では具体的なプロトタイプ事例であるとする。一方、「サキ」は視覚的に「細く長い」ものでない場合でも用いることが可能であり、この場合に要因となるのが「メンタルパスの方向性」である。具体例としては、以下のようなものがあげられている。

- (37) a. サキの車
b. 京都のサキ
c. 行くサキザキ (ibid.: 59)

こうした事例を、さらに3つの下位分類に分けると、以下のようになる。

- (38) メンタルパスの方向性を持つ「サキ」の3分類
(イ) メンタルパスの方向性によって決まる「サキ」の指し示すものが物体の場合
(ロ) メンタルパスの方向性によって決まる「サキ」の指し示すものが空間の場合
(ハ) メンタルパスの方向性によって決まる「サキ」が繰り返されることで時間性が高まるもの (碓井 2001: 59)

(イ)は具体的には「サキの車」や「三軒サキの家」などの、認知主体がターゲットに投げかけるメンタルパスの方向性が物体に向かっている場合であり、これらは動く場合も動かない場合もある。(ロ)は「京都のサキ」のようにターゲットが漠然とした空間を指す場合で、この場合のターゲットは言語として明示化されていない。(ハ)の「行くサキザキ」のような場合は分類がやや不明確で、

「サキのサキに行く」「サキのサキを読む」など、繰り返し用いることで時間表現の解釈も得られるとしている。

最後の要因である「モノの移動性」が関わる例としては、以下のものがあげられている。

(39) サキの車両 (ibid.: 59)

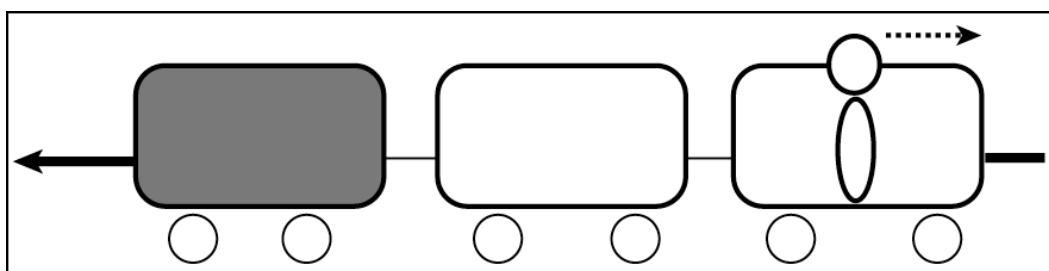


図 10 サキの車両 (ibid: 62)

(39)のように「サキ」を含むもの自体に動きがある場合には、認知主体のメンタルパスの方向を問わず、そのもの自体の移動方向の先端を指すのにも用いることができる。

4.3.1.3. イメージ拡張からの「空間を表すサキ」

篠原 (2008)においては、『「サキ」の空間用法は時間用法の前提となる』と前文をおいた上で、「サキ」の空間用法に触れている。その中では、辞書の意味記述を参考として、「サキ」の第1義に「ものの先端や末端、つきでとがっている部分。はし」を認める。

- (40) a. 釘のサキが曲がった。
- b. 紐のサキを結ぶ。(篠原 2008: 190)

これに対し、指示範囲が拡張し、物体の先端部分の周辺の空間を指す用法を2つ目の分類とし、これは国広の2分類に同じである。

- (41) a. 鼻のサキをハエが飛び回っている。
- b. 矢印のサキに目的地が書いてある。(篠原 2008: 190)

これらに加えてさらにもう1つの用例として、以下のような場合を分類している。

- (42) a. 飛んでいくボールのサキには、フェンスがある。

b. 郵便局のサキに、太郎がいる。(篠原 2008: 191)

こうした例の場合には物の形状には「サキ」が存在しないが、**物体の移動を概念化する際に想起される「経路」の心的イメージが細長く先端があるように感じられるため「細長い先端」をもつものとして概念化される**としている。(42b)の場合、郵便局は移動しないために「参照物の移動」という解釈は成り立たず、その他に存在する移動、すなわち「太郎の位置を認知している主体が郵便局の方向に向かって移動するという想定」のもとに成り立つ。このように、表現上の参照物がどのような形状であっても、また静止していても構わない「サキ」の分類があり、この場合、その移動に伴って想起される「経路」のイメージが「細長いもの」であるために「サキ」の意味は保持され、この拡張が可能であるとする。こうした「サキ」の用法は、「マエ」と比較することでより明確になり、以下の対比から「サキ」の示す方向性が明らかになる。(43a)の「郵便局のマエ」の場合には、太郎は郵便局と発話者の間に位置するが、「郵便局のサキ」の場合に、発話者が郵便局を「経路」として見た場合の向こう側に位置することが分かるだろう。

(43) a. 郵便局のマエに、太郎がいる。

b. 郵便局のサキに、太郎がいる。(篠原 2008: 192)

4.3.1.4. 「空間を表すサキ」のまとめ

以上のような先行研究を総括すると、「空間を表すサキ」には、大きく分けて以下のように別個に扱われるべき種類が存在している。

(44) 「空間のサキ」のタイプのまとめ

- ①・物の形状や何らかの性質における、内在的なサキ
- ②・①で表示しうる「サキ」と隣接、関係する外在的なサキ

①の「内在的なサキ」で最も根元的であると見られるのが、(35c)の「きゅうりのサキ」や(40)の「釘のサキ」「紐のサキ」などの、物体の形状に依存したサキである。これと関連して、モノの移動性に依っているとされる(39)の「車両のサキ」や、メンタルパス、総体としての方向性などが動機として考えられる「行列のサキ」がある。これらの概念を全てまとめたものが、図8で示された国広(1997)における現象素であるとも考えられる。

他方、②の「外在的なサキ」は、①で示されたような特定の事物の「サキ」を前提条件としながら、これに何らかの形で関連性を持つ対象に与えられる「サキ」である。具体的には、形状から「サ

キ」が与えられる「矢印のサキ」の場合、実際に矢印の内部に含まれる部分を指す場合もあるが、矢印全体を見た時に、その内的「サキ」のある方向に延長された空間にも適用され、(33a)の「このサキ行き止まり」などの例に対応する。また、①で与えられる内的「サキ」にはメンタルパスなどの様々な動機が存在するため、例えば「物体の移動の経路」という対象に「内在的サキ」が見いだせるならば、その方向性を動機として(42a)の「飛んでいくボールのサキには、フェンスがある」が現存する移動の経路の外部に与えられるであろうし(図11)、メンタルパスをもっとマクロな視点で取ることによって、(37c)の「行くサキザキ」のような用法も可能となる。

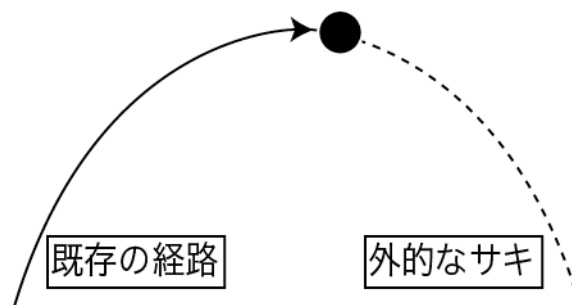


図11 外的サキの産出 (寺崎 2009: 29)

こうした2種類のサキの関係性は、明らかに①の「内在的サキ」の存在があり、そこから関連性を持つという理由、つまりはメトニミー的な動機付けから、「外在的サキ」に拡張されたとまとめることが出来るだろう。

4.3.2. 時間を表す「サキ」の分析

続いて、「サキ」が時間を示す場合を、各々の先行研究がどのように分析しているのかを、寺崎(2009)と同じように総覧していく。すべての前例において、まず空間の「サキ」に言及し、その拡張事例として時間の「サキ」を取り扱っているところは共通している。

4.3.2.1. 現象素を用いた「時間を表すサキ」

国広(1997)では、現象素を用いて「空間を表すサキ」の語義を設定したが、この現象素が**時空間比喩**によって拡張されたものが、「時間を表すサキ」であるとする。

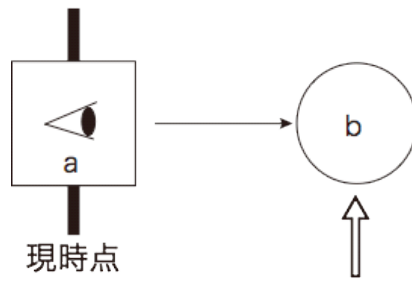


図 12 時間についての現象素 (国広 1997: 252)

図 12 で示された「時間についての現象素」も、元は図 8 で提示された「サキの現象素」を改訂したものである。図中の点 a には認知主体の視点が加わり、移動体を表す矢印は「時の流れ」になる。それはいわば「時の矢」であるとされ、過去から未来に向かって流れている。その矢の末端に視点が乗り、時の矢の先端には「未来時」がある。この図で示されるのは、以下のような例である。

- (45) a. 三年サキが楽しみだ。
- b. サキが思いやられる。

これに、さらに別の視点を導入した以下のような例も派生する。

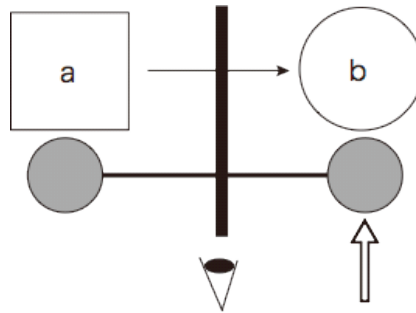


図 13 視点が異なる時間の現象素 (国広 1997: 252)

これはある時点に視点を固定した「客観的視点」と名付けられた場合で、a と b は 2 つの出来事を表している。この出来事は「b → a」の順序で客観的視点の前を通り過ぎていく。時間は左から右に向かって矢印の方向に流れているから、b の方が「サキ」に通過する。そのことを白抜きの矢印 (↑) が指しているおかげで、「サキ」は「順序」の意味を生み出す。このような例は以下のようなものがある。

- (46) a. 代金をサキに払った。
- b. サキに着いたら注文しておいて。
- c. サキに申したとおりに

このように視点を置くことで、「サキ」の現象素は、二つの出来事の相対的な順序関係を表すことになる。この時に a や b の出来事と、視点の時点の関係性は様々である。(46a)なら「支払い」の時点(図 13 中 b)は過去であるし、(46b)の場合は自分が着く時点(図 13 中 a)も相手が着く時間(図 13 中 b)も未来時である。(46c)では発話時が図中の時点 a として固定された例で、順序に関わる例(先日、サキの総理大臣、など)を含む。このように、1つの現象素の中に視点を導入することによって、同じ図式を用いながら、2つの正反対に見える「サキ」の用法をまとめている。

4.3.2.2. 認知言語学の枠組みによる「時間を表すサキ」

碓井 (2001)においては、「多義語の場合、あるひとつの表現が拡張を繰り返し、元来語の持つ意味からかなり遠くなってしまったものが多く見られる」(碓井 2001: 74)という書き出しから始まり、「サキ」が空間表現からいかにして時間表現へと拡張していったかを検討している。そしてその中で、現象素による分析と同様に「サキ」を大きく2つに分類している。それが「**順序のサキ**」と「**未来のサキ**」である。渡部 (1995)や森田 (1980)で「サキ」の過去用法とされているもの(「サキの大臣」「サキの台風」)などについて、碓井は国広と同様に、「順序」に関わり、「客観的視点順序」とほぼ同じ内容を想定している。ただし、国広がこの「客観的視点順序」を想定したときの定義は、以下のようなものである。

『さき』は基本的に『さき』と『元』の両端を視野に入れて片方の端を捉えることを意味しているので(中略)、2つの出来事の“相対的”な順序関係を表すことになる。

(国広 1997: 254)

それに対し、碓井 (2001)では「時間表現『サキ』に見られる用法『順序のサキ』は、空間の『サキ』で見た『行列のサキ』から派生したのではないか」との考えを打ち出し、空間の意味で見た「行列のサキ」との関連性を強調している。

順序とは「順番に行列をなして並んでいる状態」がプロトタイプ的と考えられる。それ故に、時間表現に見られる順序関係においても「順番に行列をなして並んでいる状態」が想起され、空間性が高くなるのである。このことは、時間表現における「順序のサキ」が非常に空間性が

高いということを示唆している。(碓井 2001: 80)

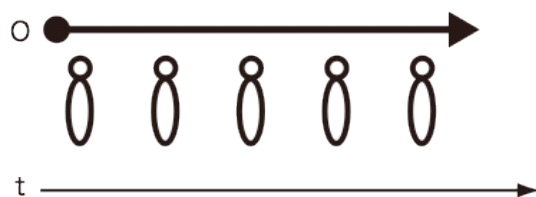


図14 「順序のサキ」と「行列のサキ」 (碓井 2001: 80)

こうした見方を、参照点構造図式を用いて表したものが、以下の図である。

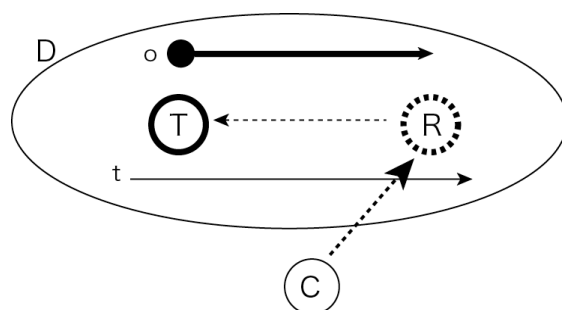


図15 順序のサキの参照点図式 (碓井 2001: 81)

ドミニオン (図中D) 内にある時間の矢印「 $t \rightarrow$ 」は常に過去から未来へ (左から右へ) 流れている。順序を表す矢印「 $o \rightarrow$ 」も方向は時間の流れと同調しており、これが太い線で示されている。時間の流れも矢印で表されているが、こちらはプロファイルされていない状態にある。順序としては、参照点よりもターゲットの方が時間的に早く行われるイベントを指し、相対的にはターゲットは参照点よりも過去を表すということになる。この場合、イベントどうしの順序関係が最も重要であるから、その発話時 (Conceptualizer) は「過去」であっても「未来」であっても構わない。これにより、以下のような「サキ」の例が現れる。

- (47) a. サキに出かける
- b. 代金をサキに払う
- c. サキの大臣 (碓井 2001: 81)

ただし、すべての「順序のサキ」が発話時に関与しないわけではなく、以下のような場合もある。

- (48) a. サキ程
- b. 先日
- c. サキの世界大戦

この場合は、参照点となる時点が現在に特定されるため、図としては以下のように表されるようになる。

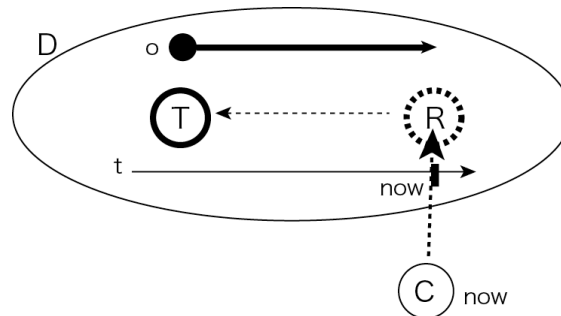


図 16 参照点現在の「サキ」 (碓井 2001: 82)

また、未来の参照点を取ることで、さらに未来のイベントを指し示す場合もある。以下のような例である。

- (49) 修論諮問は修論提出のまだそのサキだよ

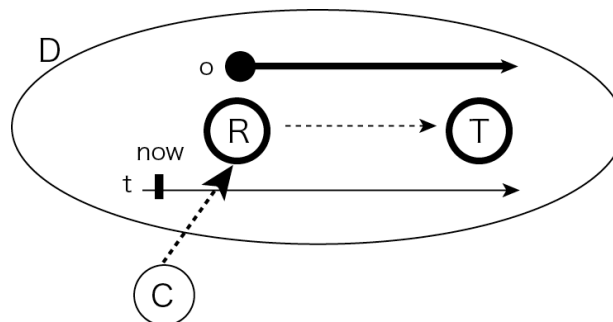


図 17 参照点未来の「サキ」 (碓井 2001: 83)

この「参照点未来のサキ」については、空間における「京都のサキ」などのイメージに非常に類似しており、空間性の高い例であるとしている。このように、「順序のサキ」を参照点を過去、未来、現在のどこにでもおけるものと、現在を必ず参照点にするもの、未来を取るものの3種類に区別し、それぞれ、空間表現と時間表現がどのように関連し合っているかを以下の図にまとめている。空間のドメインから時間のドメインに派生する際に、「サキ」の場合は「順序」という概念を仲介役に行っていると考えられるのである。

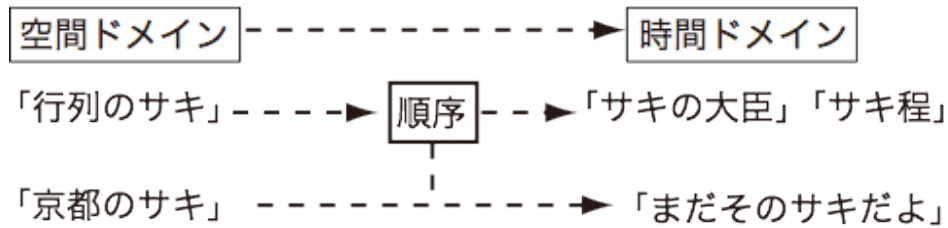


図18 「順序のサキ」のドメイン間対応 (碓井 2001: 83)

碓井の区別するもう1つの「サキ」の時間用法に、「未来のサキ」がある。これは以下のような例で、「順序のサキ」同様に参照点図式を用いてまとめられている。

- (50) a. サキが思いやられる
- b. おサキ真っ暗 (碓井 2001: 84)

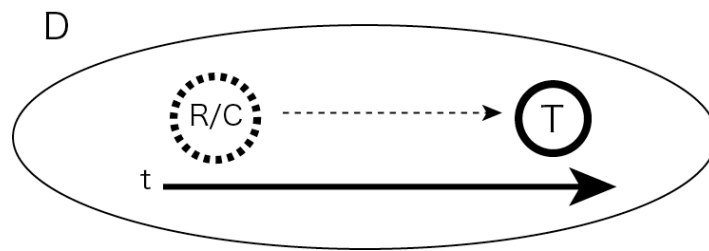


図19 未来の「サキ」 (碓井 2001: 84)

この「未来のサキ」の場合の特徴は、「自己参照点構造」を持つことにあり、認知主体自身の発話時現在が参照点となる。また、時間表現「マエ」と対称関係を成すことから、空間性の高かった「順序のサキ」よりも時間性の高い表現であるとしている。

4.3.2.3. 直示性を焦点とした「時間を表すサキ」

時間に関するメタファーの分類は、Lakoff & Johnson (1980)で取りあげられた2分類、すなわち大きくまとめて「主体移動型」と「時間移動型」の2種類が有名である。上記の碓井による参照点図式による分析も、こうした「認知主体が動くのか、時間そのものが動くのか」という2つの視点を導入している。そして、篠原 (2008)では、Moore (2000,2004)の議論をベースにして、同様に「何を動くとするか」の点に注目して分析を行っている。Lakoff & Johnson (1980)のメタファーの2分類を踏まえた上で、Moore (2001)においては「時間移動型」には2種類の異なるメタファーが含まれると指摘し、これを「Ego-centered Moving Time」(篠原の言葉では「自己中心的時間移動型」と、

「FRONT/BACK Moving Time」(篠原の言葉では「前後時間移動型」)の2種類に分けた。具体的には以下のような例が示されている。

(51) a. I hope we get a chance to meet in the weeks ahead.

b. I hope we get a chance to meet in the coming weeks.

c. The day of the Dead follows Halloween.

(Moore 2001)

(51a)は「主体移動型」の例、(51b,c)がそれぞれ「自己中心的時間移動型」と「前後時間移動型」の例である。新たに分類された「前後時間移動型」の説明は以下の通り。

主体は時間の列の外におり、言い換えれば「オフ・ステージ」の状態にある。時間と主体の関係は言語化されず、また時間の動きは主体に向かって接近するものでも遠ざかるものでもない。時間の移動方向は「より早い方」が前方、すなわち時間の移動方向に動けば動く程ほどより早い時間となる。どの時点がどの時点より早い(前)か遅い(後ろ)かは、時間を観察している主体の視点による影響を受けない。

(篠原 2008: 186)

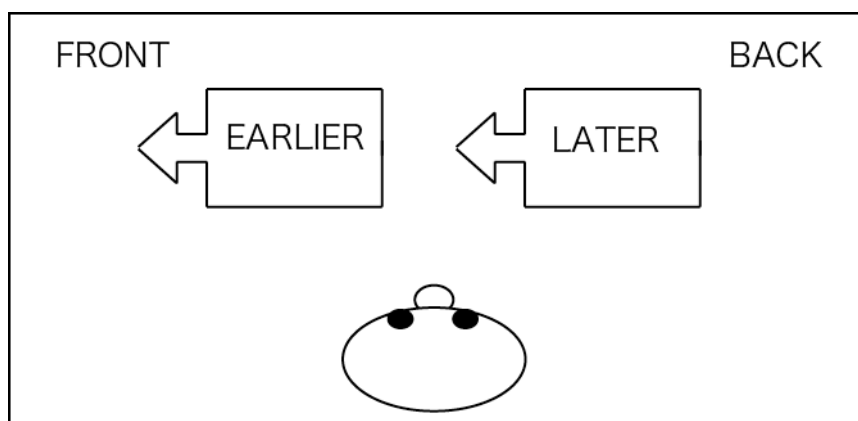


図 20 「前後時間移動型」の空間設定 (篠原 2008: 186)

そしてこの「自己中心的時間移動型」と「前後時間移動型」には直示性において大きな違いがあり、「自己中心的時間移動型」は直示性を持ち、「前後時間移動型」は直示性を持たないとする。これらをまとめたのが以下の表である。

表2 TIME PASSING IS MOTION の下位分類 (篠原 2008: 187)

TIME PASSING IS MOTION	時間参照型 (非直示的)	前後時間移動型
	主体参照型 (直示的)	主体移動型
		自己中心的時間移動型

ここで重要になる直示性は空間的「前後」と時間の「早遅」の対応関係に大きく関わっており、篠原は Moore の議論をまとめ、以下のように提示している。

(52) Moore による直示性と前後／早遅の関係性のまとめ

- (i) 空間的「前後」を意味する表現が「より早い／より遅い」という時間概念を意味し、かつ直示性が表示されていない場合、「より早い＝前」(EARLIER IS FRONT)、「より遅い＝後ろ」(LATER IS BACK)という概念対応が成り立つ。
- (i)' 未来が主体の前方に、過去が主体の後方にあると捉えられている言語においては、「より遅い＝前」(LATER IS FRONT)、「より早い＝後ろ」(EARLIER IS BACK)という対応を持つ表現は (ii)の場合を除き) 直示性の表示を伴う。
- (ii) 「時間配列語⁹」が前後関係の参照点となっている表現では、直示性の表示がなくても LATER IS FRONT の解釈を持つことがある。
- (iii) (ii)に当てはまる例は、主体移動型の時間メタファーに属する。

(篠原 2008: 188)

具体的には、(i)の例としては「太郎は花子より前[先]に帰った」などがあり、ここに直示性の表示は無く、この表現をいつどこで発話しても、「太郎が帰った時間」が「花子が帰った時間」より早い。(i)'の例としては「試験日は目の前だ」や「これから先」などがあげられている。この場合、未来の時間が「目の前」「これから」などの直示表現によって前方に固定されている。そしてこうした直示性がなくとも、「クリスマスの先に正月が待っている」などの用法は、(ii)で提示された「時間配列語」が参照点となるために LATER IS FRONT の解釈が可能になる。この Moore の(52)のような分類を踏まえた上で、篠原 (2008)では日本語の「サキ」における一見独特に見える振る舞いを検討している。まず、(52i)と(52ii)に当てはまる例が日本語において一般的なものであることは間違いない。その上で、「サキ」に関しては「直示性を持たずに LATER IS FRONT の解釈を持つ例」が存

⁹ 言語文化共同体の成員に共有された時間語彙の一種。例えば「朝、昼、夜」や曜日、正月やクリスマスなど。

在している。

- (53) a. 窓拭きよりサキに、風呂掃除をした。 (52i)
b. お盆からサキに休みを取った。 (52ii) (篠原 2008: 202)
- (54) a. 東京に引っ越してからサキ、ずっと墓参りをしていない。
b. 家族旅行は、叔母の手術よりサキのことになるだろう。 (篠原 2008: 197)

これらの例は、一見すると Moore の説の反例のようにもとれるが、篠原はこれを反例とはせず、むしろ Moore の主張する直示性との関連性を補強するとする。例えば、以下のように全く同じ構成にした時にも、「時間配列語」を参照点とした場合と、そうでない場合には明らかな差が生じる。

- (55) a. お盆からサキは、休みを取った。
b. *窓拭きからサキは、風呂掃除をした。

こうした例は、時間配列語と LATER IS FRONT の解釈が概念対応として非常に安定していることを示している¹⁰。こうした現象が何に起因するのか、という問題に対し、篠原が提案するのは**移動するのは何か**という問題である。「時間が移動する」と捉えた時には、EARLIER IS FRONT という設定が経験的動機付けを強く持っている¹¹ため、逆の LATER IS FRONT の説明は困難となる。一方、LATER IS FRONT という設定が経験的動機付けを持つのは、時間ではなく主体が自ら前方に進んでいく場合であり、「サキ」の LATER 用法(43b) は時間移動型なのではなく、主体移動型なのだと考えれば良い。これは「サキ」が「時間配列語」を用いた場合に安定する、という事実とも整合性を持つ。時間配列語を用いることで時間的事象の順序列が想起されやすく、**それを見渡すという視点**を取りやすいと想定される。つまり、一見直示性を含まず、Moore の論に反するよう見える「サキ」の場合でも、**直示性を持たないにも関わらず直示的フレームの時間メタファーとして解釈される**事例であると見ることが出来るわけである。

¹⁰ 統計的な確認はしていないが、web 検索などでも時間配列語を用いずに LATER IS FRONT を示す用例は明らかに少なかった、とある。

¹¹ 「前方にあるモノの方が後方にあるモノよりも時間的に『早く』目的地点または通過地点に達するという経験的動機付け」がある。(ibid.: 201)

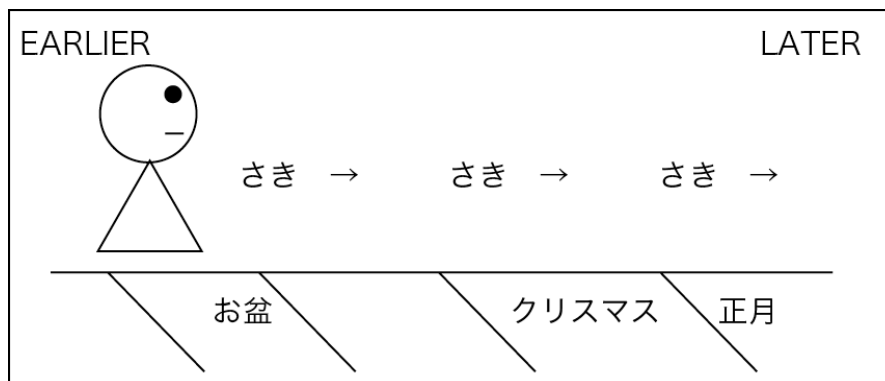


図 21 時間配列語と「見渡し」の視点 (篠原 2008: 205)

4.3.2.4. 「時間を表すサキ」のまとめ

以上のような先行研究を総括すると、大まかに分けて、「時間を表すサキ」とされるものには、以下のような場合分けが可能である。

(56) 「時間のサキ」のタイプのまとめ

- ①時間を外在する対象として把握し、その仮想的実体に、空間で与えられた「内在的サキ」を導入する「時間参照型」サキ。
- ②時間を、時間領域を移動する認知主体を取り巻く環境であると把握し、その仮想的環境に、主体の持つ方向性を動機とした「外在的サキ」を導入する「主体参照型」サキ。

①は、4.3.2.1.節でいうところの2つ目の現象素(図13)であり、参照点図式を用いた場合には図14から図16までで表された「順序のサキ」と名付けられた考え方、そして直示性による分類の場合は、そのままの言葉を借りたので「時間参照型」の用法(図20)ということになる。この場合、指し示す時間自体は過去時から未来時まで幅広く取ることが可能である。そこには1つの実体として仮定された「時間」の何らかの順序が存在することになり、これはすなわち「内部状態に差のある実体」としての時間の捉え方である。この時、観察者は観察対象たる実体を持つ時間とは離れた位置に置かれたニュートラルな存在として位置づけられており、図13の現象素ではこれが「視点の遊離」として、参照点構造の場合は「ドメインからの離脱」として、そして直示性の表示の時にはより分かりやすい観察者としての喩えが表示されている(図20)。

他方、②で与えられた「サキ」では、①では「時間」という実体からわけ隔たれていた観察者が内在することによって、時間そのものを1つの環境として見ている状態になる。この時、時間という実体の中に不均衡を(つまりは「サキ」を)もたらずのは観察者自身の「視点」であるとまとめられており、「サキ」を動機付ける観察者自身の外側に、その方向性と関わりを持った「外在的サ

キ」が定義される。この時、観察者が向かう方向性はおしなべて「未来」を向いており、これを表示した現象素が図 12 であり、参照点構造を用いた分析では「未来のサキ」と冠して独自の立場を獲得している。また、直示性表示の例では、「見渡し」という言葉を付加させつつも、最終的にはやはり「視点」という共通のタームを用いた理解が求められるようになっている。これらの「時間のサキ」のまとめで共通しているのは、1つには「どの分析も、その分析手段として『空間のサキ』を前提としている」という部分である。

(44) 「空間のサキ」のタイプのまとめ

- ①・物の形状や何らかの性質における、内在的なサキ
- ②・①で表示しうる「サキ」と隣接、関係する外在的なサキ (再掲)

(56)では(44)でまとめた「空間のサキ」と対比する形で提示されており、各々(44)①で与えられた「空間の内在的なサキ」が(56)①の「時間の時間参照型サキ」を動機付け、さらに(44)②で与えられた「空間の外在的なサキ」が(56)②の「時間の主体参照型サキ」を動機付けている。さらに、「空間のサキ」で述べたように、(44)②の「外在的なサキ」は、その存在の動機として①であげた「内在的なサキ」が前提となっている。これをまとめると、時間、空間を含む全ての「サキ」のタイプは、(44)①で代表される「物の形状や何らかの性質における、内在的なサキ」に動機付けられた存在であるということになる。こうした(44)①の「内在的なサキ」とその他の事例の関係性に関しては、「『内在的なサキ』がプロトタイプ的である」であるとか、「『内在的なサキ』が第一義である」といった表現が考えられる。

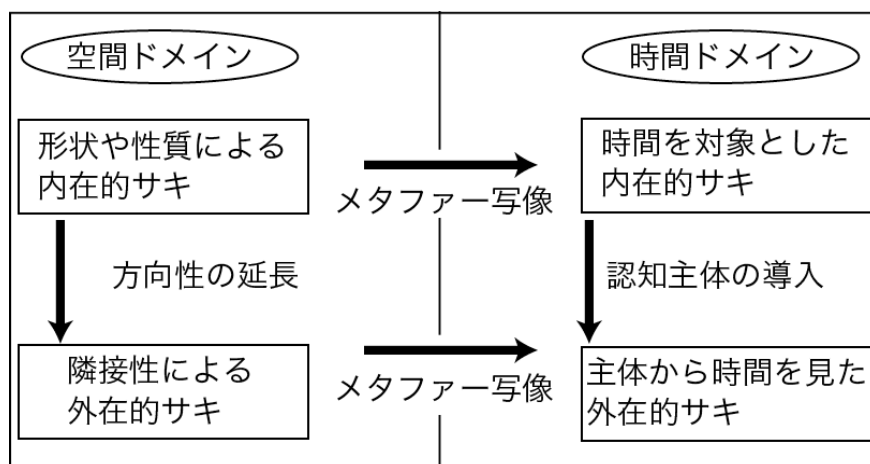


図 22 先行研究における「サキ」の派生図式

4.4. 「サキ」の意味分化の再考

4.4.1. 「サキ」のプロトタイプを巡る問題

上記のように、「はじめに『内在的サキ』ありき」としてそこから派生的な「サキ」の事例を探る方策において、この「内在的サキ」を「プロトタイプのサキ」と便宜上呼称する。そして、空間メタファー理論への疑問を呈した寺崎 (2009)においては、この「プロトタイプのサキ」と名付けた「空間における内在的サキ」が本当にプロトタイプの的であると見なせるかどうかについての検討を試みている。

4.4.1.1. 「プロトタイプのサキ」を定義付ける要素

始めに、「プロトタイプのサキ」を動機付けるためにその対象に含まれるべき要素とは何なのか、という部分、つまり空間における物質的、名詞的性質の強い「サキ」の因子について確認する必要がある。このことは上述の通りに碓井 (2001)が詳しく言及しており、4つの可能性を列挙している。

(34) 「サキ」を決定付ける要因

- ① 長く細いもののスキーマ
- ② メンタルパスの方向性
- ③ モノの形状 (先端が尖っている等)
- ④ モノの移動性 (再掲)

こうした要素を精査することによって、「内在的サキ」について、より中心的な概念原型が見えてくるだろう。まずは①の「細く長いもののスキーマ」である。以下の例があった。

(35) a. *じゃがいものサキ

b. ?なすびのサキ

c. きゅうりのサキ

(再掲)

また、「竿のサキ」や「紐のサキ」など、形状から両端どちらも「サキ」になる物が存在することを指摘し、こうしたものの「サキ」の決定には「細く長いもののスキーマ」が影響するとしている。そして「槍のサキ」「ペンのサキ」などに加えて「鼻サキ」などは「細く長い」必要もないため、「細く長い」形状以外にも③にあげられた「尖っている等」の形状も決定の要因になるとした。しかし、これらの要素については、先に提示された「現象素 (図 12)」に図示された「方向性」という言葉が十分な説明力を持つとみなすことができる。国広 (1997)では「元」と「先」という両端

の存在と、その片方を捉える時の特定の方向性が「サキ」に必要であると考えており、この「**方向性**」を与える1つの状態として、「細く長い」という形状が存在しているのではないか。例えば以下の対比がある。

(57) a. 棒の (サキ／端)

b. 棒の (*両サキ／両端)

碓井の分析の通りに「細く長い」形状がサキを決定付けるとするならば、(57a)のようにほぼ同じ部位を指す「端 (ハシ)」も同じように使われるところだが、同時に両側を示すために「両」をつけた時、「両端」は正しいが「両サキ」とは(ほとんど)言わない¹²。つまり、「サキ」は「細く長い」ことが第一にあるのではなく、そのことによって生まれる何らかの「方向性」によって定まるものである。「細く長い」ことは、それを認識する際に形状に沿って動く視線に関わるとも考えられる。「尖る」という形状は、その1点に置ける「収束」を意味し、これはヒトがその対象を知覚する際には非常に顕在的な状態となりうる。他方、逆に「広がる」場合には、注意を向ける点は1点に定まらず、その分だけ顕在性は劣る。つまり、「尖る」ことそれ自体が、ある種の注意の方向性を生み出す役割を果たしていると考えられる。

次に②と④であるが、厳密に考えた時、「メンタルパス」とは移動を含む概念であり、これは④の「モノの移動性」と説明能力が重なる。例えば「行列のサキ」の場合に「全体が一方向に進んでいなくても使用可能であり、必ずしも移動性が必要とは言えない」と指摘し、このような例で重要なのは「メンタルパスの方向性」であるとするが、この場合のメンタルパスは、根源的には視線の移動、少なくとも「サキ」を決定付ける1つの動きを伴うことは間違いない。つまり、碓井があげた4つの要因は、「**方向性**」という1つの要素に①と③がまとめられ、「**移動性**」という要素に②と④は含まれるのである。そして、「**移動**」というものは、当然のことながらそこに一定の「**方向性**」を含むものであり、「**方向性**」があるということは、何らかの「**移動**」を伴う必要がある。これらはやはり、表裏一体の関係にある。1つ1つの事例を見ていく中において、「サキ」を動機付けるものはその形状であったり、移動であったりする場合がある。しかし、そこに根元的に与えられた「サキ」を「サキ」たらしめる要素は全ての事例の共通部分に与えられた1つの「**方向性**」として考えることが出来る。つまりは「向く側」と「向かわれる側」の相対的な不均衡が表れることになる。

¹² 検索エンジンで調べたところ、「両先針」「両先ようじ」など、普通は片側に「サキ」があるにも関わらず両端につけた特殊な商品の名前では多く見られた。かなり特殊な例だろう。

4.4.1.2. 分類が困難な「サキ」の事例

さらに寺崎 (2009)では、上記のような分類では判定が困難な事例も取り扱っている。上記の碓井 (2001)の分類において、その動機付けが困難であるとされる以下のようなサキの用法である。

(58) a. 軒サキ (碓井 2001: 62)

b. 庭サキ

(58a)について、碓井は「古来日本の住宅形態は縦長であったこと」などを一応の検討材料としているが、関連には疑問が残る。たとえ家がどのような形状であろうと、「軒サキ」で表される部分というのは、その家屋の機能的に一様に決めることが可能であるからだ。この場合の「サキ」は、あくまで「家」や「軒」「庭」といった事物の用法、機能、慣習を想定した時に、「家屋」から「軒」や「庭」への何らかの「方向性」が「サキ」を動機付けると考えるべきだろう。「庭先」と「庭」の違いは、「庭先」の方が屋内から「出る」場所であるという意味の差が見受けられるように思う。「庭先に出る」なら問題ないが、「庭先に入る」は不自然である。家→庭という方向性が、この時に「サキ」を動機付けるのではないか。国語辞典によれば「庭先：庭の縁側に近い地点」とあり、家屋との近接性が伺える。他にも「店サキ」も同様であるし、(37)であげられた「行くサキザキ」などもこれと似たような振る舞いをすると考えられる。「旅行サキ」と言った時にも、例えば「自国を出発して、12カ国を回ってくる世界一周旅行」を想定した時、その経路は非常に長く、一定の方向性を想定しにくいものとなるが、この時にも回った全ての国を「旅行サキ」と言い表すことが出来る。「経路」などの「細長い線性」を「サキ」の動機として仮定するとこのことは不自然になってしまうだろう。また、「紐のサキ」などの例の場合、その両端が「細くて長い物の形状」によって「サキ」と見なされるはずであるが、その状態によって、両端が「サキ」とは言いにくい状態も存在する。

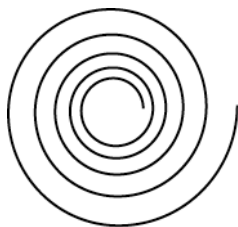


図 23 紐のサキ？



図 24 一方向に決まらない行列

図 23 のように渦を描くような形で紐が置かれていた時、外側の端については「サキ」と呼びやすいが、中心にあるもう片方については、多少なりとも「サキ」と呼びづらい状態にある。ほかに

も、「行列のサキ」という場合にも、列全体の形状が「細く長い」としても、全体的な集合としての形状がそうは見なされずに、形状のみから「内在的サキ」を動機付けにくい場合などもあり、これらの把握の仕方についても、一概に空間的要素から判断することは出来ない。

4.4.2. 両義的原義図式を用いた「サキ」の分類

前節までであげられた問題を踏まえた上で、寺崎 (2009)では「両義的原義」を基盤とした「サキ」の事例分析を行っている。

4.4.2.1. 「サキ」の両義的原義

まず、根本となる「サキ」の「両義的原義」がどのようなものであるか、ということについて定義する必要がある、ここまで見てきた先行研究の中から、これを帰納的に導き出すことを試みている。ここで重要となるのが、前節で取りあげた「プロトタイプのサキ」の存在である。「プロトタイプのサキ」に与えられた条件は、「方向性」ないし「移動性」であることが前節で確認された。具体的には「方向性」とは「モノの形状」と「長くて細いもののスキーマ」の2つの必要条件から導き出され、「移動性」は「メンタルパスの方向性」と「モノの移動性」という2つの必要条件から導き出された。すなわち、この「移動性」ないし「方向性」という要素こそが、「サキ」を現出させるに至る最低限の必要条件ということになる。ここで重要なのは、この「方向性」ないし「移動性」という概念は、空間的な要素だけでは説明し得ないという部分である。「方向性」という要素は何らかの移動を含意すると考えるためにここでは「移動性」だけに話を限定するが、「移動」という概念には、必ずその内部に含まれる「状態」と「時間」が存在していなければならない。単に異なった2種類の「状態」のみが与えられると仮定しても、我々はその中に「移動」を知覚することは出来ないのである。当然のことではあるが、逆に異なった2つの時間だけを与えられたとしても、そこに「移動」を知覚出来ない。こうした時間と状態の2つの要素が分化不可能である状態が「両義的原義」であり、「サキ」の両義的原義を定義するとしたら、この「移動」の特定の1要素を指し示す語、ということになる。多くの誤解と困難を伴う可能性があるが、敢えてこれを図示するとすれば、以下のようなになるだろう。

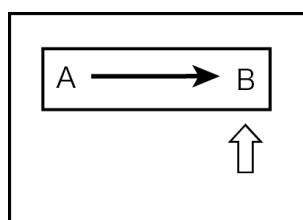


図 25 サキの両義的原義 (=図 7)

図 25 は、先に与えられた「空間のサキの現象素」の図と同じものを採用している。図中で表される黒い矢印(→)は対象に含まれる何らかの「**移動性**」を示し、図中AとBという2点は、何らかの差異を持つ2つの要素と、その間に状态的、もしくは時間的な開きがあることを示す。この時の「開き」という言葉も非常に曖昧ではあるが、空間要素として捉えるならばそれは「距離」であろうし、時間要素で捉えるならばそれは「時差」になるだろう。これをまとめるならば、それすなわち「移動を擁する何らかの差異」としての要素間の「開き」である。そして図中の白い矢印(↑)で示された部分が、「サキ」で同定される要素ということになる。国広(1997)における現象素の説明の場合、これは視覚的に明らかな図に表されたことから分かる通りに「空間内におけるサキ」を意図して描かれたものであった。しかし、ここであげた「両義的原義」の場合、便宜的に図示されているに過ぎず、図で示された概念についてはあらゆる概念を取りうる部分に注意が必要である。そして、こうして与えられた「両義的原義」が具体事例にまで適用される場合に、そこに含まれる状態要素、時間要素のいずれかの要素が焦点化し、1つ1つの用法として現れる。

4.4.2.2. 「サキ」の空間への適用

「両義的原義」が空間に適用されるとは、すなわち「サキ」で与えられた空間(状態)要素が焦点化されることを意味する。その際には、そこに含まれた「時間要素」は必然的に捨象され、その度合いを大きく下げる。空間要素における「サキ」の用法の1つに、先んじて「プロトタイプのサキ」とした「**内在的サキ**」がある。これは事物の内部の状態に何らかの不均衡(事物の内部における状態の差)を知覚した場合に生じるもので、そこには心的に起こる視線の移動を含めた移動の知覚現象が深く関わると考えられる。これは「メンタルパス」に深く関わるもので、例えば「ペンのサキ」「槍のサキ」に代表される「尖っている」などの形状の特徴は、収束するという特性上、そこに特定の方向を持った意識の流れが生まれる。

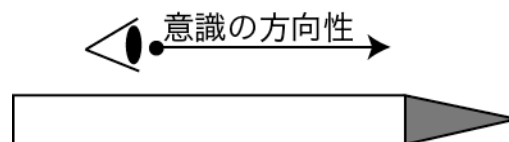


図 26 形状による意識の流れと「内在的サキ」

(35)であげられた「じゃがいものサキ」「なすびのサキ」「きゅうりのサキ」の容認度の違いについては、そこに生じるメンタルパスの働きで説明が可能である。「細くて長いもののスキーマ」で確認した通り、「細いこと」「長いこと」はその先端への視線の流れ、すなわち意識の流れを生み出

す。「じゃがいも」のように全体が均質である場合には、意識が収束する点が存在しないため、「サキ」を同定することが困難となる。そして(57)で提示した「棒の両サキ」ということが困難であるという問題についても、人間の「見る」、ひいては「知覚する」という行為の性質を考えることで説明出来る。棒は「細く長い」ために意識の流れを生み出すが、その方向は基本的に同時に1つに限られる。たとえどちらの端も同じ形状であったとしても、「サキ」として知覚するには、そこにどちらか一方向に限定された意識の流れを必要とし、同時に2つの「端」を「サキ」とすることが困難になるのである。

「サキ」はモノの形状という具体的な性質だけには留まらずに「方向性」を有したものに存在する。分かりやすいのは「サキの車両」のように実際の移動を伴う対象であるが、他にも(58)であげた「庭サキ」「軒サキ」などの用例についても、やはり家屋から戸外へのある特定の「意識の流れ」によってもたらされた例と考えることが出来るだろう。全国各地を旅行して回る場合の「旅サキ」についても、「地元」→「目的地」という1つの大きな流れを考えるならば、旅行で向かった全ての目的地は、その方向の1つの要素として表された「サキ」であると考えることが出来る。図23であげたような紐の形状による「サキ」の容認度の差についても、全体的な形状を知覚した際に、そこに何らかの「意識の流れ」による「方向性」が生まれるか否かによって差が生じるであろうし、図24にあるような空間的方向性の定まらない「行列のサキ」も、「行列」という要素自体の持つ意味を考えた時、ヒトはその並び自体に「方向性」を認めることが可能である。

次に、「内在的サキ」とは異なり、「方向性」を定める対象物の外部に「サキ」を同定する用法に、「外在的サキ」がある。この場合には、対象内部において存在していた「方向性」がそのままの方向（移動）を維持して対象外部にまで拡張される。「矢印のサキ」といった場合に、その矢印の内部に「内在的サキ」が存在するが、この「内在的サキ」を前提とし、その「内在的サキ」と同じ方向性を持つ外部の要素を、「サキ」で表すのが「外在的サキ」である。

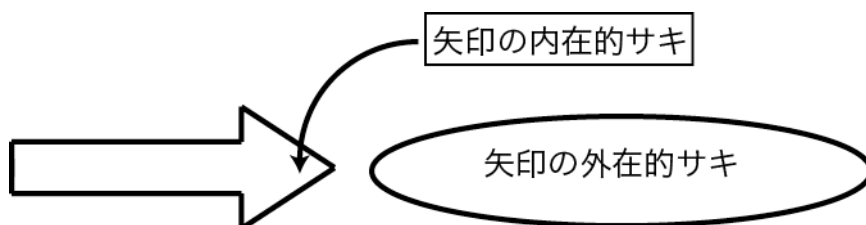


図27 矢印の2つの「サキ」

「外在的サキ」を動機付けるものは「内在的サキ」であり、これに関係する（多くの場合は空間的に接点を持つ）要素が、「サキ」として同定される。例えば「鼻のサキ」といった場合に、鼻自体の部分をさすこともあるし、(41a)のように「鼻のサキをハエが飛び回っている」といった場合、

これは鼻の外在的サキである。そして、「外在的サキ」が頻繁に用いられる場面に、図 11 であげた「心的経路による外在的サキ」がある。様々なものの「移動」の経路を空間的に1つの「方向性」と認め、その延長に「外在的サキ」を同定する。(42b)の「郵便局のサキに太郎がいる」の場合、認知主体と郵便局という2点を結んだ心的な移動経路を想定し、さらにその延長上にある「外在的サキ」が生まれる。同様にして「サキの車」や「京都のサキ」といった用例も説明が可能である。

このようにして「内在的サキ」から「外在的サキ」が産出される過程には、対象と、それに隣接した要素を関連づけて知覚するヒトのメトニミー的な認知が関わっていると考えられるが、そもそも「サキ」の「両義的原義」に「方向性」を伴い、その方向性は1つに限られるのであるから、対象の内部から外部への延長という過程も、ごく自然に生み出されるものであると考えることが出来るだろう。

4.4.2.3. 「サキ」の時間への適用

続いて、空間同様に「サキ」が時間に適用される過程を考察する。この時には、「サキ」の「両義的原義」に含まれた時間要素に焦点化が起こり、同時にそこに含まれた「空間要素」は捨象され、必然的にその度合いを下げる。時間の「サキ」の場合にも、「矢印」や「きゅうり」と同じように、対象となる時間自体に「方向性」を知覚することにより、「サキ」の同定を行う。そしてこの場合に、基本的に「サキ」となるのは過去時である。このことは、「前方にあるモノの方が後方にあるモノよりも時間的に『早く』目的地点または通過地点に達するという経験的動機付け」が働いている。ただし、「矢印」や「きゅうり」の場合、その対象に「サキ」と「元(モト)」という2点の対比構造(開き)が明示的であったが、時間という対象は、「出来事の起こり方の順序」であるから、「サキ」を同定するための「元」についても特定する必要が生まれる。そして、この「元」となる「時点」は、その用法次第で異なる。

(46) a. 代金をサキに払った。

b. サキに着いたら注文しておいて。(再掲)

(46a)の場合には発話時点で「代金の支払い」が終了しており、「元」となるのは「発話時」である。そして(46b)の場合には「サキ」で同定された「聞き手の到着時」は未来時であるが、その「サキ」を同定するための「発話者の到着時」がそれよりもさらに未来時で「元」として機能している。このように、事態 a と事態 b という一続きの「出来事の順序」を1つの対象として把握し、その中の過去時方向に「サキ」を同定するのが、時間における「内在的サキ」である。

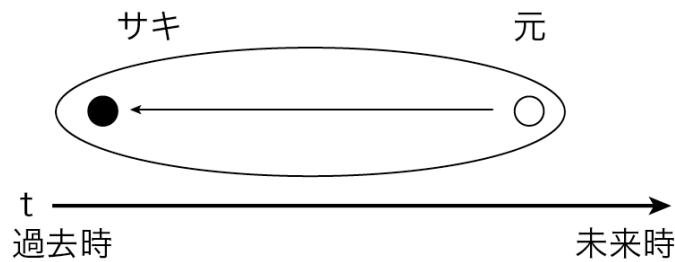


図 28 時間を対象とした「内在的サキ」

図中の黒丸 (●) がサキで同定される時点、そして白丸 (○) が「サキ」を動機付けるのに必要な「元」の時点である。楕円は、「元」によって「サキ」を同定する際に現れる対象としての時間、下に引かれた矢印 t は、人間が認知主体として経験する時間そのものの方向性を示す。

これまで取り上げた諸理論との関係性が煩雑になるので確認しておくが、本論における「内在的サキ」は、このように「時間の流れそのものを1つの総体として認識し、その内部に状態差分としてのサキを見出す」ものである。篠原の言葉でいう「前後時間移動型」(図 20) に対応するものであり、この時、時間を知覚する認知主体は時間に対して外在していることに注意されたい。

次に、空間と同様に、時間における「サキ」にも対象内部に含まれない事例である「外在的サキ」が存在する。しかし、空間的な要素の場合には対象の内部と外部の差別化が容易であったが、時間の場合に、その対象として取り出す時間は、認知主体によって知覚されるもので、「矢印」や「きゅうり」の内外の区切りのような一般性を持たない。図 28 における楕円で示された「対象の時間区分」は、その時々によって必要な「区切り方」を変えるのである。その上で、ヒトが厳然たる「対象」として把握出来る1つの時点というものが存在している。それを代表するのが「現在」であり、「現在」は我々が知覚出来る「時間」の唯一実存的な姿であると捉えることが可能である。それは2章で取りあげたように「われわれが感覚から得る情報は凡て瞬間的なものである」ことに起因しているが、ヒトが確実に知覚しているのは、「自らのおかれたその時点」に限られる。そして、この「自己のおかれた時間」を対象とした時に、その周辺の時間要素は「外部」として捉えることが可能となる。そして、ヒトが時間を過去に向かうことはあり得ないという経験的な知識から、この時に「自己のおかれた時間」と「それ以外の外部にある時間」との間に生じる「方向性」は、未来時に「サキ」を同定することになる。これが、時間における「外在的サキ」である。言い換えれば「外在的サキ」は「自己内在型」のサキともいえるだろう。繰り返し登場しているが、この「外在的サキ」の例は以下のようなになる。

(50) a. サキが思いやられる

b. おサキ真っ暗

(再掲)

(50a)の例の場合、自らのおかれた「現時点」と、そこから自らが経験していくであろう「未来時」への方向性を1つに定め、未来方向の「未だ経験していない時間」を「外在的サキ」と捉えている。また、このような用法は「時間配列語」との関係において観察されることが確認されている。

(49) 修論諮問は修論提出のまだそのサキだよ。

(54) 東京に引っ越してからサキ、ずっと墓参りをしていない。 (再掲)

このような用法の場合には、時間配列語によって「元」となる時点が確定され、この時点で「サキ」を含む対象としての時間が一般性を持つためと考えられる。例えば(49)の場合には「修論提出」が、(54)の場合には「東京に引っ越した時」が時間を対象として取り出すための「元」として働き、そこに「自己の知覚する時間」を想定することが容易となる。図 28 と比較して図示するならば、以下のようなになるだろう。

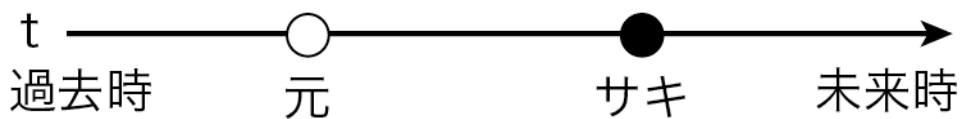


図 29 時間を外においた「外在的サキ」

図中白丸 (○) には「現在」や「修論提出」などの特定の時点認め、その時点で自己をおいた時に、自己の認知し得ない外在する時間、すなわち未来時に向けてこれまで経験してきた時間の「方向性」を延長した部分に「外在的サキ」がある。こちらの意味においても、認知主体は直示的に示される時間に内在していることに注意されたい。あくまでも外在しているのは「サキ」で示される対象となる時間そのものであり、篠原の言葉で言えば「主体参照型」の把握である。

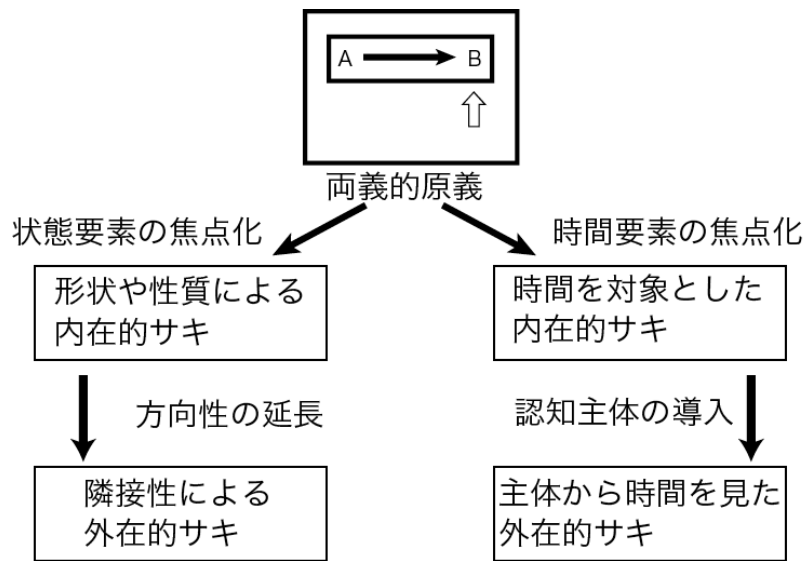


図 30 「サキ」の両義的原義の分化図式

以上のように、「サキ」の時間的要素と空間的要素が等しくそれぞれの方向に焦点化されることによって、「サキ」は時間語彙としても空間語彙としても働くことになる（図 30）。

4.4.3. 両義的原義図式からの再考察

以上のように、寺崎 (2009)では「両義的原義」を設定することにより、時間語彙としての「サキ」と空間語彙としての「サキ」は、片方からの派生物という関係ではなく、事態認知のありようを根本においた概念基盤から等しく与えられた用法の違いであることを示し、空間メタファーによる説明手段を用いずに、全ての「サキ」の用法の関係性を明らかにすることを試みた。以下では、改めてその論旨の検討を行う。

4.4.3.1. 両義的原義図式からの維持すべき点

まず、寺崎 (2009)で得られた「空間における内在的サキ」(図 26)と「空間における外在的サキ」(図 27)の峻別については、種々の先行研究の類別を参照して得られた明確な論旨であるため、有意味であると考えられる。2つの「サキ」の根幹にある「意識の方向性」という概念についても、煩雑な「サキ」の多層的分類の根源的要素の1つとして認められるべきものであり、人間の知覚、中でも中心的位置を占める視覚的效果（メンタルパス）の重要性が確認されることは、重要な焦点である。

さらに、「時間における内在的サキ」(図 28)という視点についても、1つの結論として問題無いものであると考えられる。「方向性」「移動」といった用語は曖昧なものであるが、改めて本論でこの「時間における内在的サキ」の存在を再定義するならば、そこに必要な要素は「時間の順序性」と

いう繰り返し確認されてきた時間の本質的要素に還元される。碓井 (2001)においては、はじめに空間のサキを認め、そこから「順序のドメイン」を介在してメタファー的に拡張したものを「時間における順序のサキ」と認定しているが (図 18)、改めて時間の順序性という要素からこの「時間の内在的サキ」の存在を定義し直した時、そこに「順序のドメイン」というオリジナルな要素を付与する必要は無くなる。「時間ドメイン」そのものが順序性に立脚したものであり、時空間の双方に共通な「相対的尺度」であるとするならば、それは時間ドメインに本来的に存在していた概念であるといえる。寺崎 (2009)において定かでなかった「両義的原義」の少なくとも 1 要素として、この時間の「順序性」が必要になってくるということである。

いくつかの傍証をあげて確認していくと、まず、碓井 (2001)において「順序のサキ」としてあげている事例のほとんどは、EARLIER IS FRONT の関係性を持つ。

- (47) a. サキに出かける
 - b. 代金をサキに払う
 - c. サキの大臣
- (48) a. サキ程
 - b. 先日
 - c. サキの世界大戦 (再掲)

特にほぼ修飾要素が無い状態で、(47a)「サキに出かける」(47c)「サキの大臣」などという表現で表れた場合、この「サキ」は過去時を参照する意味を持つため、こうした「サキ」の用法は、より中心的で、時間の順序性に根ざしたプロトタイプ的な意味であると認めることができるのではないかと。篠原 (2008)では、いくつか LATER IS FRONT の意味の事例として取り出されている場合もあるが、これらには検討の余地が残る。

- (54) a. 東京に引っ越してからサキ、ずっと墓参りをしていない。
 - b. 家族旅行は、叔母の手術よりサキのことになるだろう。 (再掲)

(54a)については、「東京に引っ越した後」の時間でこの表現を用いるのはいささか不自然であり、より一般的には「東京に引っ越してから、」の形や「引っ越して以来」などの語が使われるべきところである。更に「引っ越してからサキ」の「から」という表現の影響も無視出来ない。(54b)の事例では、いくらかの聞き取りの結果「実際に過去時か未来時か判断出来ない」という意見も多く聞かれたことに注意が必要である。この表現の場合、「家族旅行」が「叔母の手術」よりも時間的に

過去に位置するか、未来に位置するかを決定づけることが難しいのである。何故このような揺れやずれが生じるかといえば、それは寺崎(2009)において「時間における外在的サキ」と名付けた現象が関わってくることになるが、この部分については、改めて取り上げる必要があるだろう。

4.4.3.2. 両義的原義図式からの反省点

「時間における外在的サキ」として説明を試みた事象（図 29）については、その説明力には疑問が残った。空間におけるサキは「内在的サキ」を基点として視線や意識の方向性を理由にその外部へと拡張して「外在的サキ」を産出することが可能であったが、時間における「内在的サキ」と、「外在的サキ」と名付けた現象は、互いに真逆の関係性、EARLIER IS FRONT と LATER IS FRONT という差があり、そこに空間の「内在」 \leftrightarrow 「外在」という拡張と同様の関係性を認めるのは、不自然な説明になってしまっている。何故このような無理が生じたかを振り返るに、その理由となるのはこうした LATER IS FRONT で表れる「サキ」の事例については、Moore のまとめたように、直示的で実際的な経験との関係性を無視することができないという事実である。改めて Moore によるまとめを確認する。

(52) Moore による直示性と前後／早遅の関係性のまとめ

- (i) 空間的「前後」を意味する表現が「より早い／より遅い」という時間概念を意味し、かつ直示性が表示されていない場合、「より早い＝前」(EARLIER IS FRONT)、「より遅い＝後ろ」(LATER IS BACK)という概念対応が成り立つ。
- (i)' 未来が主体の前方に、過去が主体の後方にあると捉えられている言語においては、「より遅い＝前」(LATER IS FRONT)、「より早い＝後ろ」(EARLIER IS BACK)という対応を持つ表現は (ii)の場合を除き) 直示性の表示を伴う。
- (ii) 「時間配列語」が前後関係の参照点となっている表現では、直示性の表示がなくても LATER IS FRONT の解釈を持つことがある。
- (iii) (ii)に当てはまる例は、主体移動型の時間メタファーに属する。 (再掲)

ここで注目すべきは(i)'の「直示性の表示を伴う」という部分である。実際の日本語の例を確認しても、直示表現がはっきりと出ない場合であっても、これらの表現には「ココ」という自己の事態把握を前提としているものがほとんどであり、そこには「時間における内在的サキ」とははっきりと異なった知覚が存在している。

(50) a. サキが思いやられる

b. おサキ真っ暗 (再掲)

この時の知覚の有り様は、「空間における外在的サキ」の知覚に非常に近似しており、何らかの外的対象や、自らのメンタルパスの動きなどが関わってくる。特定方向への意識の動きは外界に向かって遠方へと伸びており、そこには時空間を共有した知覚がある。

(42) a. 飛んでいくボールのサキには、フェンスがある。

b. 郵便局のサキに、太郎がいる。(再掲)

(42b)の「郵便局」のように空間的・物質的な対象との位置関係についての「外在的サキ」の表現は、「サキが思いやられる」のように実際の「イマ」から未来時を見るとき意識は類似したものであろう。「サキがまったく読めない」など、一見無標に見える「サキ」の用法においても、例えば映画や小説、人生など、何らかのパッケージの中での「サキ」が対象として意識され、無制限に伸びうる「時間の内在的サキ」とは対比的に、物質的な制限を感じることができるのである。こうした現象は、時間そのものの持つ根源的で相対的な「順序性」の表れとは異なったレベルの現象であり、実際の経験に基づいた意識の向きを考慮しなければ説明できないものであろう。つまり、寺崎 (2009)における両義的原義図式の説明は、その基点がメタファー理論を棄却するところに目的があり、空間知覚との関係性を一切遮断することに重きを置いていたことが問題であった。実際には、このような現象は「空間における外在的サキ」との密接な関わりを無視することは出来ず、「**空間において遠方に位置する事象＝時間的により未来時に接する事象**」という体験から得られる表現形式であるということになる。そして、この空間のサキとの整合性を優先した表現こそが、空間からメタファー写像として得られた LATER IS FRONT 型の時間的サキということになる。この関係性は以下の事例からも確認できるだろう。

(42) b. 郵便局のサキに、太郎がいる。

(49) 修論諮問は修論提出のまだそのサキだよ。(再掲)

Moore のまとめた通り、こうした「時間におけるメタファー的サキ」は、「イマココ」に視点を置いた直示表現で表れるのに加え、(42b)と(49)の対比のように、現在よりも未来時における特定の時点と、更に未来時にある時点を表すのに用いることが出来る。以下に示す(59)の事例などは直示性に乏しいが、このような場合 (Moore の言葉を用いるなら「時間配列語」の表現の場合) でも、そこには「現在よりも未来時」という制限がかかることに注意が必要であり、このような表現形式

が、あくまでもイマを中心とした直示的な制限の中のみで機能する限定的なものであることを示している。

- (59) a. 正月はクリスマスのまだサキだよ。
 b. *去年の正月はクリスマスのまだサキだよ。

以上のような反省を元に、改めて「サキ」における時空間の意味派生を図示すると図 31 のような方向性を確認することができる。「サキ」の原義としては「何らかの方向性を持つ 2 点間の意識の流れ」があり、その向かう方向を示すものである。これが空間に適用されるとき、特定の物質に「内在的サキ」が生まれ、ここから更に意識が外部に延長されて「外在的サキ」となる。また、こうして実際の体験の中で「外在的サキ」を認識することを繰り返し、「向かう方向」「これから意識を向ける方向」の時間を対象としてメタファー拡張することにより、LATER IS FRONT 型の時間のサキが得られる。「Ego-centered Moving Time」(篠原の言葉では「自己中心的時間移動型」と呼ばれるものはここに含まれるが、これ以外にも、何らかの外的対象との位置関係をメタファー的に捉えた場合にも、このような LATER IS FRONT 型の時間把握は表れる。そして、それとは別に、「時間の順序性」と本質に関わり、「過去」「現在」「未来」の順序で並ぶ時間配列の相対的差分を捉える「時間の内在的サキ」が得られることになる。

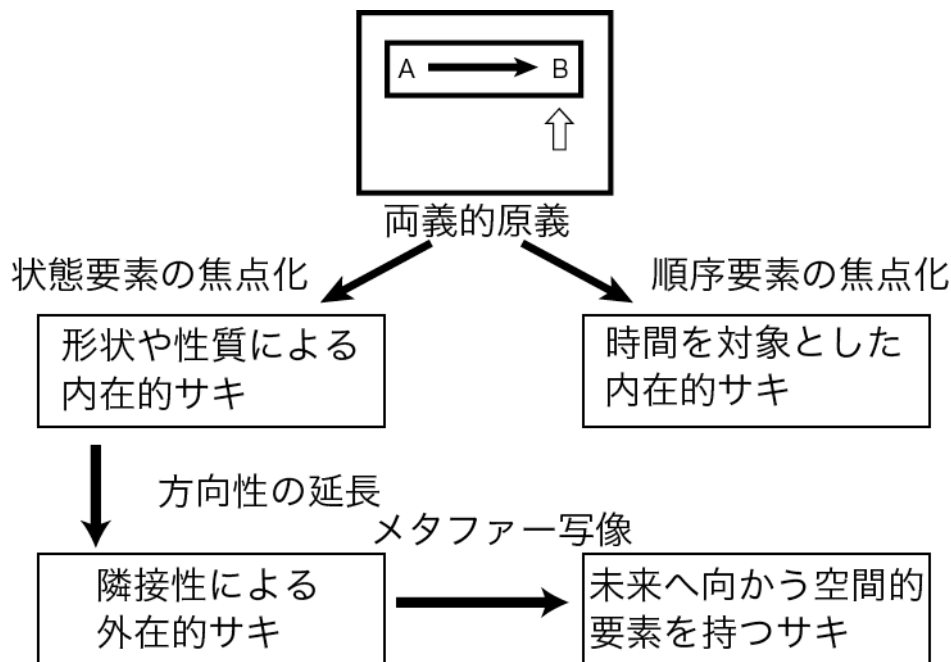


図 31 「サキ」の両義的原義からの意味分化

4.5. まとめ

以上、本章では、名詞カテゴリで取り上げられる語を取り上げ、その中の時間性について検討した。4.1. 節では Langacker の提唱する名詞の基本となる概念原型を確認し、それがどのような範囲で名詞カテゴリに当てはまるかを確認した。4.2. 節では、そうした基本的だと思われる名詞カテゴリの中からも、事態の有り様を描写する際には何らかの動性をサポートする語彙として用いられ、名詞の中にも時間的な要素を含みうることを示した。4.3. 節以降は名詞カテゴリの中から特に「サキ」の事例を取り上げ、順序性に基づく時間の本質的要素からどのように概念が取り出されるかを観察した。また、名詞カテゴリは概念原型としては時間を含まない傾向が強いが、あくまで標示する対象によって差が生じるものであり、時間そのものを取り上げる名詞を検討する場合には、その内部に含まれる時間の性質を考慮し、空間意味からのメタファー的展開との区別が必要であることについても言及した。こうした「時間独自の意味内容」については、「サキ」以外にも様々な基本語彙について検討に値する視点であり、多言語にまたがった調査などを通じて、人間本来の認知の有り様の本質的要素が、言語を通じて一般化される可能性のある分野である。

第5章 形式名詞と助詞による意味分化

前章で扱った「サキ」に比べて、元来空間要素について表示していたであろうプロトタイプの意味の強い語彙は多い。Langacker のように「言語が表す意味として喚起される概念は明確ではなく、概念は明確な方法で世界を反映したり、世界と一致することはない」のであるから、より名詞的性質（物質的性質）の強い空間要素の方が、名詞としての立場を強く持ち、結果的にその数や用例が増えるのは自然なことである。「サキ」のように「順序性」に直接関わりを持つ語については、時空間で同等の重要性を持つこともあり得たが、それ以外の名詞についてはそうした同質性を求めることは難しく、空間的・物質的な概念としての働きと、そこから得られる時間意味の差を観察することは重要である。その上で、名詞は事態の有様、つまり時間性を叙述する用法を獲得し、時間語彙としての性格を強くしていく場合がある。この章では、そうした空間名詞からの時間との接点に焦点を当てて、いくつかの事例を分析していく。5.1. 節では、その端緒として名詞「アタリ」の例を見る。舩山・深田 (2003) において空間名詞としてのプロトタイプ認定を受けたこの語が、時間ドメインに広がりを見せた際にいかにして制約を受け、用法が制限されるかを観察することで、時間ドメインの持つ限定性について確認する。5.2. 節では、同様に空間名詞「アイダ」について分析を行う。「アタリ」の分析との差としては、「アイダ」はより時間ドメインとの親和性が高く、時間独自の広がりを持つことを観察し、その動機を探っていく。5.3. 節では、「アイダ」で得られた用法的広がりの中の1つである、助詞との接合、副詞的用法への広がり、有り様を、「トコロ」という名詞を題材とし、助詞を中心にした意味解釈からトップダウン的に探る。これにより「トコロ」の持ちうる空間性と、より場面に則した用法的広がり、動機について言及していく。

5.1. 「アタリ」に見られる空間からの分化事例

空間的意味を第一に持つ語彙の1つ目のサンプルとして、「アタリ」という語を分析することにした。なぜ「アタリ」なのかは、以下の先行研究の例に依る。

(60) a. 私が住んでいるあたりはまだ緑がたくさん残っている。

b. あたりは静まりかえっていた。

(61) a. 会議をはじめてもう2時間になりますので、このあたりで一休みしましょう。

b. *会議をはじめてもう2時間になりますので、あたりで一休みしましょう。

(舩山・深田 2003: 143)

初山・深田 (2003) は、空間メタファーの事例を説明するために上記の例を挙げている。(60)の空間を表す「あたり」が修飾語無しに使えるのに対し、(61)の時間を表す「あたり」の場合には不適なので、「あたり」のプロトタイプの意味は空間義の方である、という論旨であり、3章でも取り上げたプロトタイプ認定の一事例である。(61b)が容認不可であることは空間における「あたり」と時間に関する「あたり」の明確な差であり、「時間の方が用法が制限されている」という事実は認められるべきものである。この時、何故このような差が生じるのかについては追求されていない部分であったので、時空間における差が何故生じるのかを確認してみたい。

5.1.1. 空間を表す「あたり」

はじめに空間を表す「あたり」の意味を確認しておく、大まかに言えば特定の一点からその周辺を指示するものである¹³。(60a)の「私の住んでいるあたり」の「あたり」を特定する定点は「私の住んでいる場所」である。そして、「あたり」で指示される意味は、その「私の住んでいる場所」の周辺、特定範囲内のどこか、つまり、不特定多数の場所(L)の集合と捉えることが出来る。この場合、「私の住んでいるあたり」に時間的な制限は問題にされず、時間(T)は捨象された表現、名詞の概念原型の条件を満たしたものと捉えることが出来る (図 32)。

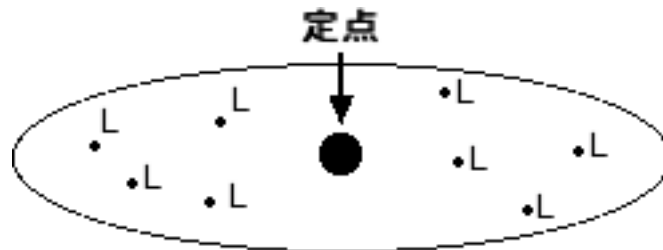


図 32 空間の「あたり」

一方、(60b)はどうだろうか。この場合、中心となる定点が与えられていないが、談話の性質から考えて、これ以前に取り上げられていた場所、そして何も前提がないとするならば、それはこの文の発話者 (概念化者) の置かれた場所そのものということになる。つまり、あえて足りない部分を補うとすれば、「(あなたが今注目すべきその) あたり」である。この場合の名詞「あたり」の意味には知覚者自身が前提とされていなければならず、直示的性質の強い表現といえる。つまり、場所 (L) が「取り上げられていた場所」の周辺、特定範囲内のどこか不特定多数の場所 (L) の集合となる。そして時間はその知覚者が「あたり」を認識したその時点に限定され、時間的な制約が生まれるこ

¹³ 【1】 中心的な想定範囲からそう離れていない場所をやや無限定に、ばくぜんと指し示す語。
【2】 大体……に近い所 (時) (新明解国語辞典)

とには注意が必要である。

5.1.2. 時間を表す「アタリ」

続いて対となる(61a)の例はどうだろうか。「このアタリ」という指示がなされており、意味の中心となる定点は「発話されたその時点」となる。すると、(60)の例と対応させれば、この「あたり」の示す時間(T)は、「発話されたその時点の周辺、特定範囲内のいつか、つまり、不特定多数の時点(T)の集合」ということになる。しかし、実際にはそのように空間的意味に完全に対応した意味とは言えない。何故なら、直感的な理解では、こうした「アタリ」にはあまり時間の「範囲」が感じられない。(61a)の発話で、「一休みしましょう」と言ったその特定の時点が、一休みの起点となる定点になるように思える。以下の対比を見よう。

(62) a. (遠足中に)「このあたりで昼食にしないか？」

「そうだな、あっちにちょうどいい木陰がある」

b. (勉強会中に)「このあたりで休憩にしないか？」

??「そうだな、あと 10 分したら少し休もう」

(62a)のように、自分の今いる地点を中心とした範囲内を「アタリ」で指すことは自然であるが、(62b)の場合、提案に対してそれを「いくらか前後した不特定の時点」と認識するのは不自然である。では、時間を表す「アタリ」には「範囲」の意味が無いのだろうか？ もちろんそんなことはなく、以下のように例があげられる。

(63) 大谷選手は去年あたりからめきめき実力をつけている。

(63)のような「アタリ」の場合は、特定の時点(T)を決めるようなことはなく、ある程度の範囲を持つように捉えられる。大谷の調子が良くなってきたのは、去年の春頃かもしれないし、シーズン終盤だったかもしれない。この場合に注意する必要があるのは、「去年」という定点の取り方に特徴があるということである。「去年あたり」の場合に今年の1月くらいは入るかもしれないが、およそその「範囲」は「去年」の内部に含まれるように見える。つまり、この場合の範囲は、場所を表したときの範囲とはいささか振る舞いが異なる(図33)。

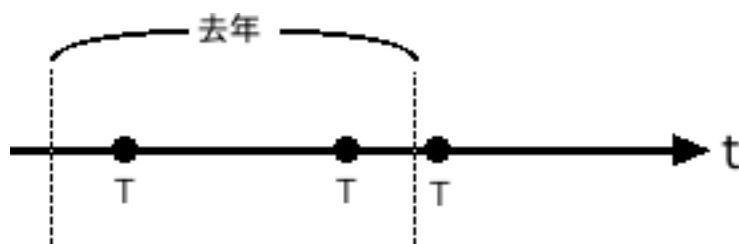


図 33 時間の「アタリ」

以下の例から、その振る舞いの差が分かる。

- (64) a. 3日前あたりから頭が痛い。
 b. ? 12時あたりから頭が痛い。

(64a)の「アタリ」はある程度範囲が内部にとれるので自然だが、(64b)の場合、「時点」が定点となっており、その内部に範囲を取ることが出来ず、いくらか不自然になってしまう。場所の場合には、認識のレベルの差はあるが、定点の取りうる範囲の大きさでこのような差が生じることはない。

- (65) a. 四国あたりに台風がきた。
 b. 北極星あたりで何かが光った。

つまり、場所の「アタリ」は定点の外部を含み、時間の「アタリ」は基準となる定点の内部のみを指示するという傾向がありそうだ。それでは、(61)や(62)に現れた「(この)あたり」は一体どんな範囲を示しているのだろうか。以下の例を検討したい。

- (66) (先生が部屋に入ってきて)
 a. 「はい、今から講義を始めるぞ」
 b. * 「はい、このあたりから講義を始めるぞ」

(61a)で見たように、「発話した時点」を指示するのが時間における「このアタリ」だとすれば、(66a)同様に(66b)も可能なはずだが、実際には不自然である。これはなぜだろうか。この原因としては、やはり「アタリ」の持つ「範囲」という概念の存在が大きいのではないだろうか。(61a)の「このアタリ」は、発話の前提として「会議が2時間続いていた」という事実がある。2時間という長い「範囲」に渡った「会議」の指標のない時点(T)を指し示すための「アタリ」なのである。(62b)

も同様で、勉強会が続き、一連のイベントの範囲の中の時点として、「このあたり」が機能している。それに対して(66b)の場合、発話した時点よりも後に「講義」がスタートし、「あたり」で指し示すような「範囲」を持ったイベントが存在していない。このため、いきなり「このあたり」といわれても不自然になるのだと考えられる。つまり、「あたり」の時間的意味には、その範囲を指定するためのイベント、すなわち「変化」を必要としているのである（図34）。

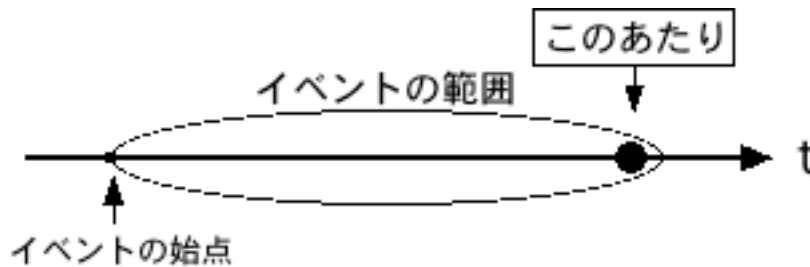


図34 時間の「あたり」が持つ範囲性

5.1.3. 「あたり」における時空間差異の要因

こうした時間と空間における「あたり」の取る範囲の差というのはどこから生じたのだろうか。このことには、時間の本質的性質である順序性の概念、更に厳密に言うなら、相対的差分のみで認識される時間の相関性が関係すると考える。改めて修飾が（形式上）無い(60b)のような「あたり」を見る。

(60) b. あたりは静まり返っていた。

(67) あたりの様子をうかがう。

この「あたり」によって知覚される空間(L)は、図32を見て分かる通りに、複数の場所(L)に渡り、「あたり」の構成要素たる場所のすべてを L_1, L_2, L_3, \dots と順々に知覚するのではなく、すべての「範囲」が時間的に差をつけることなく、一時に知覚されるはずである。(60b)の例ならば候補たりうるすべての場所に「静かだ」という属性を認め、(67)ならばすべての（可視である）空間を確認する。言い換えれば、時間 T を限定し、一つの事象として複数の場所 L を捉えたのが、この場所の「あたり」である。それではなぜ、このような修飾無しの「あたり」が時間には適用されないのかを考える。上記のような無修飾の「あたり」は、同じように考えれば「特定空間（状態）において、一つの事象として複数の時点 T を捉える」表現になるはずだ。しかし、実際にはそうはならず、時間には無標の「あたり」は存在せず、更に定点指示をする場合には、「12時あたり」のような特定時点よりも「去年あたり」という範囲指定の方が容認性が高い。

こうした差が生じる原因は、「時間を等しく同様に知覚すること」の困難さが考えられる。定点を基準とした複数の「空間」を等質に認識することは不自然ではないが、時間とは、それ自体が相対的な「差」であり、「順序」そのものの並びである。特定時点を規定したとしても、その周辺にある「時点」は「過去」「未来」の差分はもちろんのこと、互いに「異なる」ことで表れる以外に認識する手段が存在せず、空間の「アタリ」のように一度に複数の「時点」を均質化させることに無理が生じるのである。このため、空間の「アタリ」は無標で「ココの周辺地点」を表し得たが、時間の場合「イマの周辺の時点」は異なりが大きくなってしまい、「アタリ」の元来の意味とは乖離してしまう。時間における「このアタリ」は図 34 のように何らかのイベントの範囲性を含意することで空間の「アタリ」に近い意味を維持しながらも、基本的には複数の「時点」を標示せず、結局は「イマ」に帰着しやすいのも、こうした制限のためであろう。唯一「去年あたり」や「四月あたり」といった範囲内指定の場合には複数の「時点」を同時に捉えることが可能になるが、これは「去年」や「四月」といった範囲を持つ時間表示により、複数の時点が等質な属性を得ることができ、同時に捉えることが可能になるためである。

5.2. 時空間を表す形式語の概観 -アイダとウチの選択-

5.2.1. 「アイダ」の時空間差異

次に、前節の「アタリ」と比べるとやや空間的な実在性が曖昧になり、時間意味との境界に検討すべき点が多くなる分析対象として、「アイダ(間)」に関わる様々な現象を取り上げたい。もちろん、既存の言語学、こと認知言語学においては、空間メタファーの適用範囲の広さから、この「アイダ」という語は問題無く「空間的要素」を中心として取り上げられてきた。以下のような言説がある。

一般に、時間にはそれ自身のことばがない。そこで、ことばを借りる。どこから借りるか。一番ふつうなのは、空間からの借用である。そもそも「時間」の「間」は、「あいだ」であり、空間のことばである。「空間」の「間」と共通だが、これは「間」の意味が「空間」と「時間」のどこか中間にあることを意味しない。あくまで「空間」からの借用である。(瀬戸 2005: 200)

こうした前提条件というのは、少なからず研究者には受け入れられているものだろう。しかし、前章で扱った「サキ」の場合と同様、「アイダ」は明確に物質的な概念を指示するものではない。あくまで相補的な関係性を提示する概念であるため、相対性に重きを置いた本論の分析視点においては、時間との関係性を再検討する余地が充分に残された対象であると考えられる。もちろん、「サ

キ」の場合と同じように、「認識されやすさ」という点では空間的・物質的要素の方が典型的な名詞カテゴリとしての定着は容易であることは自然であるため、メタファー写像による関係性も同時に検討する必要があるだろう。しかし、前節の「アタリ」と比較した場合、「アイダ」は時間ドメインにおいてその相補的關係性を表す性質から、独自の機能を持つ可能性がある。

本節では、以下に「アイダ」と「ウチ」という類似した名詞を取り上げるが、ここで重要になるのは、各々が助詞の「ニ」と結びついた時の機能の変化である。各々の名詞に助詞が付属することで副詞的働きを担う場合に、その名詞が持つ性格にどのような影響を与えることになるのか、品詞カテゴリの縦断的性格を観察するためにも、いくつか視点に分けて概観していく。最終的には「アイダ」と「ウチ」という2つの「空間名詞」を扱うことになるが、その基点には上記の瀬戸 (2005) をきっかけとした「アイダ」を巡る議論がある。今回分析対象として「アイダ」を扱う理由は、その振る舞いが非常に多様で興味深いという点が上げられる。以下、3章でも一部の例を取り上げたが、その一端を例示しておく。

- (68) a. 名古屋は、東京と大阪のアイダにある。(空間、二点、点的)
- b. 修論の締め切りは、正月と節分のアイダにある。(時間、二点、点的)
- c. 冬休みのアイダに宿題を終わらせる。(時間、一点、線的)
- d. 私が仕事をしているアイダ寝ているなんて。(時間、一点、線的)
- e. しばらくのアイダ、留守にする。(時間、一点、線的?)
- f. このアイダ (コナイダ) のことなんだけど。 (時間、?、?)

(68)は、様々な「アイダ」の用例を、「空間的用法か、時間的用法か」「アイダを規定するためのファクターがいくつ存在しているか」「アイダで指示された範囲がどういったものか」という基準を直感的に割り振ったものである。順に見ていくと、(68a)は空間における「アイダ」の例である。空間位置を示す「アイダ」にそれほど複雑さもなければ、拡張される要素もなく、2点間の特定の1点を示している。しかし、時間要素の場合はやや複雑になってくる。(68a)に直接対応すると思われる(68b)では、正月と節分という2つの「点」に挟まれた時点を示す。また、時間要素の場合、(68c,d)のように1つのイベントをとることで、「アイダ」はその該当する期間を広範に渡ってを指すことも可能である。この場合、(68a)における「東京と大阪」のように2点以上の基点を必要としないのが特徴的であり、空間ではこのような表現は出来ない(cf.*琵琶湖のアイダにある島)。また、(68d,e)のように後ろに「に」や「の」といった助詞を伴わない「アイダ」を用いる場合、基本的には指し示された期間をすべて覆う線的な意味になる。指定の期間からある時点だけを切り出す場合には、ほとんどの場合に「限定」の要素を持つ二格が現れる。この「ニ」の存在も、様々な問

題を孕む興味深いポイントである。

- (20) a. 私が仕事をしているアイダ寝ているなんて。
b. 私が仕事をしているアイダニ、誰かお客さんが来たでしょう。
c. ?私が仕事しているアイダ、誰かお客さんが来たでしょう。(再掲)

こうした線的な意味の「助詞を伴わないアイダ」と、定点を指す「助詞を伴うアイダ」というバリエーションは、「アイダ」が時間語彙に現れる時にのみ見られる特徴的な現象である。加えて、時間の「アイダ」は、より抽象度の高い語としても広がりを見せる。上記の(68a～d)の例では「何のアイダ」なのかが認定しやすいが、(68e)になると、「アイダ」の措定に必要な「2つの時点」や「幅を持つ期間」すら消えてしまう。(68f)は「アイダ」のとりうる「期間」のニュアンスさえ定かでない。以上のように、「アイダ」は時間的な要素を扱う際には非常に多様な姿を見せる。抽象度の高い時間領域でのみこのような多様性を見せるというのは、「具体から抽象」という広がりを見せる基本的な拡張方向を考える上で、興味深いものである。ちなみに、「アイダ」という語彙が時間と空間のどちらを元に現れたのか、という通時的な問題は一応検討の余地が残されているが、以下のような研究があることだけに触れておく。

(69)

飛鳥川みなぎらひつつ行く水のあひだもなくも思ほゆるかも(日紀謡-118)

この歌は「飛鳥川の水に空間的なギャップがないように、時間的に間を置かず(相手のことが)思われることだ」という意味で、まず具体的な空間の概念が先に提出され、それにより抽象的な時間の概念がなぞらえられている。(日野 2001:17)

本節での目標は、まず、「アイダ」がどのような意味を持つ語彙であるのかをはっきりと確認すること、そして、この時間領域に広がった「アイダ」の用法を確認し、何故時間領域でのみ、このように広がりを持つに至ったのかを考察することである。

5.2.2. 先行研究における「アイダ(ニ)」と「ウチニ」

「アイダ」の意味を調査するにあたり、先行研究では「アイダ」という語がどのように分析されてきたかを概観したい。ただし、名詞単体としての「アイダ」を取り扱った先行例というのはほとんど見あたらず、多くの類例研究では、「ウチ(ニ)」という表現を中心として、その比較で「アイダニ」という接続表現が取り扱われるに留まっている。そこで、ひとまず「アイダニ」と「ウチニ」

の差については後ほど検討することとし、様々な「ウチニ」の研究から、どのような分析が行われてきたのかを見ていくことになる。

5.2.2.1. 「ウチニ」の分類

「ウチニ」の先駆的研究である浅野 (1975) では、事態 S1 と S2 の関係性¹⁴において「S1 ウチニ S2」という形式をとった場合、S1 と S2 の間には何らかの因果関係が成立する、という分析を示し、それを基にして「ウチニ」を大きく3つに分類している。以下はその分類である。

(70) 浅野 (1975) における「ウチニ」の分類

- (A) 並行型 → (a)行為的因果関係 (b)時間的因果関係
- (B) 遮断型 → (a)行為的因果関係 (b)時間的因果関係
- (C) 制約型

- (71) a. 東京に住んでいるうちに、大阪弁を忘れてしまった。 (A a)
- b. 話し込んでいるうちに、暗くなってきた。 (A b)
- c. 持ち歩いているうちに、なくしてしまった。 (B a)
- d. バスを待っているうちに、タクシーが来た。 (B b)
- e. 子供が寝ているうちに、洗濯を済ませた。 (C)

(70A) の「並行型」は、S1 で示されたイベントの後に発生したイベント S2 がその後も同時並行して進行する場合で、各のイベント間の因果関係を「行為」と「時間」に分類している。たとえば(71a)ならば「東京に住んだこと」が直接「大阪弁を忘れたこと」の原因であり、さらに「大阪弁を忘れた」あとも「東京に住む」というイベントは継続して行われる（ことも可能である）。(71b)でも「暗くなった」後にも「話し込む」ことが可能という部分は(71a)と共通するが、「暗くなった」原因は「話し込んだこと」ではなく、「話し込んだことによって時間が経過したこと」であるという部分が異なる。

一方、(70B) の「遮断型」では、S2 のイベントの発生により、S1 が打ち切られるタイプのものである。たとえば(71c)では「なくす」というイベントによって「持ち歩く」というイベントは中断するし、(71d)でも「タクシーが来た」ことで「バスを待つ」必要がなくなるという。この2つも、S2 の起こった原因で「行為的因果」と「時間的因果」に分類されている。

最後に (70C) の「制約型」であるが、これば S1 の期間内に S2 が開始し、終了までを含む場

¹⁴ 正確には S は Sentence の S なので、S1 や S2 が指すのは文自体であるが、今回はそのことはあまり問題としない。

合である。この場合に S1 と S2 の間に直接的な「因果関係」は存在しないが、浅野によれば、「S1 の時間を意識してその範囲内に S2 を完了する、という意味で、つまり S1 の時間があるから S2 の行為をするという意味で、S1 と S2 の間には因果関係が存在する」としている。参考までに付記しておく、日本語文型を用途の近さから分けた留学生向けの日本語テキスト「どんなときどう使う日本語表現文型 500」(友松・宮本・和栗 1996) では、C の「制約型」ウチニのみが、別な文法項目として設定されており、「時間的前後関係」という項目で学習する内容になっている。このことから、C 「制約型」は他とは異なる特殊な内容であることがうかがえるだろう。

5.2.2.2. 「ウチニ」の意義素の認定

国広 (1982) では、「ウチニ」を「アイダニ」を含む他の語と比較することで、「ウチニ」の意義素¹⁵について検討している。この中で、国広は浅野の分析を下敷きにしつつも、「因果関係」という視点に対しては疑問を呈している。以下の例を見よう。

(72) a. 本を読んでいるうちに眠くなった。

b. 知らないうちに雨が降ってきた。 (国広 1982: 257, 258)

(72a)の例は浅野の分類に従えば「並行型・行為因果関係」に分類されるものだが、この場合に「本を読むこと」と「眠くなること」の間の因果関係は読み取りにくいとしている。また、(72b)でも「知らない」ことと「雨が降る」ことは一切関係性が見いだせない。これらの例から、国広は時間・行為を含む「因果関係」という要素は「ウチニ」の意義素分析にあたっては除かれるべきものであり、「あくまで S2 は S1 の時間的枠の中で生じた、とするだけで充分である (ibid.: 259)」との判断を示し、「ウチニ」の意義素を簡略ながらも以下に提示した。

(73) 【ウチニの意義素】

S2 が起こる時間的枠として、副詞的に S1 を提示する。(ibid.: 260)

5.2.2.3. 「ウチニ」のスキーマ

松中 (2001) では、浅野の分析の問題点を前提とした上で、認知言語学的な道具立てに落とし込むことを目的としている。そのため、「空間における位置関係を示すものであった『うち』が、時間的な意味で用いられるようになった」という観点から、「ウチニ」のイメージスキーマを描くこ

¹⁵ 「意義素」とは、「ある語がいろいろの具体的な場面・文脈で示す細かな意味のゆれを取り除いたあとに残る核的な意味のことである」との説明が付されている。(国広 1997: 12)

とを試みている。以下がその例示である。

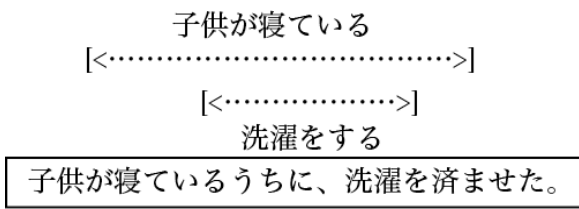


図 35・制約型ウチニのスキーマ

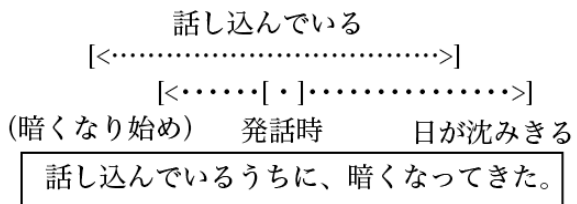


図 36・並行型ウチニのスキーマ

(松中 2001: 47)

図 35 で示されたのは、(71e)の例文で浅野が示した「制約型」ウチニのスキーマであり、このように「S2 で表される事態が完全に S1 に内包される」制約型が「ウチニ」構文のプロトタイプといえる、としている。図 36 は例文(71b)で示された「並列型」ウチニを表している。制約型と異なり、S2 の事態 (暗くなる) の終了時点が S1 の終了時点よりも後になる部分が異なる。「うち」という語が「空間における位置関係で包含関係を示していた」という前提においてこの違いには大きな疑問が生じるが、これについて松中は「S2 が徐々に S1 の時間幅からはみ出る方向へと意味が拡張していった」と述べている。さらに、この方向性で押し進められて問題となるのが、以下の遮断型の例である。

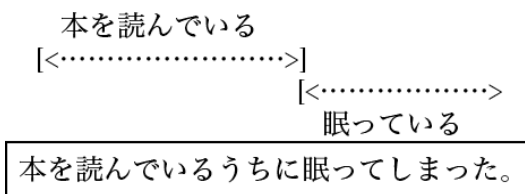


図 37・遮断型ウチニのスキーマ?

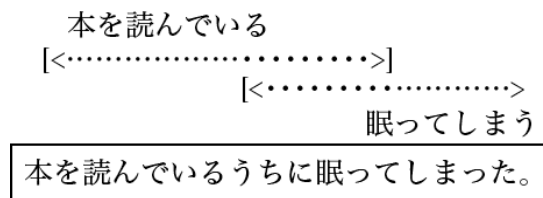


図 38・遮断型ウチニのスキーマ

図 37 の場合には、実際には「本を読んでいる」時間と「眠っている」時間には一切の重なりは無いはずであり、S1 と S2 の間には包含関係が存在しない。このことについての松中の分析は、図 38 で解法を見いだしている。

発話者の観点からこの文を考えてみると、現象としては図 37 のような状態の推移になっているとしても、発話者の意識の中では「読んでいる」と「眠っている」との間の境界線は明確なものではないように思われる。(中略)実際このような場合、本を読んでいるが浅く眠りに落ちたりまた目覚めたり、という状態の繰り返しのうちに完全に眠ってしまうということがよ

く考えられる場合であるので、発話者の意識としては図 38 のようにとらえているのかもしれない。(ibid.: 48)

上記のような見解を示した後、最終的には「『うちに』という接続助詞の持つ『内』(そして、言外に推定される『外』)のイメージスキーマと、この接続助詞によって接続される2つの事態のメタファー的写像によって本来の空間の意味から時間の意味へと拡張されたものであり、時間の意味においても、空間の『内』のスキーマが保持されていると考えることが出来る」とまとめている。

5.2.2.4. 先行研究における時空間関係

以上、「ウチニ」についての3つの先行研究を見てきたが、松中(2001)で議論されるべきは、どこまでを空間的な「内」という具体的概念からの派生と捉え、どの部分を時間に独自の発展と見るべきかという問題である。前節を見て分かる通りに、図 38 で表された(72a)の例文には、空間的具體物のウチとソトから想起されるような包含関係とのつながりを見いだすのは困難であり、少なくとも「空間的ウチのスキーマが保持されている」と主張する積極的な論拠としては機能していない。空間的なイメージと、時間領域における「ウチ(ニ)」の働きについて、どこか据わりの悪さを感じるのは、現在の「ウチ」という語彙の用法のためかもしれない。実際、現代語では空間的な内部を表す語彙としてもっぱら「中(ナカ)」を用いることが主流であり、「ウチ」は用いられることが少ない。渡辺(1995)においても以下のように述べられている。

現代語では、「なかなか心のうちを明かさない」「手のうちがまる見えだ」などの非物理的な用法に、閉じた空間の用法の残存はあるものの、「白線のうち側にお下がりにください」のような、「面や線で一方を仕切られた空間の、仕切りより引き込んだ所」を指すのが、最も物理的な用法となっている。(渡辺 1995: 25, 26)

「制約型」と「遮断・並行型」のように意味が2つに大別されていることや、格助詞「ニ」を伴わない「ウチ」の用法が空間に存在しないことなどをあわせて考えるに、「ウチ」の時間領域での振る舞いは、根源こそ具体事象にあったとはいうものの、空間由来にのみ限定されるものではなく、時間的な独自性を考慮する必要がある。そうならば、「ウチ」の意味を説明する上で、最もシンプルに的を射ているのは、国広(1982)での意義素の検討である。国広は浅野の提唱する「因果関係」という要素に疑問を呈し、その意義素には最低限の条件を提示するにとどまった。そして次の段階として、国広は「ウチニ」の特徴を明らかにするために、「アイダニ」との比較を試みているのである。

5.2.3. 「ウチニ」と「アイダ（ニ）」の比較

国広による「ウチニ」の「ウチ」性は、以下の見解に示される。

空間を指す場合、「ウチ」は「ソト」に対する空間を指す。この場合の「ソト」は無限に広がっていく空間を指すのではなく、普通「ソト」と「ウチ」の境界線からあまり離れていない空間、人間生活の見地から関係のある範囲を指すものと考えられる。(中略)つまり、「ウチ」を用いる場合は、話題に関連のある空間を「ウチ」と「ソト」に二分して、「その注意の中心に近い方」という捉え方をしているのではないかと考えられる。(国広 1982: 261)

そして、これに「時間表現の場合も同じような考え方が裏に潜んでいる」という仮定を加え、「S1 ウチニ」は< S1 が当てはまらない期間になる前に > という意味があると分析する。このときに、「S1 と S2 の境界線」という要素はそこまで具体的に注目されるものではなく、あくまで「両端がぼやけている」表現だとしている。そして、これに対して「アイダニ」は「S1 と対比する期間」を想定する度合いが低い。国広は以下の例でそれを示す。

- (74) a. 私が風邪で寝ている {アイダニ/*ウチニ} 友達が見舞いに来てくれた。
b. 旅行している {アイダニ/*ウチニ} いろいろな名所旧蹟を見た。(ibid.: 265)

(74)の例の場合、たとえば「風邪で寝ている」が当てはまらない期間は「風邪が治った後」であるが、風邪が治った後には友達が見舞いに来ることはないために、わざわざ「ウチニ」で指示する必要が無く不自然となる。同様に、「旅行し終わった後」には名所を回することは出来ないため、「ウチ」に対する「ソト」が想定できず、(74b)も不自然になるという。逆に、「反対の想定」を喚起しやすい表現、たとえば否定を伴うと、「ウチニ」は「アイダニ」よりも容認性が上がる。(75)のような例は「ウチニ」が「S1 の当てはまらない期間」という反対の想定を内在させていることのサポートと言えるだろう。

- (75) a. 晴れている {うちに/あいだに} 家に帰りましょう。
b. 雨が降らない {うちに/*あいだに} 家に帰りましょう。

ただしこれはあくまで文脈に依存するものであり、はっきりと時間枠が想定されるような場合「アイダニ」も用いることが出来る。

(76) 誰も見ていない {うちに／あいだに}、宝石が無くなっていた。

「ソト」を想定しているかどうかという要因は、「アイダニ」と「ウチニ」に意味的な違いを生じさせる動機ともなっており、以下のような例ではニュアンスが変わってくる。

(77) a. 食事をしている {うちに／あいだに}、3回電話がかかってきた。

b. 一週間の {うちに／あいだに} 3度雨が降った。 (ibid.: 266)

「ウチニ」を使った場合、「ソト」におかれた逆の想定が喚起され、(77a)の場合には「食事の後にかかってくることは予測していたが、早くも食事中に」という予想外の気持ち、同様に(77b)では、「一週間に3回も雨が降るのは多い」という主観的な内心を含んでいるとされる。他方、「アイダニ」を用いた場合、あくまで特定期間に何度事象が発生したかを客観的に述べるものである。ここから、「ウチニ」との対比を経て「アイダニ」の特性として、「**時間枠の規定を定める要素が強く**」、「**両端がはっきりしている**」ことが推察される。言い換えるなら、「ウチニ」における「反対の想定」と同様に、「アイダニ」に直感的に想定できる必要な要素は、やはり「両極」の存在ということになるだろう。時間的な語彙で表現するならばそれは「始点」と「終点」の存在であり、当然予測されることであるが、始点と終点が想起しにくい場合、「アイダニ」は不適となる。

(78) 祖父が死んでいる { *うちに¹⁶／*あいだに } 遺産を親族で分配した。

(松中 2001: 47 「あいだに」は著者)

これらの分析から、国広が最終的に提示した「アイダニ」の意義素は以下のようになる。

(79) 【アイダニの意義素】

< S1 の出来事の時間枠の中で S2 の出来事が起こる >

< 時間枠の両端がはっきりしている > (ibid.: 264)

5.2.4. 「アイダ」の意義素の適用

「アイダ」を規定するものは「両端」であり、「アイダ」の意味するものは、その2極に挟まれ

¹⁶ 「うちに」の場合も、「祖父が後々生き返る」という反対の事象を想定することが出来ないために不適となる。

る領域、範囲である。これだけの規定から、様々な「アイダ」を取り巻く現象を検討することが可能になると考える。小さな聞き取り調査で「アイダニ」と「ウチニ」の比較を行ってもらったところ、いくつかの例文で「ウチニ」は自然だが、「アイダニ」だと不自然になる例が確認された。これらの例については、「アイダニ」に先行するイベント S1 を規定するための「両端」（つまりは始点と終点）が想定しにくい場合であると考えられる。他方の「ウチニ」は、「ソトに属する反対の事象」が想起できればいいので、境界が曖昧な場合でも容認可能である場合がある。

(80) 明るい {うちに／?あいだに} 帰宅する。

他にも、以下のような現象も観察できる。

(81) a. 寝ている {うちに／あいだに} 郵便屋が来た。

b. まだ寝ている {うちに／?あいだに} 郵便屋が来た。

(81)の例は、「まだ」の有無によって容認度と意味合いが変わってくる。(81a)の場合、「寝(てい)る」という状態は始点と終点の定まった1つのイベントとして認識が可能であるが、「まだ寝ている」と発話者の意図が含まれ、「自分が寝ている時間だったのに郵便屋が来てしまった」というニュアンスを出そうとすると、「まだ寝ている」といえる「範囲」がとりにくくなってしまうため、「アイダニ」が使いにくい(ただし、この事例の場合、「ソト」との対比を示すことが優先されているため、「ウチニ」が優位となってブロッキングが働いている可能性もある)。また、前述した否定との共起についても、「～している」という状態の範囲はとりやすいが、「～していない」状態に注目して始点と終点を見いだすのは不自然であることから、「アイダニ」は不自然になってしまう((75b)参照)。もちろんこれは「両極を想起しにくい」場合に限り、否定と「まだ」の組み合わせはむしろ自然な表現になる場合もある。これはあくまで、文脈的に S1 にあたるイベントがどのように決定されるかによるものである。

5.2.5. 「アイダ」の時間用法の広がり

5.2.5.1. 1次元性

「2つの極によって与えられる」という特徴は、言い換えれば「2つの極しか特徴付けの要素がない」ということでもある。2点による範囲の限定は、基本的には**1次元の要因を特徴付けるもの**でしかない。このことが、「アイダ」に豊富な時間的意味を与えている1つの原因であると考えられる。たとえば、空間的な「アイダ」の表示の場合、単一の対象物をとって「Xのアイダ」とす

るのは困難であるが、時間を表す語彙（時間の幅を表す名詞や形容詞、継続動詞のテイル形など）をもって「X(の)アイダ」とするのは容易い。

- (82) a. *琵琶湖のアイダの島 *壁のアイダの染み (時間の幅を表さない名詞)
b. 運動会のアイダの休み時間 (時間の幅を表す名詞)
c. 長いアイダ苦勞を重ねた (時間の幅を表す形容詞)
d. 食事をしているアイダしゃべり続ける (テイル形)

これは、表示すべきものが時間である場合に、その始点と終点を1次元的に指定するだけで、時間の状態を一意的に表示することが可能であるためだ。他方、空間の場合、2次元、3次元的な広がりを見せるために、2つの極をとって「アイダ」で表示しようとしても不自然になる。あくまで空間的に「アイダ」を用いるのは、2点間に「線」的なイメージが想起され、その線上の範囲をとる場合にのみ可能となる ((68a)など)。

5.2.5.2. ニ格との共起

明確に区別する必要があるのは、時間領域における「アイダ」と「アイダニ」の違いである。空間領域の場合にはそもそも無助詞の「アイダ ϕ 」という形式が無いので比較出来ないが、時間領域の場合も、「ニ格を取捨選択できる」わけではなく、「ニ格の有る無しで意味が変わる」のだから、その差を確認し、原因を調べる必要がある。ニ格を伴う場合は、基本的には空間と同じように扱っても問題無い。格助詞ニの機能については、「移動の着点」や「存在の場所」などに加え、「時間点」を機能として取り上げる研究もある (岡 2013)。問題は、無助詞の場合にどのような意味を持ちうるか、という部分だ。これについて、時間表現の助詞についての先行研究として中村 (2001) を参照する。まず、中村は以下のような例文をあげて、現象を大きくわけることから始めている。

- (83) a. 3時に、映画を見ました。
b. きょうは、先生と会いました。
c. 夜、先生と会いました。 (中村 2001: 158)

(16)の3つの例文にある通りに、時点の副詞句における選択肢には、大きくニ、ハ、そして無助詞 (ϕ) がある¹⁷。これらの用法に関しては、大まかに以下のような性質があることが分かっている。

¹⁷ 細かくは「ニハ」なども存在するが、今回は扱わない。

- (84) a. 「3時に」等の曆的（絶対的、calendrical）表現は助詞のニと共起する。
 b. 「きょう」等の直示（相対的、deictic）表現はニと共起しない。
 c. 「夜」等の表現はニと共起する場合と共起しない場合がある。(ibid.: 158)

例として、(83)の各々の文に「ニ」を加えたりはずしたりすることで確認出来る。そして、中村(2001)ではこの3つの性質を認めた上で、こうした現象が何故起こるのかを細かく検討しており、こうした現象を分け隔てる要因の1つとして、各語彙（きょう、夜など）の持つ副詞性と名詞性の違いが関与していると指摘する¹⁸。つまり、「きょう」「あさって」等の直示は副詞であるため格助詞と共起しない¹⁹が、「3時」「3日」等の表現は名詞なので格助詞と共起する。しかし、すべての語彙が副詞か名詞かに一義的に決定されるわけではなく、「夜」「朝」「夕方」等のような語彙は、副詞性と名詞性を両方持つことになる。そのため、副詞との共起の状態には揺れがある。また、名詞性、副詞性の他に、両方の用法を持つ語彙に関しては、述語の性質によっても違いが現れる。具体的には、動作性述語か、状態性述語かによって、ニと共起出来るかどうかが変わってくる。

- (85) a. 夜に、山に登りました。
 b. 夜、山に登りました。
 c. *夜に、月がきれいでした。
 d. 夜、月がきれいでした。(ibid.: 159)

同様に、ニ格と無助詞の両方を取りうる場合でも、ニ格には時を限定する働きがあるので、時点を新情報として提出したり、焦点化することが出来るのに対し、 ϕ の句はそのようなことが不可能であるとも主張する（寺村(1983)、益岡(1995)による）。

- (86) a. 10年前に、私はあることを決意した。
 b. 10年前、私はあることを決意した。
 c. あることを決意したのは、10年前だ。(ibid.: 160)

(86a)はニ格なので(86c)のような読みが出来るのに対し、(86b)はそのような読みが出来ない。益

¹⁸ 「副詞性」というのも、検討を要する言葉であるが、ここでは言及されていない。仁田(2002)の言葉を借りるならば、副詞とはあくまで「副詞的修飾成分」の総称であり、「副詞的修飾成分」を含むからこそ「副詞」である。同様に「名詞性」にも疑問は残るが、これらの問題は次章に譲る。

¹⁹ ただし、「今日」を「こんにち」、「明日」を「みょうにち」など漢語読みものはニと共起しうる。

岡 (1995) では、このような現象に対して、ニの句は「時の限定」を行い ϕ の句は「時の特定」を行うとしている。

5.2.5.3. 「アイダ」と「アイダニ」の違い

以上の事実から、まず何故「アイダ」が時間領域でのみ「ニ」やその他の助詞を伴わない ϕ 形式を持つことが出来るかが分かる。空間を表す名詞「アイダ」に比べて、時間領域の「アイダ」は動詞と直接結びつく副詞性を持ちやすい。空間名詞の場合には助詞を伴って動詞との関係性を明示する必要があるが、時間領域では、「今日」や「夜」と同様に、それだけで事態のありようを示すことが可能である。中村 (2001) でまとめられた通り、基本的には二格を伴う場合が「時の限定」であり、焦点化された時間を新情報として提示する働きを持つ。他方、無助詞 ϕ の場合には、動作の発生時点を特定する働きではなく、動作事態の出現や存在の有り様を示すものとなる。

(68) d. 私が仕事をしているアイダ寝ているなんて。 (再掲)

d'. 私が仕事をしているアイダニ寝ているなんて。

(68d)の場合、「寝ている」状態は「私が仕事をしている」期間はずっと続いていることが含意されており、仁田 (2002) の時間副詞の分類に従えば「時間関係の副詞」に属する意味になる。一方、(68d')では、あくまで「眠りに入る」という瞬間的な動作が行われたのが「私が仕事をしている」期間内であることが示され、おそらく、その後眠った状態で仕事が終わった「私」に発見されただろうことが含意される。これは仁田の分類では「時の状況成分」に分類され、事態の外的な時間的位置づけを表す意味になっている。このことは、中村 (2001) で挙げられた対応する述語動詞が動作性であるか、状態性であるかの違いにも対応している。「時間関係の副詞」として、事態の内的状況を示す無助詞 ϕ の広がりとして、元々存在していたはずの「はっきりした両端」が失われ、「事態の継続」意味を持つ形式的な用法に転じるのも興味深い。

(68) e. しばらくのアイダ、留守にする。

(87) 長いアイダ放っておいた。

こうした表現は、既に期間を特定する機能を有しておらず、二格を伴って現れることは出来ない。最終的には(68f)の「このアイダ (コナイダ)」に至ると考えられるが、ここに至る語彙化については、また別レベルでの検討が必要である。

5.2.6. 「アイダ」に見られる独自性と時間的性質のまとめ

以上のように、前節で取り上げた「アタリ」と比較しても、「アイダ」は時間的な領域において独自の意味分化や用法の拡大が進んだ、時間ドメインにおいて空間とは異なる点から発達した語である。今一度まとめておくと、「ウチ (ニ)」と「アイダ (ニ)」の時間領域における意味については、ほぼ国広による意義素をそのまま受け継いでいる。「意義素」は汎用性に欠ける言葉であるので、求められるならば松中 (2008) を倣って認知言語学の俎上にのせるため、スキーマとして適正な形を定めることが必要になるだろう。現時点では「サキ」のようにその現象素を取り出して図示することは困難であるが、意義素で提唱された「時間枠の両端」という要素が焦点となることは確実であろう。こうした性質が「アタリ」のような名詞と異なっているのは、その意義素に含まれる「2点の両端」という性質そのものが、時間の相関性、つまりは時点Aと時点Bという相対的位置取りの表れとして時間要素に還元されるためである。「ウチ」との比較からも分かる通りに、「アイダ」の持つ意義素は、時間の本質である順序性、「時間の異なり」を指示したものであり、それ故に、時間独自の発展が得られる結果に繋がった。

そして助詞「ニ」との関係については、本節では「副詞的であるため」という漠然とした処理してになってしまっているが、本来ならば更に多様な時間副詞、そして他の時空間に渡る形式名詞との関係を調べることで、精緻化が必要になる。特に、「今日」や「夜」といった名詞が副詞的に用いられると「時の状況成分」になるのに対し、「アイダ」の場合には「時間関係の副詞」として用いられるという違いは、おそらく「アイダ」をはじめとした「ウチ」などに関わる大きな問題の1つと考えられる。時間副詞を巡る助詞との関わりは、総論的に第6章で取り扱うこととする。

5.3. 「トコロ」の助詞による時間意味変化

前節で表れた名詞と助詞の関係性は、時間語彙の表す意味内容に大きな影響を及ぼす重要な分析対象である。中村 (2001) で分析している通り、助詞の付与を許すかどうかは語彙によって異なっていることも重要であるし、名詞+助詞の形で表示された句は、名詞的役割を離れて様々な要素で文章表現の関わりを持つ。本節では、そうした「名詞」+「助詞」の形式の代表として、「トコロ」の有り様を観察・分析したい。「トコロ」は「アタリ」同様に空間的要素が支配的であると見られる名詞であり、「アタリ」についても同様の分析は可能であるが、「トコロ」の方が「アタリ」よりも用途が広く、空間を指示する名詞としての役割以外の時間関係の意味が豊かである。本節では、時間を表す形式名詞「トコロ」に絞って、助詞との関係性を探っていくこととする。

5.3.1. 日本語テキストによる「トコロ+助詞」の機能説明と問題点

直接的に「トコロ+助詞」の形式の意味の類別を概観するため、非母語話者向けに作成された日本語のテキストを参照したい。以下は前節でも取り上げた『どんなときどう使う日本語表現文型500』（友松・宮本・和栗 1996）において、「トコロ+助詞」の形式がまとめて扱われたセクションの引用である。

(88)日本語テキストにおける「トコロ+助詞」の例文 (ibid.: 33)

- ①日曜日のお楽しみ番組が始まったところに電話がかかってきた。
- ②いい夢をみていたのに、ごちそうを食べるところで目が覚めてしまった。
- ③ご飯を食べているところへ友達が訪ねてきた。
- ④家を出るところを母に呼び止められた。

「トコロ」に「ニ」「デ」「ヘ」「ヲ」という4種類の助詞を後続させた例文が取り上げられている。同様に、Web上で同じ課題を扱った日本語教育の資料サイト²⁰でも、これらの4つの助詞をまとめて取り上げ、1つの学習内容として説明を試みている。以下がその説明文である（一部編集、一部下線は発表者）。

(89)

- ⑤最後の一行を書いたところで、気を失った。
- ⑥出かけようとしたところに、客がやってきた。
- ⑦地震がおさまったところを、津波が襲った。
- ⑧マラソンランナーはゴールに到着したところで、倒れてしまった。
- ⑨林さんに電話をかけようとしたところに、その林さんから電話がかかってきた。
- ⑩夜道を歩いていたところを、誰かに頭を殴られた。

⑤⑧の「ところで」は、「ところ」+動作の場所を表す格助詞「で」の形で、前の動作や変化に一区切りついた状況のもとで、何かが起こったり、何かを起こしたりすることを表しています。「ところで」の前には動詞の「～た」の形が来て、後ろに続く文では、事態の変化や動作を表す表現(開始する、終わる、出てくる、など)が来やすくなります。⑥⑨の「～ところに」は「ところ」+帰着点を表す格助詞「に」の形で、ちょうどそういう状況の時に、誰か(何か)が、やってくることを表しています。「ところに」は「ところへ」に置き換えることができます。「ところに」の前に

²⁰ 日本語教育通信（国際交流基金） <https://www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/tsushin/grammar/201106.html>

は「～(しようと)している／していた」の形が来ることが多いです。後ろに続く文では、人やものや事態が出現する表現(来る、やってくる、(電話が)かかってくる、通りかかる、など)が来やすくなります。⑦⑩の「ところを」は、「ところ」+目的・通過点を表す格助詞「を」の形で、ちょうどそういう状況の時に、直接的な働きかけを与えるような動作・事態が続くことを表しています。「～ところを」の後ろに続く文では、「襲う」「殴る」、「呼び止める」「助ける」などの直接的な働きかけをする動詞や、その受身形(「襲われる」「助けられる」など)が使われることが多いです。また、「～ところを」は、「見る」「見つかる」「見られる」「見つけられる」などとともにより用いられることもあります。

上記のように、「トコロ+助詞」の形式の差を説明するための主な方法としては、それぞれに特徴的な用例を取り上げ、その文章から読み取れる場面性を切り出し、形式自体の意味を示すことが多いようである。しかし、下線部で示したような特徴の記述は、各々の峻別を行っているとは言い難いものも多く、特徴を取り上げてはいるものの、各々の用法を使い分けるための役を果たさないことが多い。実際、非母語話者がこうしたテキストで用例を学んだ後には使い分けの練習問題に取り組むことになるが、そこで出される選択問題もはっきりと識別できるものになっていない。以下にあげるものは、同テキストで出題された練習問題であり、空欄に「で・に・を」を書きなさい、というものになっている。

(90) 日本語テキストの練習問題 (ibid.: 36)

- a. コウさんはいつも私がお飯を食べようとしているところ () 来るんです。
- b. 昨日の試験では、もうすぐ書き終わるところ ()、終了のベルが鳴ってしまった。
- c. この時計は、3時をちょっと過ぎたところ () 止まっている。
- d. たばこを吸っているところ () 見つかってしまった。

例えば(90a)は同書によれば「ニ」が正解とされているが、特に場面設定を限定しない場合、「デ」や「へ」を入れても問題無く成立する。(90b,c)は「デ」以外を入れるのは困難であるが、上記のような使い分けの説明を読んだとしても、この文章が「デ」に相応しいものかどうかははっきりとは分からない。これらの「トコロ+助詞」の形式をまとめて取り上げるならば、より精緻化した条件設定、意味の記述が必要不可欠なのである。

また、こうして時間的な「トコロ」を扱う場合、その他の時間語彙との識別も問題になってくる。例えば(89,⑨)の「電話をかけようとしているところに」は「電話をかけようとしている時に」と置き換えることが可能である。しかし、「トコロ」と「トキ」では助詞との関係性などに選択制限が

ある。

- (91) a. 大きな木があるところにかばんを忘れた。(空間・トコロニ)
b. ごちそうを食べようとしているところにお客がきた。(時間・トコロニ)
c. ごちそうを食べようとしている時にお客がきた。(時間・トキニ)
- (92) a. あの大きな木のところでごはんを食べよう。(空間・トコロデ)
b. 会議が一段落したところでご飯をたべよう。(時間・トコロデ)
c. *会議が一段落した時でご飯を食べよう。(時間・トキデ)

こうした「トコロ」の持つ機能、特に助詞の関係性を観察し、その原因を探ることが本節の主目的となる。こうした目標を満たすために、今回は「ところ {を・に・で・へ}」を構成する要素をいくつかに分けて検討していくことにする。

5.3.2. 助詞の意味格

この問題を扱うにあたり、最初に行う必要があるのは助詞が持つ意味についての検討である。「助詞自体に意味があるのか」と言った議論もあるが、それらを含めて先行研究から「助詞が何を表すものか」という部分を概略的になぞる。本節で取り扱うのは「ニ・デ・ヘ・ヲ」の4つなので、格助詞についていくつかの「意味」を検討したい。「意味」を取り扱う上で必要な要素が、山梨 (1993) に簡潔にまとめられていたので、それを引用する。

(93)

A.[深層格] : a.外部世界の事実関係を反映する格の意味規定

b.真理条件的な関係による格の意味規定

B.[認知格] : a.メンタルな認知のプロセスをダイナミックに反映する格の意味認定

b.複合的視点による統合的な格の意味規定

(山梨 1987, 1989)

山梨 (1993) においては、Fillmore によって形作られた格文法 (case grammar) とは異なった視点を与え、新たな方策による格の与え方が検討されている。既存の深層格の認定の不十分な点に関しては、以下の引用が分かりやすい。

一般に、深層格を設定する厳密な基準は与えられていない。深層格の概念を言語事象の記述に

さいし明示的に導入している文法モデルとしては格文法(case grammar)がその代表例にあげられるが、どの範囲までの深層格をどのような基準で設定するかは、モデルによって異なる。(山梨 1993: 41)

具体的には、以下のようにいくつかの格解釈が可能である例をあげている。

(94) 格解釈の認知的スケールによる変化の事例 (ibid.: 49)

- <具格的> a. カギで、ドアを開ける。
・ b. 片足で、立つ。
・ c. 扇風機で、シャツをかかわかす。
・ d. モンローの魅力で、観客を惑わす。
<原因格的> e. ガンで、死ぬ。

(94a)などは典型的に具格と取ることが出来るのに対し、(94b~e)と例を見るに従って具格性の解釈が下がり、代わりに原因格としての解釈が強くなることを述べている。こうした解釈の揺れは、この場合は各々の名詞(カギ、扇風機、ガンなど)の持つ様々な属性から総合的に与えられるものであるとし、この種の視点の複合からなる認知枠を「格の複合スキーマ」と呼び、この種の複合的な視点の総体によって複数の格解釈を相対的に決めていくプロセスを「**視点の複合リンクによる拡張**」と呼ぶ。こうした「認知格」のアプローチにより、問題の現れた表現に対し、カテゴリー化された格の役割を唯一的に与える必要が無くなる。今回の題材に関わる部分で言えば、たとえば、「空間の地点を位置づける格助詞」の「ニ」が時間表現に使われる事情を、意味領域のメタファーリンクの拡張という視点から説明している。ただし、こうした認知格の議論において成される説明とは、基本的には様々に想定された格役割の相互関係に対するものであり、即時的に「助詞の意味」に切り込むものではない。そこで、今回はこうした認知格の持つ意味のリンク・多様性を維持しながら、ある程度トップダウン的に「助詞の意味」を説明出来る道具立てを探していくことにする。以下に、田中 (1997) と竹林 (2007) という2つの先行研究を見ていく。

5.3.3. 助詞の操作子機能

田中 (1997) においては、一部の助詞を「空間辞」として弁別し、それらに固有の**操作子機能**を付与することを目指している。操作子機能の概念については、以下に引用する。

意味づけ論では、各助詞に「固有の操作子機能」を認め、それぞれが、コトバ(の配列)の意

味づけの仕方を整序する役割を果たすと考える。この論法で行くと、たとえば「猫がサンマを食べた」と言えば「が」と「を」が<猫><サンマ><食べる>の3つのチャンク²¹の関係を構成する働きをすることになる。すなわち、助詞の操作子機能は、コトバの流れから事態を構成する際に、<チャンクをこれこれしかじかに関連づけよ>という要請を行う。「猫-サンマ-食べた」からだけでも<猫がサンマを食べた>という事態を構成することが出来るのは経験知識があるからである。しかし、原理的には<猫はサンマが食べた>とか<猫とサンマを食べた>などの解釈も可能である。こうした解釈の可能域を縮減し、事態構成の仕方を整序するのが助詞である。(田中 1997: 16)

操作子機能を認定する目的は、文を与えられた際にその文に意味づけする働きそのものを探ることにある。上述の深層格（意味格）は、文の意味が解釈された時点で「名詞+助詞」の部分に付与されるレットルであることと比較されたい。このため、助詞の研究を進めるためには「助詞の操作子機能」と「助詞の意味用法」を峻別する必要があることを示唆している。具体例を1つ挙げておくと、たとえば同じ「のぼる」という動詞の場合でも、それに先行する名詞（のチャンク）によって、同じ空間名詞でも事態を認識するときの自然さに差が出ることもある。これらは、それぞれの助詞がチャンクに向けて要請する操作子機能が異なっているためである。

(95) a. 山 {を／に} のぼる。

b. 空 {?を／に} のぼる。

c. 川 {を／?に} のぼる。

(ibid.: 18)

5.3.3.1. 「ヲ」の操作子機能：<xを動作が作用する対象として取り立てよ>

数ある「ヲ」の働きの中から、空間を表す場合の用法だけを区切り、これを助詞の「空間辞」としての働きと名義付けする。すると、「ヲ」が空間辞として機能する際に必要なのは移動動詞との共起ということになる。

(96) a. 乗客がバス {から／を} 降りる。 a'. バスの中 {から／*を} 降りる。

b. いかだが岸 {から／を} 離れる。

c. 明日はその公園を歩く予定だ。

(ibid.: 30)

²¹ ここでは「チャンク」とは「事態構成における意味素材」を表す。例の場合には<猫><サンマ>などが呼び起こす、具体的な記憶内容の総体である。

一般的に「ヲ」は<起点>や<経路>を示す助詞であると役割を設定されるが、田中は、山田 (1981) や国広 (1967) などの<他動詞の動作・作用の対象を示す>という主張を基に、<起点><経路>といった具体的意味を付与するのではなく、<xを動作が作用する対象として取り立てよ²²>という操作子機能を与えている。つまり、この操作子機能によって文中の「ヲ」に意味づけがなされ、空間を表す名詞と結びつく結果として「ヲ」が空間辞として認定され、<経路>などの意味が引き出されることになる。また、「起点」意味については、同じく空間辞として機能している「カラ」は問題無く意味内容として持つものだが、「ヲ」の場合は<起点>が問題なのではないという言及も行っている。(96a)の場合、厳密には<降りるという動作が作用する対象としてのバス>が話題になっている。「(96a')において「ヲ」が不自然になってしまうのは、<降りる>が<内から外への移行>を要請する動詞であり、起点を示す「カラ」ならば自然な意味になるが、「ヲ」の場合には<バスの中>を対象として取り立てることが動詞の要請に不具合を起こすためである」。

(97) a. 階段 {を／#から} 降りる。

b. 屋根 {?を／から} 降りる。

(ibid.: 31)

「xから」が<地点>として、「xを」は<対象>としてxを捉えていることの補足が(97)で示されている。通常、<階段>は降りる動作の<地点>にはなりにくく、(97a)の「から」は階段から飛び降りたり、離れたりする意味になる。「ヲ」の場合は「降りる対象」として階段を取り立てるために、結果的には<経路>を意味する。逆に、<屋根>は<降りる行為が行われる地点>であって、<降りる動作が作用する対象>、つまり<経路>ではない。同じような<対象>意味の差は、「家から出る」(外出)と「家を出る」(家出、自立)などの意味の差に表れるだろうとも付記されている。以上をまとめると、今回主に取り扱わない典型的空間辞と「ヲ」の操作子機能については、以下のようにまとめることができる。

(98) 「xを」 xを<動作が作用する対象>として捉える。

「xから」 xを<動作が発生する地点・出所>として捉える

「xまで」 xを<動作の到達点・限界点>として捉える。

5.3.3.2. 「ニ」の操作子機能：<xを対象指定し、動詞的チャンクに差し向けよ>

助詞の「ニ」については、用法があまりに多岐にわたるために意味分類はほとんど不可能である

²² このときの「取り立てる」とは、「あるチャンクを動作の作用域に取り込む」程度の意味としている。

とするが、空間辞としての「ニ」については、ひとまず<xを対象指定し、動詞的チャンクを差し向けよ>とまとめている。<対象指定>という働きについては、具体的意味内容が含まれていない「する」を用いた「xにする」の解釈に<決定・選択>が優先されることから分かる。「動詞的チャンク」とは、動詞チャンク、および動詞句チャンクのどちらかである。

(99) a. 彼はデスクにほおづえをついた。

b. 猫は居間にいる。

(ibid.: 36)

(99a)の場合、「デスクに」の「ニ」が指定を差し向けるチャンクは動詞<つく>ではなく<ほおづえをつく>であり、(99b)の場合には<居間>は<いる>という動詞チャンクに差し向けられている。こうして「xに」は操作上xを対象指定するだけであり、差し向けられた動詞的チャンクとの関連の中で、意味的に様々な解釈が可能となる。また、当然のことながら、差し向けられるxは、動詞的チャンクと整合性を持たねばならない。(95c)において「川にのぼる」がやや不自然になってしまうのは、「川」が「山」や「空」と違って<移動先>として対象指定（個体化）しにくいことに起因している。

「ニ」は「ヲ」と同様に動詞との相互作用によって空間辞となる助詞であり、動詞のタイプによっていくつかのタイプに分かれる。移動動詞（行く、登る、向かう）や接触動詞（当たる、触れる）の場合にはその<モノ>を<着点>とし、存在動詞（いる、ある、住む）や設置動詞（置く、備える、埋める）の場合にはその<場所>として解釈される。同じ名詞をとっても、動詞によってその現れ方が異なってくるということだ。

(100) a. 彼らはあの山にいる。 <場所としての山>

b. 私は明日あの山に登るつもりだ。 <モノとしての山>

c. ヘリが昨日あの山に着陸した。 <着点としての山> (ibid.: 39)

<対象指定>のみを行う「ニ」の場合、方向性を持たない移動動詞との共起には注意が必要となる。たとえば、公園の外から公園に向かうときに、「彼らは公園に走った」はやや不自然であり、「公園の方に」「公園に向かって」などの方向性を付加してやることで自然になる。これは、対象指定だけでは、方向性が定まらない<走る>という動詞チャンクと<公園>がうまく関連づけられないためだとしている。逆に、「行く」などの方向性を持つ移動動詞の場合、「ニ」は自然に用いることが出来る。ここで、前述の「ヲ」との比較も可能になるだろう。

(101) これから駅 {に／?を} 行く。

(ibid.: 39)

「ニ」が<xを動詞チャンクに差し向ける>ために自然になるのに対し、「ヲ」は<xを動作が作用する対象として取り立てる>ことを要請するために、<行くという動作が作用する対象>として整合性をなさないためである。xがこの対象として意味を持つものになれば、<を行く>が意味を持つ表現も可能になる。(cf. 秋の京都を行く)

5.3.3.3. 「へ」の操作子機能：<xを移動動作の方向（先）として捉えよ>

「へ」は「京都 {に／へ} 行く」のように「ニ」と置き換え可能な場合が多い。その中でも特に、移動動詞との共起が必要であることから、方向性を有し、<xを移動動作の方向として捉えよ>という操作子機能が与えられる。「ニ」との違いは何かというと、「へ」は<方向>を表す空間辞であり、その心的視点は<目標点>に向かう位置に置かれるのに対して、「ニ」は<着点>に視点をおいた解釈を要請するということである。たとえば「向こうへ着いたらすぐ知らせます」という表現は、<発話者の視点が「向こう」ではなく「こちら」に置かれている>表現として説明されることになる。ただし、通時的变化により、「ニ」と併用されることで「椅子へかける」「名前はここへ書いて下さい」といった<着点>を表す用法も現在では普通に用いられる。

(102) a. 家 {に／へ} 帰る。

b. 海外旅行 {に／へ} 行く。

c. 北 {に／へ} 向かう列車。

(ibid.: 42)

もう1つ取り上げられる「心的視点」という「ニ」と「へ」の差であるが、(102)のような例でどちらが自然かを調査した結果、(102a)は圧倒的に「ニ」が支持されたという。これは、「家」という存在が心理的に視点を置きやすい<場所>であり、目標点として外部に視点を置く「へ」よりも「ニ」が適していることを示唆する。また、(102b)においても、向かう<方向>よりも、対象となる<着点>に視点が置かれやすいために「ニ」が優位である。対照的に「へ」が優位な事例としては(102c)があり、この場合、「北」という方角が、「へ」の持つ<方向性>によって補強されるためである。

5.3.3.4. 「デ」の操作子機能：<xを対象限定せよ + α>

「デ」は語源的に「にて」の短縮形だという説を採用し、さしあたり<xにて動作が起こる>ことを前提とすると、<xとの密着>および<動作の発生>の2つが関与することになる。つまり、<xを動作が起こる場として捉えよ>という操作子機能を持つことになる。しかし、「デ」の全ての用法

でなんらかの動作が予期されるかという点、そうとも言えない部分については注意が必要である。

(103) a. 藤沢でこの店が一番うまい。

b. 日本で物価が高いのは何とんでも東京だろう。 (ibid.: 44)

このような動作動詞を含まない事例では、<動作予期>は必ずしも含まれるものではない。この場合には<xを領域限定せよ>という機能に留まっていると考えられる。ただ、やはり「デ」は多くの場合に<動作予期>を伴うことも事実であり、「京都に」と言う場合は「行く」「する」「変える」など、「ニ」によって動詞的チャンクが差し向けられる数だけ意味が想定されうるが、「京都で」といえば<京都という場で何かが起こる>という解釈に限定される傾向がある。これを踏まえて「デ」についてはいささか不明瞭にはなるが、以下のようにまとめられている。

(104) 「デ」の操作子機能²³

一般的には<xを対象限定せよ>という操作を要請する助詞であるが、<領域限定 (xにて)>の場合には、限定領域内での<動作>あるいは<事柄>が予期される。

「ニ」と「デ」の働きを比較しておくと、たとえば「鎌倉 {で/に} 遊ぶ」という場合、「デ」は「鎌倉」を<場所>として限定し、その中で<遊ぶ>という動作が起こることのみを示し、場所情報を与えるのみに留まる。これに対し、「ニ」は<対象指定し、動詞的チャンクを差し向けよ>を要請するため、<鎌倉>と<遊ぶ>の関係は、動詞チャンク<遊ぶ>の中に<鎌倉>の意味内容を取り込む必要があり、両者が協働して1つの事態（鎌倉に遊ぶこと）を構成することになる。

5.3.4. 空間名詞「トコロ」と助詞の関係

前節までで助詞の操作子機能の設定は完了したが、田中 (1997) では、これに続いて空間名詞「トコロ」についての考察も行っており、似たような問題を扱っているため、これも引用しておく。まず、「トコロ」の基本的な機能は「対象の場所化」であるとする。

(105) a. その小石 {のところ/* ϕ } に弁当を置いてある。

b. 子供たちは松の木 {のところ/* ϕ } に寝っ転がっている。

c. ベッド {?のところ/ ϕ } に寝ている。

²³ 本論では関係性が薄いので割愛するが、「で」はこの他にも「ペンで書く」などの場合に「モノ限定」というもう1つの限定を要請する場合もあるとされる。

d. ベッド {のところ/?φ} にテレビがある。

(ibid.: 58)

(105a,b)のように、「ところ」の主な働きは「小石」「松の木」といった空間的な広がり希薄なモノに付与され、場所化することにある。これは同じ空間名詞の「上」や「中」にも共通するが、「ところ」は(多少冗長ではあるが)「頭の上のところ」や「家の外のところ」というように、他の空間名詞にも更に付与され、空間的な広がりを与える。この広がり対象の「近傍」の意味になり、(105c,d)の比較では、「ベッドに」の場合にはちょうどその上になることになり、「ベッドのところ」とするとそのそばを意味することが分かる。これらを踏まえ、寺村(1984)を引用して以下のようにまとめている。

(106) トコロの中心的意味は、ある全体を視野に入れながら、その一部分にスポットライトを当てるときのそのスポットライトの当たる部分、というように捉えるのが正しいと思われる。その全体と部分は、空間的な広がりでも、時間的な広がりでも、またもっと漠然とした状況でも良い。(寺村 1984: 290)

ここで寺村の扱っている「時間的な広がり」というのが、今回のテーマの中心に深く関わってくる。田中も、これについていくつかの言及を行っている。

(107) a. 読書をしている {ところ/時} に、太郎がやってきた。

b. 3時間仕事をした {ところで/?時に}、お茶にした。

c. 3時になった {ところで/時に}、お茶にした。

ここでは「ところで」に対して最初から「時で」ではなく「時に」を比較している。これは、「時」というのが点的な時間(時点)を表す言葉であり、「デ」の「領域限定」が必要とする領域(動作の生起に必要な場)が存在しないためである。(107a)では、「ところに」と「時に」が同じように用いられることが示されているが、「意味的に同一内容を表すということを保証するものではない」としている。具体的には、『読書をしているところに』という表現は、空間的な意味合いを喚起し、<読書をしている場に、太郎がやってきた>ということを含意すると考えることができよう」とある。つまり、あくまでも田中の分析において「ところ」は空間である。(107b,c)の対比については、やはり「時」が点的である、という要因が強く影響しており、「3時間仕事をした」という時間幅を表すのに、「時に」が不整合であると述べている。また、「3時間しごとをしたところで」では、「ところで」によって<動作の途中経過>が場所化され、その場で別の動作が起こるというところまで読

み取ることが出来ることも付記されている。これらをまとめたものが以下である。

(108) ～時に：<ある出来事が起こる時点を指定する>

～ところに：<ある出来事が起こる時点を場所的にとらえ、その場に出来事が貫入してくると云う事態を描写する>

～ところで：<ある出来事が起こる時点を場所的にとらえ、その場内で別の動作が起こるという事態を描写する>

「ところに」の「貫入」という言葉は他に説明がないが、「ニ」の操作子機能が「xを対象指定し、動詞的チャンクを差し向けよ」であったことを考えると、何らかの動詞の働きが、「xしたところ」という時点に関わり合いを持つことを表すと思われる。こうしたまとめを踏まえて、更に以下の例にも言及する。

(109) a. 彼女が掃除をしている時に、彼は {出ていった／やってきた}。

b. 彼女が掃除をしているところに、彼は {?出ていった／やってきた}。

c. 彼女が掃除をしているところで、彼は {?出ていった／?やってきた}。

(109a)の「時に」はただ事態が起こる時点を表すだけであり、「出ていく」「やってくる」といった移動の方向には影響をあたえないが、(109b)の「ところに」は時点を場として捉え、「出来事が貫入する」という意味合いがあるため、「出ていった」は不自然になる。(109c)の「ところで」は、領域限定された場の中での生起が意味されるため、内外への移動動詞との相性が良くない。<ちょうど彼女が掃除をしているところを見計らって、彼が出た(来た)>という解釈は可能で、この場合には、場所化とその場内での出来事の発生という「ところで」の条件が満たされるという。また「ところで」には「3時間仕事をしたところでお茶にしよう」という風に<継続動作を中断する>という意味合いが含まれているように見える。これは「お茶にしよう」が発話者の意志によって遂行される動作であることに起因し、「3時間仕事をしたところで喧嘩になった」とすると<動作の中断>という意味合いは弱い。最後に、田中は「いずれにせよ『ところ』は<場所>を端的に表現する空間名詞であり、それが時間的意味合いで使用された場合でさえ、場所的な意味合いが完全に消えるわけではない、と言えそうである」とまとめている。

5.3.5. 「ヲ」と「ニ」のスキーマ

「操作子機能」という概念は、助詞の機能について明文化し、概念的な総体として捉える上で有

効な議論であったが、これに加え、もう1つの先行研究を概観する。田中らの研究も下敷きにして、「ヲ」と「ニ」を認知言語学的な道具立てで統合的に説明を試みた竹林 (2007)である。こちらの研究は、田中の「空間辞」という限定された助詞の機能を対象としたものではなく、助詞の全ての機能についての概略であることに注意されたい。

5.3.5.1. 「ヲ」のスキーマ

田中による「ヲ」の操作子機能は「xを動作が作用する対象として取り立てよ」であったが、同様の方向性として、竹林は服部 (1955) を引いている。

オの意義素は《その結合する形式の表はす事物に、その結合した形式が統合される動詞の表はす動作・作用が加はること》簡略に言へば「対格」の一つで充分である (服部 1955: 304)

これに対して、以下のような「ニ」との差についての説明が不十分であると反論する。

- (110) a. 家の近くで狂犬が人 {*を／に} 噛み付いたんだって。
 b. 体当たりでドア {*を／に} ぶつかったけど、ドアは開かなかったよ。
 c. この間、山手線だと思って総武線 {*を／に} 乗っちゃった。 (竹林 2007: 42)

確かに、(110a)の事例は田中の操作子機能の説明だけでは「人を噛む」と「*人を噛み付く」の差が説明しにくい。ただ、(110b,c)については、「<ドア>や<総武線>が動作が作用する対象ではないため」という説明で事足りるようにも見えるのは気がかりである。こうした「ニ」との差異を説明するために竹林が打ち出した「ヲ」のスキーマが以下である。

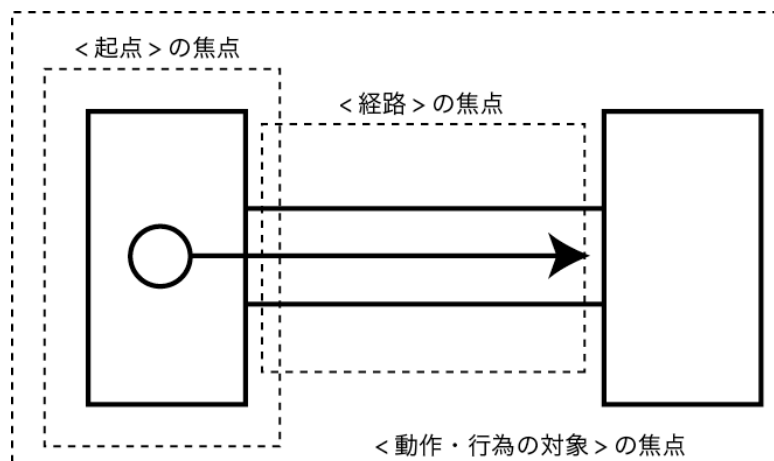


図 39 「ヲ」のスキーマ (竹林 2007: 43 一部筆者改変)

上の図 39 では、1つの図式の中に3つの焦点を置くことで、「ヲ」の持つ機能を表している。起点領域の焦点化によって「彼女は毎朝7時に家を出る」のような「移動の起点」用法が、移動中の経路を焦点化することによって「道を歩く」のような「移動の経路」用法が、そして、移動全体を焦点化することによって、「他者へのエネルギー的移動」を示し、「ボールを蹴る」や「戸を叩く」といった「動作・行為の対象」用法が説明される。このとき、「ヲ」がエネルギーの伝達を示し、他に対して（物理的／心的に）働きかける<対他的働きかけ>という意味を有していることが、様々な説明に役立つという。たとえば(19c)で「総武線」に働きかけていないという部分や、(110b)で働きかけが「ドア」に及んでいないという説明は理解出来る部分であろう。ただし(110a)については、田中の操作子機能の場合との差異が見えにくい。この部分の峻別については吟味が必要であろう。

(110a)について言えば、動詞「噛みつく」は類義語「噛む」と異なり、《噛んで、動作主の歯／牙を対象に密着させる》という意味を表す（この両者の違いは、形態素「つく」の有無による）。よって、この「人」は「歯／牙」の密着の対象であり、「噛みつく」という行為の向けられた目当てとするのが適当であると言える。（ibid.: 49）

竹林の論において興味深い部分を取りあげておくと、「動作・行為の対象」用法の中でも、やや特殊な事例を取り上げ、「状況」用法と名付けているところである。

- (111) a. 雨の中を横断歩道を駆け抜ける。
b. 満天の星の下を海岸を歩いた。
c. 穏やかな春の陽の中を公園を散歩した。（ibid.: 52）

(111a)の場合、「雨という状況に抗って」という風に、明らかに状況に抗う意味があり、(111b.c)も、特別な状況を切り出し、「状況に対して」というような意味、あるいは動作・行為の行われる状況として認知される対象を表すという。既出の「秋の京都を歩く」などもこれに近い用法であり、単なる場所ではない「状況」を「動作の作用対象」として取り立てる働きは注意しておきたい。

5.3.5.2. 「ニ」のスキーマ

竹林の論では、「ヲ」のスキーマは主立った3つの機能を焦点化の方策によって3つに分けるスキーマを展開したが、「ニ」については、非常にシンプルなスキーマを1つ提案するに留まっている。これは、「ニ」の機能があまりにも多様であり、「ヲ」のような方策を採ることが出来ないため

であろう。参考までに、竹林の引いた「に」の基本的用法 11 種を列挙しておく。

- (112) a. 具体物・抽象物の存在位置 b. 所有者 c. 動作や事態の時、順序 d. 動作主
e. 着点 f. 変化の結果 g. 受け取り手・受益者 h. 相手 i. 対象 j. 目的 k. 原因 (益岡・田窪 1987: 4-5)

これらの多数の意味をまとめるため、竹林は国広 (1986) の見方を採用し、そのスキーマを下図のように提示している。

- (113) 「に」は一方向性を持った動きと、その動きの結果密着する対象物あるいは目的の全体を本来表している。 (国広 1986: 199)

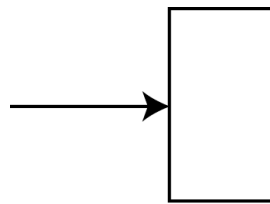


図 40 「に」のスキーマ (竹林 2007: 105)

シンプルなスキーマのみであるが、これもほぼ国広のあげた「意義素」に従っている。焦点となるのは「一方向への移動」と「密着」であり、「図書館に着く」のような「移動の到達点」用法は密着する部分に、「学校の方に行く」のような「移動の方向」用法では、矢印で表された移動の部分に焦点がある²⁴。

5.3.6. 「トコロ+助詞」の用法

5.3.6.1. 「ところを」の用法

最初に、「トコロ+助詞」の形式の中でも、最も弁別性が高そうな「ところを」を取り上げる。先行研究を確認すると、田中によれば「ヲ」の持つ操作子機能は<xを動作が作用する対象として取り立てよ>であり、竹林によれば、「ヲ」の「動作・行為の対象」用法から、「状況用法」の事例が取り上げられていた。さしあたり、実例にどのような傾向があるかを探るため、「新潮文庫の100冊」コーパスから、「たところを」で検索し、その分布を探る。「た」を付与したのは、「ところ

²⁴ 竹林による「に」の議論は主に受益構文や受け身との関係性で論じられているため、これ以上それ以外の一般的な用法についての議論はしていない。

を」のみの場合には純粋な空間用法があまりに多くなってしまい、空間・時間の差分の識別に追加の吟味が必要であるため、本論では簡略化のため、動詞接続からの「ところを」のみを取り出している。「たところ」の純粋なトークン数は143件あり、そこから空間用法や、「こと」に置換可能であるような微妙なもの²⁵を除くと、46件が残った。これらの「ところを」の時間・状況用法は、かなりはっきりした傾向が見受けられた。それは、「観察」に関わる事例と、「干渉・阻害」に関わる事例である。

(114) 「たところを」の「観察」事例 (22件)

後続動詞→目撃した 見た×6 見られた×2 見計らって×5 見せよう 見下ろされて ござらんになった×2 拝見した×2 見つけた 見せつけて

- a. 彼女の顔にあんな妖艶な表情が溢れたところを、今日まで一度も見たことがありません。
- b. 安田は小樽から《まりも》に乗ったのであるから、ホームに河西を出迎えさせておいた方が、確実に自分が列車から降りたところを彼に見せつけて、効果はより有力なはずである。
- c. 加藤は宮村の鳴き声がややおさまったところを見計らっていった。

(115) 「たところを」の「干渉・阻害」事例 (21件)

後続動詞→吹き落とされた おさえて 轢いていった 倒された 襲われた グワーンとやる 抑えつけて 串刺しにされた 大三撃を受けた とらえ 追尾し 切り倒してとどめをさし 反撃する 邪魔された さえぎりながら 抑えられた つかまえ おのを振り下ろした 打った 寝かせつけた

- a. トラックに腰掛けていたところを吹き落とされたものらしい。
- b. 道路に叩きつけられたところを、後ろからきたもう一台のトラックが轢いていった。
- c. 攻撃は夜明けだから、キンメル大将はもう起きてコーヒーを飲んでるかもしれませんなあ。カップをこのくらいもちあげたところを、グワーンとやりますか。

ここで際だった「観察」と「干渉・阻害」の2つの用法は、竹林の言う「状況」用法(111)に近い効果があるように思われる。特定の時点、地点を切り出し、その場面(Scene)自体を「ヲ」によって「動作・行為の対象」として切り出す用法である。ただし、「(111c)穏やかな春の陽の中を公園を散歩した」の場合、「穏やかな春の陽の中」は「散歩する」対象として通時的に切り出される一連の「動作の対象」であるが、「ところを」の場合、「Vするところ」「Vしたところ」は、既に動作主が何らかの行為(V)を行っており、それを直接別な動作の作用する対象とするのは困難である(*

²⁵ 「ひろく天下を歩き、見聞をひろめ、わしがなさんとしたところを継げ、と申し伝えてもらえまいか」

彼が煙草を吸っているところを遊ぶ)。「何らかの動作主が既に動作を行っている状況に、あらたな動作主が動作を差し向ける」方法は、大きく2つが考えられ、それが「働きかけによって直接的に影響をあたえないよう、観察・視認する」という「観察」用法と、「その動作に介入し、何らかの形で阻害する」という「干渉・阻害」の用法ということになる。「観察」用法が直接的に「ヲ」でマークされた状況に影響をあたえないことは、「～したところを見ると」という推測の根拠となる定型句が13件存在していることから分かる(実際の「見る」という視認動作とは異なるため、上の「観察」用法からは区別した)。²⁶

(116) 推量の根拠を表す「～ところを見る」の事例

- a. 先客一人、五十あまりの坊主、直に慣々しく声をかけたところを見ると、かねて懇意の仲でもあろう。
- b. 彼が川向こうまで逃げて行ったところをみれば、この地点は今は安全なのである。
- c. 「それもタイミングが実によかったらしいですな、私に対する話しぶりががらりと変わったところを見ますとね」と彼は毒々しく付け加えた。

「干渉・阻害」用法については、田中が(109)に関連して述べていたように「ところで」にも含まれているため、(115)のように「ところを」を「ところで」で置換出来る場合も多い。「Vところを」のVの動作主が最終的に動作を終了させられるかどうかは決まっていないが、「阻害」の意味が強いことは、以下のように、「ところを」に「～だが」「～のに」を含意する「逆接」の用法があることから裏づけられるだろう。こうした逆接の意味の強い「ところを」の場合、「ところで」に置き換えることが出来ない。

- (117) a. 「いろいろ、あつてね。老朽で来年はやめてもらう番になっていたところを、岬へいけば、三年ぐらいのびるからね。そういったら、よろこんで、承知しましたよ」
- b. 私は目黒を信用していなかったので危ぶんでいた。なにしろアルバイトで二年も務めたところを正社員になったら一日で辞めた実績を持っている。

5.3.6.2. 「ところに」の用法

「ところに」については、田中が(107)で「時に」と同じように「純粋な時点指示」に用いることが出来ると述べている(同じ意味になることを保証しない、とも言っている)。「ところに」につい

²⁶ なお、「働きかけを含まずに観察する」方策として「視認」以外に「聞く」も考えられる。今回は件数が多い為に「るところを」の例を省いているが、そちらには「想像する」や「描く」等が複数存在していた。

でもコーパスで用例を探ってみると、正確なトークン数は「たところに」が238²⁷、そのうち、想定する時間意味を示すものは9例。「るところに」の場合、トークン数が164²⁸、そのうち時間意味を示しそうなものは18例である。これらを見ると、明らかに一定の傾向が確認出来た。

(118) 「たところに」の事例

後続動詞→現れた 言い出され 飛んできて 送り込まれてきて 来た 入れて
行き合わせ やってきた 与える

- a. ピストンがシリンダー内の燃焼室内の空気の体積を限界まで圧縮したところに、噴射弁から霧化された重油が送り込まれてきて、そこで着火爆発を起こす。
- b. しばらくサロンで憩おうかと歩きかけたところに、エジプトから同船した商社の桜井という男がきた。

(119) 「るところに」の事例

後続動詞→見せつけられた 入ってきた 来客があった やって来た×2 帰って来た×2
行きあう×3 入り込んできた 飛び込んで 出くわした 割り込んで 来た×2
出合わせた

- a. 彼が独り、不愉快な顔をしているところに、亢奮に疲れ、疲れながら尚亢奮している彼の妻が入って来た。
- b. 大方夫婦げんかでもしているところに、折悪しく自分が飛び込んでしまったとでも思ったのだろう。

「タ形」「ル形」の別に関係無く、「ところに」に続く動詞は移動動詞、もしくは何らかの「導入」を表す動詞が全てであった。このことは、田中が(109b)で言及した「出来事の貫入」についての説明で現れた通りの結果である。より強い説明を施すならば、田中の言うように「出る」ことが許されないというよりは、「入る」ことのみが認められるのである。これは、田中の提示した例を少し改編すれば明らかである。

(107c'). 3時になった {ところで/時に/*ところに}、お茶にした。

こうした「導入」（貫入方向に限った移動）の制限は、「ニ」の持つ「移動の着点」用法に起因す

²⁷ 手間を省くために語尾が「には」になるものを除外してある。

²⁸ 同様に語尾の「には」を除外。加えて「いたるところ」を除外。

るものだろう。「ニ」でマークされた場面(scene)に、それまで存在しなかった事物が現れることが、「ところに」の使用条件である。興味深いのは、空間を表す「ニ」ならば視点を起点・着点のどちらに置いても問題は無かったが、状況を表す「ところに」の場合、「着点」のみに限定される傾向があるということである。

(120) a. 私は明日学校に {行く／来る}。

b. しばらくサロンで憩おうかと歩きかけたところに、エジプトから同船した商社の桜井という男が {きた／?行った}。

正確な原因は定かではないが、「Vたところ」の時点で特定の動作主が既に現れており、その動作主の視点が、後に現れる動詞の方向性に影響をあたえることが関係していると思われる。

5.3.6.3. 「ところへ」の用法

田中の分析でも現れた通り、「へ」は基本的には「ニ」との取り替えが可能であり、意味もほぼ「ニ」と同じであるし、移動動詞、特に「来る」などと現れる点も共通している。ここで興味深いのは、「へ」の本来の働きでは「目標点」であり、「ニ」の表す「着点」とは意味が分化していたのだが(102)など参照)、「状況」を表す用法の場合、「行く」ではなく「ところに」と同じく「来る」との結びつきを強める。つまり、視点はその場面、「着点」に固定されるということである。「場所」用法では「来る」「行く」はどちらも現れるが、「状況」の場合には必ず「来る」方向性のみになる。

(121) 「ところへ」の空間意味、状況意味の現れ方の差

- a. 花子は幼いころ、郷里の宇都野神社で、鼻緒を切らして泣いているところへ現れた加藤のことをふと思い出した。(状況)
- b. 吾一は学校から帰ったばかりだった。はかまをぬいでいるところへ、おとつあんがひょっこり帰ってきた。(状況)
- c. しかし彼はいちばん群衆のむらがるところへ、わざわざ歩いていった。(場所)
- d. 「射て！」とどなって、その音のするところへぶっ放した。(場所)

(121)の「視点の制限」は「ところに」と「ところへ」が共通する特性であるが、実際の用例を調べると、2つの点において「ところに」とは異なる部分もあった。1点目は、「導入を表す動詞」との結びつきが「ニ」ほど強くなく、他の動詞の共起も許すという部分である。

- (122) a. それを省吾の手に持たしているところへ、急に窓の外の方で上草履の音が
起こる。
- b. 七月、成績が下がっていたところへ、腹膜炎に罹り、進級試験が受けられず、原級に
 留まる。
- c. さわれば泣きそうな風でいたところへ、お母さんから少しきつく叱られたから、とめ
 どなくないたのでしょう。

(122)の例は、程度の差はあるが、(118)(119)のように直接的に何かを導入することを表すものではない。これらの動詞を取り得る理由は、「へ」自体が「方向性」の意味を強く持ち、場面(Scene)への着点が含意されるため、移動性の乏しい動詞でも、「ニ」の時と同様に「導入」(事態の貫入)が含意されるためではないだろうか。また、もう1つの「へ」と「ニ」の相違点として、時間的な意味を表しうる用例の比率の差がある。上述のように、「(る/た) ところに」の場合、全事例の中で考察対象となった時間的な意味と捉えられる用例は 27/402 件=6.7%だったのに対し、「(る/た) ところへ」の場合は、97/189 件=51%にもものぼる。つまり、単純に考えれば「ところに」に比べて、「ところへ」は時間的・状況的な意味を取りやすい形式になっていると言える。ただし、これについては、検索対象である「新潮文庫 100 冊」が既に古い文体の書き言葉であることなど、もう1段階の精査が求められる。

5.3.6.4. 「ところで」の用法 - 「ヲ」「ニ」との区別-

ここまで大きく「ところを」と「ところに」の用法をまとめたが、「ところで」はこれらとは明確な区別が困難な形式である。たとえば 5.3.1. 節で取り上げた日本語テキストの例文は、全てが(自然さに差はあるものの)「デ」に置き換えることが可能だろう。(90)の練習問題も「コウさんはいつも私がお飯を食べようとしているところ () 来るんです」は、「ニ」でも「デ」でも正解になるだろう(テキストの解答は「ニ」である)。このように「デ」が「ヲ」「ニ(へ)」と領域を共有しているために、なかなか明確な指針を示すことが出来ない。確認すると、助詞「デ」の持つ操作子機能は<x を対象限定せよ>であるが、<領域限定(xにて)>の場合には、「限定領域内での<動作>あるいは<事柄>が予期される」のであった。つまり、状況用法の「ところで」に必要な要素は「領域として取り得る時間」と、「事態の発生」の2つであり、「状況」を描写する場合、これら最初から前提とされていることなのだ。また、「ところで」の持つ意味で興味深い点として、田中が(107c)や(109c)であげた「途中経過」や「中断」の含意がある。

- (107) c. 3時になった {ところで/時に}、お茶にした。

(109) c. 彼女が掃除をしているところで、彼は {?出ていった/?やってきた}。(再掲)

(107c)では「『ところで』によって<動作の途中経過>が場所化され、その場で別の動作が起こる」とあり、何かを一旦やめて、お茶にしたような含意が読み取れる。また、(109c)は「ところで」があまりふさわしくない事例であり、「領域限定された場の中での生起が意味されるため、内外への移動動詞との相性が良くない」と説明されている。しかし、これは内外への移動動詞に限らず、「テイル」という形が「ところで」との整合性に欠けることを表しているように見える。

(123) 彼女が掃除しているところで、彼は {#ご飯を食べた/#ゲームをする}。

「テイル」の場合にはどうしても「場所」読みが強くなってしまい、「彼女が掃除しているその時点で」という意味には読み取りにくい。このような「ところで」の状況意味の制限については、時間を表す際の「デ」の制限が手がかりになるのではないだろうか。

(124) a. 6時で、暴動が {*始まった/収まった}。

b. 家を出た後 {に/で} 財布を忘れたことに気付いた。

c. 家を出る前 {に/*で} 電車の時刻を確かめた。 (伊藤 2008: 3)

d. ここ {に/で} 車を止めよう (神尾 1980: 57)

時間(時点)を示すために使われる「デ」は、(124a)で示されるように「開始」を表すことが出来ず、「終了」のみに用いることが出来る。同様に、(124b.c)の比較で分かるように、「何らかの経過を経た定点」でなければ使えない。また、(124d)のように、選択幅があり、継続可能性があるような場合に、恣意的にその時点(地点)を選択する含意を持つ場合もある。この「経過」を持つ前後幅の存在が、「デ」と「ニ」を分ける。5.3.1節(89)枠内で取り上げた説明には「『ところで』の前には動詞の『～た』の形が来て、後ろに続く文では、事態の変化や動作を表す表現(開始する、終わる、出てくる、など)が来やすくなります」とあり、「Vところで」の「V」は完了の形を取ることが多い。これらは全て「何らかの経過の一区切り」である。これより、「ところで」によってマークされる「領域限定」は、(一般には完了で示されることの多い)「何らかの経過の区切り」に限定されると考えて良いだろう。

(125) a. それから暫くして幾らか機嫌が直ったところで、彼は又こんな事を思った。

b. 引率教官は生徒一同に「海ゆかば」の歌をピアノシモで合唱させ、歌い終わったとこ

ろで「解散」を命じ、教官は率先して折から満潮の河に身を投げた。

ただし、必ずしも夕形（完了）に限られるものではなく、数は少ないが、それ以外にも「ところで」と共起する例は存在する。どの用例でも「その時点の前に領域の選択幅が存在する」含意は維持されているとは思うが、この辺りの「ところで」の意味については検討すべき部分は多い。

- (126) a. 彼女がパンティ・ストッキングをくるくると丸めるように脱いでいるところで曲はレイ・チャールズの『ジョージア・オン・マイ・マインド』にかわった。
b. 加藤はそれに手を出した。手が届こうとするところで、五色力餅は一つずつ消えていった。

「デ」が表す「時間の区切り」は、結局<動作の発生>によって後付け的に付加することが可能であるため、「デ」の使用条件は、より状況に依存するものになっているようである。以下の例は不自然に見えた(109c)に状況を付与したもので、何らかの経過を含意させることで自然に見えるようになっているのである。

- (109c') 「結局、彼はパーティーに間に合ったの？」
「全部終わって彼女が掃除をしているところで、やっと彼がやってきたんだ」

5.3.7. 「トコロ＋助詞」のまとめ

5.3.7.1. 「トコロ」＋「ヲ・ニ・デ・ヘ」のまとめ

改めて、各々の助詞の機能によって導かれる、それぞれの用法を確認する。

- (127) 「Vところを」の用法

「ヲ」は状況を動作の対象として取り立て、Vをその対象とするために、後続する動詞は<観察・視認>意味か<干渉・阻害>意味を持つ動詞に限定される。後者の場合、動作Vへの強い働きかけが含意される。

- (88)④家を出るところを母に呼び止められた。

- (128) 「Vところに」の用法

「ニ」は動作Vを対象として指定し、その時点を動作の<着点>とするため、視点はVの動作主になり、後続する動詞は<導入>（貫入方向への移動）意味を持つ動詞に限定される。

(88)①日曜日のお楽しみ番組が始まったところに電話がかかってきた。

(129) 「Vところへ」の用法

基本的には「ところに」と同様である。空間を表す際の「ところへ」と異なり、状況を表す場合には「ところに」と同様<導入>（貫入方向への移動）に限定される傾向にある。

(88)③ご飯を食べているところへ友達が訪ねてきた。

(130) 「Vところで」の用法

「デ」は事態発生の状況的領域を限定するだけなので、時点を表す用法では幅広く用いることが可能になる（「ところに」と置き換え可能）。ただし、Vには「区切りを表す意味」が要請されるため、「テイル」形などとは共起しにくい。<干渉・阻害>意味によって動作Vを「区切らせる」ことによって「ところを」と置き換えられることもあるが、働きかけが強い場合（逆接意味など）には「ところを」が優先される。

(88)②いい夢をみていたのに、ごちそうを食べるところで目が覚めてしまった。

本節では「助詞の意味」からトップダウンの手がかりと実際の用例をすり合わせることで、それぞれの助詞に与えられる制限などの論拠を探った。主に取り扱った「操作子機能」の考え方や、「助詞のスキーマ」といった論法には残された課題もあり、もとより更に大きなスコープで事態全体を捉える方法もあるだろう。今後は「状況意味」と「場所意味」の差をどのように設定していくかなど、中核的な意味の精緻化が必要になる。

5.3.7.2. 「トコロ」の時間意味と残された課題

5.1. 節で取り上げた「アタリ」に比べ、「トコロ」が「トコロ+助詞」の形で表す時間的な意味は多様性があり、様々な助詞と複合することで、独自の広がりを見せている。こうして、空間表現で用いられる形式名詞「トコロ」と同等に時間における「トコロ」の用途が多いことは、「トコロ」が「アタリ」とは異なり特定の時点を指し示す指示の意味合いが強いことが理由としてあげられるだろう。同時に拡散的に広がりを見せる「アタリ」の場合には複数の「時点」を均質に捉える必要があり、相関性、差分を重要視する時間ドメインにおいてはその用法が大きく制限されることになった。翻って「トコロ」の場合には、「茫洋とした周辺地点を指す」という用法は類似しているが（「木の根元のあたり」「木の根もとのところ」）、あくまでも1つの地点・時点を焦点として持っており、時間ドメインにおいても無理なくその意味を保持することが可能になる。そのことは、寺村

(1984) の分析からも裏づけられるだろう。

- (106) トコロの中心的意味は、ある全体を視野に入れながら、その一部分にスポットライトを当てるときのそのスポットライトの当たる部分、というように捉えるのが正しいと思われる。その全体と部分は、空間的な広がりでも、時間的な広がりでも、またもつと漠然とした状況でも良い。(寺村 1984: 290) (再掲)

こうして「トコロ」が特定の「時点」を焦点化する働きを持ったことに加え、更に様々な助詞が影響し、「トコロ+助詞」の意味が確定していくことになる。本節では特に「助詞との接続」という言葉を用いたが、これにより名詞が副詞的働きを持ち、場面の叙述に用いられるようになることについては、次章で更に詳しく掘りさげていくこととする。

なお、形式名詞「トコロ」については、今回取り扱った以外にも様々な広がりを見せ、空間・時間といった軀から離れて分析を行う必要もある。以下に、今回現れたいくつかの課題を列挙しておく。

(131) 「直前でのキャンセル」を意味する「ところ」

- a. この堪え難い侮辱に対して、私は当然、血相を変えてこう怒鳴りつけるところでした。
- b. やれやれ、もう少しで遅れるところでしたよ。

(132) 諦め・不相応を表す「ところで」や「にしたところで」

- a. 「地図を手にしたところで、あなたは永遠にこの街を出ることはできないのよ」
- b. だが、その誰かが、よしんばヴァルノにしたところで、大枚六百フランと聞いちゃ、ちょいとしりごみするに違いない。

(133) 接続詞の「ところで」や「ところが」

(134) 無助詞の「ところ」

電話で問い合わせたところ、まだ間に合うらしいです。

また、「トコロ」以外の名詞についての時空間のとらえ方についても、助詞との関係性については今回取り扱えなかったが歴史的な研究も踏まえて、時間・空間の視点からまとめる必要もあるだろうことも付記しておく。

5.4. まとめ

以上、本章では、空間的な名詞が持つ時間意味への拡張方向をいくつかの実例から観察した。5.1. 節においては「アタリ」が持つ空間意味の性質から、時間意味にかかる制約を確認し、時間的な広がりを持ちうる語の制限を示した。5.2. 節では「アイダ」と「ウチ」という2つの語を取り上げ、特に「アイダ」における空間からの広がりを探り、そして「アイダニ」という形についての空間独自の広がり、副詞的意味の記述を行った。これにより、空間名詞が時間意味を持ち、用法の広がる図式を確認し、どのような要因が時間的性質に合致するかを示した。5.3. 節ではより明示的に空間名詞であるとされてきた「トコロ」を取り上げ、それが時間意味を示しうる場合に、助詞との接合によってどのように変化するかを、実例を参照することにより確認した。そしてそこから、「トコロ」という名詞が副詞的意味に広がる際に、何を基点としてその意味を広げていったのかを示した。

以上の3例から、名詞カテゴリにおける「時間意味」がどのように表れ、それが動的・プロセス的な意味を持つ用法へと発展していくかが確認された。この展開は、空間的・物質的な名詞という存在が、いかにして時間的・事態的叙述に関わる存在へと変化するかを示した過程であると見ることができよう。次章においては、このような変化の更に先の展望として、名詞カテゴリと副詞の関係性に焦点を当てていくこととする。

第6章 副詞的要素に表れる時空間認知

この章では、品詞論においては大きく副詞と呼称される要素について、いくつかの視点から別々に時間的要素を切り出していく。「品詞のゴミ箱」と言われることすらある副詞的カテゴリにおいて、他の品詞との差異を厳格に識別し、特定することは困難であり、必定、この章で扱われる語群はその他のカテゴリとの境界的なものを多分に含むことになる。これらの語群において、どのように時間的要素が立ち現れ、どのようにして「副詞的」たらしめているのかを精査することにより、品詞における時間要素の扱い方、それぞれの品詞の特性を改めて検討する階となる。

本章 5.1. 節では、副詞と呼ばれる品詞がどのように認定されているのか、総論的性格の強い仁田 (2002) を参照して簡便にまとめる。副詞の取り持つ言語事態がどのようなものであり、そこに時間が深く関わるのはどんな場合かを抜き出すことで、後に続く論の焦点を絞ることとする。5.2. 節では、そうして選出した副詞群において、名詞的性格の強い語群を取り扱う。具体的には、英語の副詞的要素との比較を行った小沢 (1991) を参照し、日英の副詞の振る舞いを比較し、日本語における副詞と名詞の関係性をとりまとめる。5.3. 節では、更に日本語の副詞群に絞り込み、定延 (2002) で取り上げられた「空間的分布を表す時間語彙」と呼ばれる現象を取り上げる。この中では、名詞的性格の強かった語群も含め、時間語彙が空間語彙との関係性を密にした現象について言及し、空間語彙だと思われていた語群が時間的要素を持つに至る動機に言及し、最終的には副詞と名詞のオーバーラップについてとりまとめることとする。

6.1. 品詞論における副詞的カテゴリ

6.1.1. 副詞分析への導入

本章では、副詞と呼ばれるカテゴリについて分析を行うことになるが、改めて、ここで何故副詞的カテゴリの分析が必要であるかを確認する。例として、5.2. 節でとりあげた「アイダ」という語の場合、空間表現と時間表現に以下のような差が表れる。

- (136) a. 私が仕事をしている {あいだ／あいだに} 寝ているなんて。
b. 私とあなたの {*あいだ／あいだに} 壁がある。

(136)で分かる通りに、空間用法における「アイダ」の場合、副詞的に用いようとしたときに助詞

「ニ」を伴わない用法が存在しておらず、時間要素を示す時にのみ、取捨選択が可能である。当然助詞の有る無しで意味も変わり、動詞の様態にも影響を与える。具体的には、「アイダ」の場合、「寝ている」状態は「私が仕事をしている」期間はずっと続いていることが含意されており、「アイダニ」では、あくまで「眠りに入る」という瞬間的な動作が行われたのが「私が仕事をしている」期間内であることが示されている。こうした、時間を表す語彙が「ニ」と共起するかどうかの差については中村 (2001)で検討されており。具体的には以下のような分類になるのだった。

- (84) a. 「3時に」等の暦的（絶対的、calendrical）表現は助詞のニと共起する。
b. 「きょう」等の直示（相対的、deictic）表現はニと共起しない。
c. 「夜」等の表現はニと共起する場合と共起しない場合がある。

(中村 2001: 158) (再掲)

こうした現象を分け隔てる要因の1つとして、各語彙（きょう、夜など）の持つ副詞性と名詞性の違いが関与しているとされた。つまり、「きょう」「あさって」等の直示は副詞であるため格助詞と共起しないが、「3時」「3日」等の表現は名詞なので格助詞と共起する。しかし、すべての語彙が副詞か名詞かに一義的に決定されるわけではなく、「夜」「朝」「夕方」等のような語彙は、副詞性と名詞性を両方持つことになる。そのため、副詞との共起の状態には揺れがあるとされる。このように、「名詞である」「副詞である」という判断が、個々の語彙に与える時間性に大きく影響を与えている。そもそもこれは当たり前のことであり、認知言語学的前提に基づけば、品詞の分類というものは事態の時間的な要素から始まっていると言っても過言ではなく、品詞間の関係を吟味し、境界的な領域を取り扱うことで、各々の品詞に関わる時間要素に焦点を当てることが可能になる。

6.1.2. 副詞カテゴリの定義

6.1.2.1. 修飾語としての副詞

副詞の基本的性格については、益岡・田窪 (1992) で簡便にまとめられているので、これを引用する。

(137)

- 1, 副詞とは、述語の修飾語として働くのを原則とする語をいう。主な種類として、「様態の副詞」、「程度の副詞」、「量の副詞」、「テンス・アスペクトの副詞」、等がある。
- 2, 文全体に対して修飾語として働く語も、副詞の一種とみなし、「文修飾副詞」と呼ぶ。文修飾副詞には主として、「陳述の副詞」、「評価の副詞」、「発言の副詞」、などがある。

(ibid.: 41)

また、これとは別カテゴリとして、「名詞」の項目にも「副詞相当句」という言葉が用いられており、これを作る名詞として以下のような例が出されている。

(138) 益岡・田窪 (1992) における「副詞相当句を作る名詞」

時：時 (に)、おり (に)、あいだ (に)、うち (に)、後 (で／に) ……

原因・理由：ため (に)、おかげ (で)、せい (で) ……

様態：とおり (に)、よう (に)、かわり (に) …… (ibid.: 36)

更に、品詞の種別とは別に「述語の修飾語」という項目を立て、この中では以下のようなものを取り上げている。

(139) 益岡・田窪 (1992) における「述語の修飾語」

a. 形容詞の連用形 鈴木さんはその申し出を簡単に断った。

b. 動詞のテ形 花子は急いで食事の用意をした。

c. デ格 太郎は大声で助けを求めた。

d. 数量名詞 子供が3人遊んでいる。 (ibid.: 95 下線は筆者)

こうして(138)(139)などで取り上げられた事例は、構造的に他の品詞カテゴリに属するとみなされているものがほとんどであるが、「述語を修飾する」という副詞に定められた機能を有しており、それ全体が副詞的機能を果たす (つまり、副詞相当句、もしくは副詞句)。こうしたいくつかのカテゴリについて、その他のカテゴリに含まれるからといって分析対象からはずしてしまうことはできないだろう。

6.1.2.2. 「副詞的表現」の枠組み

上記のように、古来よりの日本語学における副詞の規定はあくまで述語修飾との関連性で定められたものである。他の品詞カテゴリは形式からそれと定められているため、尺度が異なる場合もあり、混乱を引き起こす元となっていた。これについて、あくまで「修飾成分」としての副詞要素を包括的にカテゴリライズし、一元的に分類しようと試みたのが、仁田 (2002) である。この中で仁田は、以下のように述べている。

副詞は、かつて単語のごみ箱的存在であった。そのこともあって、従来、副詞的修飾成分への文法的研究は、組織化と体系化に欠けるところが少なくなかった。現在にあっても、いくつかの優れた研究は存しはするものの、全体として、副詞的修飾成分への分析・記述は、述語成分などに対する研究に比べて、かなり立ち遅れているといえよう。(仁田 2002: 1)

このような「立ち遅れ」の原因としては、副詞カテゴリの統語的な機能が形態的な異なりに表れないこと、つまり外見的な異なりからの分類、記述が困難であることをあげている。どうしても個別の語彙研究に陥りがちなこの領域の分析のためには、形式の枠を超えた体系的分析・記述が必要であるという問題意識を明示している。この問題を解決するため、仁田は命題(言表事態)の内部で働く副詞的修飾成分を様々に下位分類し、それらの関係性からリスト化、記述することを試みている。ここで述べられた「成分」という言葉は、具体的な動詞文を確認し、そこに現れる文の成分(構成要素)の事態的意味に重点を置いたものとなっている。具体的な分類には述語成分・共演成分・状況成分・命題内修飾成分・モダリティ修飾成分・接続成分・独立成分・規定成分・並列成分などがあげられている。本論では全ての成分を取り上げることはないが、最も関連の深い「状況成分」の例のみを確認しておく。

状況成分とは、述語成分や共演成分、さらに命題内修飾成分によって形作られた事態の成り立つ時や所や原因といった、事態成立の外的背景や状況を表した成分であるとする。

(140) 1910年10月30日、美しい湖にのぞんだハイデンでアンリー・デュナンは、82歳の生涯を閉じた。(ibid.: 24)

(140)の下線部が状況成分であり、各々<時の状況成分>と<所の状況成分>と定められている。「時の状況成分」は事態の生起時を表すものである。こうした成分を持つものは、形式的に様々な形を取りうるが、代表的なところでは文としても立ち現れるという例が示されている。

(141) 或日の事でございます。お釈迦様は極楽の蓮池のふちを、独りでぶらぶら御歩きになつてゐらっしゃいました。(芥川龍之介「蜘蛛の糸」) (ibid.: 26)

(141)の場合、下線部が時の状況成分を表したものである。<所の状況成分>は同様にして事態が生起する場所を表すもので、多くは助詞を伴った形で現れる。

(142) a. モスクワの別荘で、おいらはよく旦那と話しした。

b. 首のまわりを蛇が飛んでいた。 (ibid.: 27, 28)

この2つの「状況成分」について、仁田は以下のように興味深い補記を付している。

所の状況成分が密接に関与するのも、時の状況成分と同様に、動的事態であった。運動とでも呼べばよいような、具体的な動きは、その現れに空間を必要とし、それが存在する空間を抜いては考えられないが、動きが抽象化していくと、ところの状況成分の必要度が減じていく。

(ibid.: 28)

この言明から分かる通りに、「状況成分」の示す内容は、動詞文を中心として、何らかの動的事態（プロセス関係）を示す文の時・所の所在を示すものとして機能するものである。また、旧来の品詞論で認められた形式的な枠を飛び越え、意味的な区分けを基準に、同様の目的を持った表現を大きく「副詞的表現」としてまとめ上げているものである。このような視点に立ったとき、副詞というカテゴリは名詞カテゴリとのつながりをより密にすることになる。次節以降、主に時間に関わる議論を踏まえつつ、この2つのカテゴリの境界性についての検討を行っていく。

6.2.副詞的名詞句

上記のように、副詞と見られるカテゴリの中には様々な品詞が入り交じり、「修飾成分」という枠内で多様な分類、基盤付けが可能であるが、中でも副詞との接点が考察に値する品詞群としては、これまで4章、5章でも再三触れてきた名詞ということになるだろう。名詞の概念原型は「物質的・空間的」なものであったが、そこに時間性が介在することにより、動的な意味が付加されて副詞として「述語（主に動詞文）の修飾成分」として機能することが可能になる。本節では、そんな副詞と名詞の間にどのようなつながりがあるのかを、日英の修飾成分を比較した小沢 (1991) をベースに検討したい。

6.2.1.副詞的名詞句の分類考

仁田 (2002) は副詞類を5つの分野に分けて検討しているが、その中でも本論で主に取り上げるカテゴリは「時間関係の副詞」と呼ばれるものである²⁹。この時間関係の副詞群は、それ単体では「名詞である」と言えるものがほとんどである。ここでいう名詞とは、基本的性質としてLangackerの提唱した概念原型を満たすというカテゴリ以外にも、いわゆる日本語学的な形態論でのカテゴライズを念頭に置いたものである。多少の幅は出来てしまうが、ひとまず、以下の引用を参照された

²⁹ その他の分類は「結果の副詞」「様態の副詞」「程度量の副詞」「頻度の副詞」。

い。

- (143) 名詞、動詞、形容詞のような主要な品詞は、文中で果たす役割が1つではなく、いくつかの機能をにないうる。主要な品詞に属する単語は多機能であることから、どれが一次的な機能であるかによって、それらの品詞性は相対的に位置づけられるものである。名詞は主語・補語になることを、動詞は述語になることを、形容詞は既定成分になること（ある種の形容詞は述語になること）を主たる役割とする。副詞は主要な品詞の1つであるが、もっぱら動詞・形容詞を修飾限定する成分として機能するもので、語形変化しない。しかし、副詞には多くの例外がみられる。（村木 2012: 52）

副詞の存在はこの規定においても非常にあやふやで、以下のような名詞群は2つの状態を取り得る、微妙な立ち位置にある。これが、「時間を表す名詞」の独特の振る舞いである。

- (144) a. 明日一緒に食事に行こう。（副詞的／直示的）
b. 学会があるのは明日だ。（名詞的／直示的）
c. 9月27日に、新しい法律が施行される。（副詞的／絶対的）
d. 9月27日がデッドラインなんだよ……。 （名詞的／絶対的）
e. 30分走り続けてへとへとになった。（副詞的／時間量）
f. 化粧するだけなのに30分は長すぎるだろう。（名詞的／時間量）
g. 彼はいつもああやって犬を連れて散歩している。（副詞的／頻度）
h. おかしいな、いつもは散歩をしてる時間なんだけど。（名詞的?／頻度）

こうして「副詞と名詞の境界」に位置していることが、時間関係の名詞の特徴といえる。このような特徴が時間語彙に特徴的なものであるという傍証として、こうした語についての分類研究を網羅的に行った小沢（1991）を見てみたい。当該論文では、伝統文法で「副詞的対格(adverbial accusative)」と呼ばれる語句について、それまで言われてきた「名詞句の副詞的用法は、とくに時間・場所・距離・様態を表す名詞によく見られる」という論を確認するため、網羅的に分類・分析したものである。小沢はこれらの現象を中立的な「副詞的名詞句(Adverbial NP)」と呼称しており、具体的には以下のようなものがあげられている。

- (145) a. I'll back *next week*. （来週戻ってくるよ）
b. He talked *a great deal*. （彼は大いにしゃべった）

c. Come *this way*, please. (こちらへお越し下さい)

d. They always travel *second class*. (彼らはいつも二等で旅行する)

(小澤 1991: 135 (和訳は筆者))

それぞれ、(145a)はTime (時間) を表す例、以下、Measure (量)、Direction (方向)、Manner (方法) などが副詞的に表されているものである。日本語と1対1対応で副詞的に表示するのは難しいが、やはり、動詞を修飾する際に、名詞句が前置詞無しでそのまま接続しており、まるでそれ全体が副詞であるかのように振る舞っている。

6.2.1.1. Time (時間)

この現象については「時間を表すものが多い」として、様々なタイプの実例を取り上げている。まずは「時点」を表すもの。日本語の副詞分類(仁田(2002)に依る)では「時の状況成分」に分類されるものである。

(146) a. John arrived [that moment/minute/hour/day/week/month/year].

b. John stayed in New York {*(during) that period of his life/*(before) that interval}.

c. Would you like to stay with us {a day or so? / a few days?}

様々な名詞が副詞的意味を取りうるが、(146b)の *period* や *interval* といった名詞の場合、前置詞は義務的となる。前置詞との関係については、基本的に前置詞を伴わないものが「副詞的名詞句」となるわけだが、前置詞の有る無しは随意的なものであり、一般には前置詞を伴わない方がくだけた意味合いになるとする。また、以下にみられるように前置詞の有る無しで意味が違う場合もある。Quirk et al. (1985) によれば、このような場合に省略出来る前置詞は *at*, *on*, *in* に限られ、*before* や *since* などは義務的であり、前者が無標、後者が有標の前置詞とされる。

(147) a. I saw her { \emptyset /*on} last Thursday. (前置詞を伴うものが非文となる)

b. I'll see you on Monday. = I'll see you Monday. (前置詞が随意的である)

c. I'll see you before Monday. \neq I'll see you Monday. (Quirk et al. 1985)

また、(146c)にあるように、未来を表す場合には数量詞を伴う。こうした未来の用法には以下のような事例もある。(148a)は「来月中ずっと」の意味と「来月のうち何日か」の意味のどちらとも解釈出来るが、(148b)は前者の意味しかない。

(148) a. He'll be staying here next month. [ambiguous]

b. He'll be staying here for the next month. [unambiguous]

ここで表れている next month は、意味的に「時の状況成分」類（事態の発生する時点を表す）と「時間関係の副詞」類(時間の幅や様態を表す)の境界が曖昧である。これは未来形に限ったことではなく、英語の場合、副詞的名詞句が時制によって意味を変えることがある。以下の事例では、過去時制と現在完了形では時点をさす用法（時の状況成分）であるが、現在完了進行形では時間の幅をさす用法（時関係の副詞）になっている。

(149) a. I (have) visited my mother this morning. (time position)

b. I have been visiting my mother this morning. (time span)

以下に、残った「Time (時間)」の区分に含まれる事例をいくつか挙げておく。(150a-c)はduration (継続)を表し、(d-f)は Frequency (頻度)表す用法である。それぞれ「時間関係の副詞」、「頻度の副詞」に対応するだろう。

(150) a. You've been away a long time.

b. We stayed at that hotel three weeks.

c. I thought a minute.

d. I shall be in my office every other day.

e. Each summer I spend my vacation in Bermuda.

f. I visit England three times a year.

6.2.1.2. Location (場所)

場所を表す副詞的名詞句については、Larson (1985) から事例を引用するが、その中身は実質「place」を伴うものばかりであり、他の語を持つものはほとんど存在しないと、小澤は指摘する。

(151) a. You have lived [someplace warm and sunny].

[few places that I cared for].

[every place that Max has lived].

[here/ there].

- b. You have lived {*(on) 43rd St. / *(in) Germany}.
- c. You have lived *(at) some {location / adress / area} near here.

これらの事例では、(151a)のようにplaceを持つもの（とhere,thereなどの直示表現）は典型的な副詞的名詞句となりうるが、(151b, c)のように、他の場所を表す名詞の場合、前置詞無しで用いることは出来ない。これを論拠に、場所を表す副詞的名詞句は、placeのみに存在する例外的なものであると判断している。

6.2.1.3. Direction(方向)

こちらに属する例も、direciton, wayなどの基本語がほとんどである。

- (152) We were headed [on {that course/this bearing/some path}].
[that direction].
[*some path / *that course].

6.2.1.4.その他 Manner（方法） Distance（距離） Extent/Measure（量）

Manner の具体的用法で見られる例は実質的にwayの一語だけである。その他、Disntance の実例が(154)、Extent/Measure（量）の実例は(155)となる。

- (153) You pronounced my name [in {this fashion/the prescribed manner/that way}].
[that way / every way one could imagine].
[*this fashion / *the prescribed manner].

- (154) a. They ran two miles in ten minutes.
b. We climbed a further thousand feet before dusk.

- (155) a. He ran a mile.
b. It cost ten dollars.

ただし、Extent/Measure の事例については、副詞句なのか直接目的語なのかはっきりしないものが多い、と扱いを保留している。

6.2.1.5. 副詞的名詞句の示す特徴の分析

ここまでのリストアップを経て、小沢の分析は大きく3つの要点にまとめられる。

(156) (以下は、小沢 (1991) の結論部分を一部改編したものである)

①副詞的名詞句に使われる名詞の種類は実際には限られており、時間を表すタイプが圧倒的に多い。場所を表すものでは直示語の here, there を除けば限定された place のみであり、方向を表すものは way と direction だけ、距離は distance, 様態はほぼ way のみに限られているのである。時間以外では全て一般名詞 (代表的名詞) のみだという点が注目される。

② this や every などの直示語や数量詞のついた副詞的名詞句全体として見ると「方向性 (Directionality)」という特徴を観察できる。直示語は、それ自体に方向性が含まれるので (eg. tomorrow : 現在時→未来時) 単独で副詞としても使われる。この特徴は時間に典型的に見られるので時間を表すタイプが多いことも予測される。方向を表す direction と様態を表す way は総称的な名詞であり、他の名詞をそもそも必要としない。manner より way の方が使われるのは、後者の方が方向性の概念が強いからである。

③前置詞の有無にもいくつかの要因が関与している。随意的な削除を受ける場合、一つには informal かどうかの違いがある。(中略) 義務的に削除を受ける場合は、直示語などの持つ方向性の概念が強すぎるので前置詞が不要になると考えられる。義務的に前置詞を必要とする場合は、その前置詞が有標、つまり省略すると文意が不明確になるからという理由が最も重要だと思われる。(小沢 1991: 162-163)

①が最も重要な主張であり、英語において「副詞的名詞句」を構成する語としては、時間関係の語が圧倒的に多く、他のパターンについては「むしろ例外的なものである」という。②はこうした「副詞的名詞句」を構成する語の制限についての分析である。方向性(Directionality)という言葉については、残念ながらあまり具体的な考察は無く、実際に並べられた語句を見てイメージするしかない。確かに way や direction などはイメージに一貫性があるというのは納得出来る部分がある (なお、あくまで「方向性」は必要条件であって、他の要因の考察も当然必要であることは示唆されている)。③は、こうした意味的な問題が、文法的な問題である前置詞の有無とどのように繋がっているのか、という部分の考察である。「前置詞を義務的に省略する場合((147a)など)は「方向性」の概念が強すぎるためと思われる」という検討が必要な分析もある。また、「場所を表すタイプが殆どないのは「方向性」と「場所性」の概念が衝突するためだと思われる」という説明もあり、この部分も一考を要する。

6.2.2. 日本語の「副詞的名詞」との比較

品詞の概念は言語間を跨いでそのまま通用するわけではないので、以上の小沢の研究を単純に日本語の名詞 - 副詞間の関係に対応させるわけにはいかないのだろうが、それでも、両言語にまたがるなんらかの共通性は確認できるのではないだろうか。以下では、小沢の研究結果から得られた(156)の3項目を日本語の副詞的修飾成分と比較・対照することでその共通性を探る。

6.2.2.1. 副詞的名詞句として使用出来る語の制限

以下の表は、仁田 (2002) の巻末索引の「かきくけこ」の部分である³⁰。

表3 仁田 (2002) の巻末索引抜粋

<p>カーンと・かすかに・がたがたと・固く・堅く・カチッカチッと・ガチャンと・かちんかちん・かちんかちんに・がっしりと・かつて・かなり・かなりの・かねがね・かねて・がぶがぶ・からからと・ガラガラと・からからに・ガラッと・ガラリと・からんころんからんころん・がりがりに・軽く・かろうじて・軽やかに・乾いた声で・ガンガン・ガンガンと・頑強に・完全に・簡単に・簡単には・期間+デ・きちんと・きつく・きっぱり・きびしく・きゃっきやつと・キューツと・急に・ぎゅつと・今日・強硬に・器用に・今日は・極端に・極度に・去年は・きらきら・ギラギラ・きれいに・極めて・近年・銀灰色に・グイと・偶然・ぐさりと・口々に・くつきりと・ぐつぐつ・くつくつと・グッスリ・グツと・ぐでんぐでんに・くどくどと・くねくね・～クライ (二)・ぐるぐる・黒く・詳しく・怪訝な気持ちで・けさは・けたたましく・結構・～ゲニ・ゲラゲラ・ケロリと・元気に・現在・現在は・嚴重に・五、六度は・故意に・強引に・轟々と・五回・黄金色に・濃く・ごく・刻一刻と・刻々と・穀潰しの豚みてえに・克明に・ごくりと・午前九時十分・午前八時三十分に・ごそごそ・こそこそと・木っ端微塵に・コテンパンに・今年は・子供たちと大して変わらない姿で・ことん、と・粉々に・この間・このあと・この頃・この時・このところ・この夏・この日・この前・好んで・小走りに・細かく・小指ほどの大きさに・ゴロゴロと・コロリと・こわごわ・今後・こんどの日曜日に・今晚・今夜</p>

表の中で、名詞単体であると判断できるものは枠を施した。こうしてみると、日本語の中でも時

³⁰ ある程度の量を得るために索引を参照したが、「あいうえお」から取り上げなかったのは、索引に「N」を含むものが多く、不確実性が増してしまったためである。

間を表す名詞が単体で副詞的成分となりやすいことは確認できる。英語の場合と同じように、日、年、季節など、様々な名詞を用いることが出来るし、(たまたまだが)「この」を伴う例が多いおかげで直示表現との関係性も密接に見える。また、その全てが時の状況成分 (Time position) の事例である。唯一例外的なのは「偶然」であるが、これは仁田 (2002) では「主体状態の副詞」に分類されているものの、「もはや主体の状態・態度のありようというよりは、必然・偶然性からした事態の出現・存在のあり方を表しているものである」とし、「主体状態の副詞」では例外的な扱いがなされている。また、「何かノ拍子ニ」という他の副詞成分との並列性にも言及され、変則的な時点表現と解釈することも出来るだろう。なお、英語の場合に見られた Manner の副詞句との並行性に触れておくと、リスト中太字の「乾いた声で」や「怪訝な気持ちで」「子供たちと大して変わらない姿で」というように、「名詞+助詞 (デ格)」の形で方法が表示される用法が観察出来るが、名詞単体での副詞成分とは言い難い。この他、リスト外の索引部分で「名詞のみの形式」を調べると、「全部」「全員」「大部分」「多少」といった量(Measure)の副詞がいくつか確認出来るが、実際の用法では「全部が」「全部を」となるので、やはり英語の事例同様に目的語などの文法要素との差別化が難しい。また、英語での分析同様、場所を表すものというものは1つも存在していない。

6.2.2.2. 副詞的名詞句を形成する条件

場所を表す place など、副詞的要素を構成する「場所」表現が存在した英語と比較すると、日本語ではより時間表現の特異性が際だっており、名詞のみで副詞となるのは時間関係のものだけであると言ってしまっても良い。小沢の提唱する「方向性(Directionality)」についても、4章の「サキ」の事例で分析した通り、時間の性質そのものが有している特性であるため、日本語の副詞においては、それがより厳密な形で副詞の特性として表れているのだと考えられる。動詞 (より厳密に言うなら「言表事態」(仁田 2002: 1)) を修飾するという副詞の基本的な性質から、時間語彙はそれ単体で事態の様態を表しうるものであると考えられる。結局、何らかの事態を伴わずに時間要素のみに言及することは稀であり、「時間に言及する≒事態に言及する」のであるならば、時間語彙は、それすなわち事態の有様を表す語彙 (副詞) となる。そう考えると、ここで取り上げられる「名詞」は、「副詞」との境界上にある存在であり、「副詞を形成する名詞」であるとも「名詞の性質を持ちうる副詞」とも言える。

6.2.2.3. 英語前置詞と日本語助詞の関係性

英語の前置詞と日本語の助詞をそのまま対照させるのもいささか乱暴な話ではあるが、表3中でも、副詞成分として「名詞+助詞」の形式がリストアップされているので、これを比較してみたい。表で確認できる助詞は時点を特定する「ニ」と、取り立て詞の「ハ」の2種類である。英語で取り

上げられた随意的な前置詞（無標の at, on, in）と対応するのは、当然このうちの二格の方であろう。
（取り立てのハについては今回は取り上げない³¹）

(147) b. I'll see you on Monday. = I'll see you Monday. （再掲）

b'. 月曜日に彼女に会う予定だ。＝月曜日彼女と会う予定だ。

随意的な場合に、助詞の無い方がくだけた表現に見えるのも英語の場合と同様である。また、「直示性」との兼ね合いも小沢の主張と並行する部分があり、中村 (2001) の主張もこれと同じであることが分かる。

(84) a. 「3時に」等の暦的（絶対的、calendrical）表現は助詞の二と共起する。

b. 「きょう」等の直示（相対的、deictic）表現は二と共起しない。

c. 「夜」等の表現は二と共起する場合と共起しない場合がある。 （再掲）

ただし、小沢の言うような「直示語の持つ方向性の概念が強すぎるために前置詞の削除が義務づけられる」ほどの強さが、日本語の助詞に適用されることは保証されない。小沢が挙げた「前置詞があると非文法的になる」事例は以下のようなものだが、これを日本語の助詞に置き換えても、特に問題無く付随することが可能である。

(156) a. next Sunday(week, year...) / *on next Sunday

b. Last Monday(week, year...) / *on last Sunday

c. 次の日曜日（に）、一緒に出かけよう。

d. （前の／こないだの）日曜日（に）、一緒に出かけた。

こうしてみると、「副詞的名詞句に前置詞が不要である理由」は、直示語の持つ方向性（事態の存在する Time position の在処）が明確であるためだという理解は可能だが、「前置詞を伴ってはならない理由」にはなっていないようである。もしくは、英語前置詞はそうした「方向指示の機能」が強く、日本語助詞の場合はそこまで明確ではないので共起を許す、と考えることも可能かもしれない。実際、通常は二格との共起を許さない直示語でも、表現次第では共起が可能である。また直示性についても、各々の語にどの程度の強さがあるかは検討の余地があるだろう。

³¹ 「あたし今日はちょっとお母さんに会いにいきたいの」「彼女は現在は韓国にはいませんよ」

- (157) a. こうしておけば、あしたにでも、ママがほうきではきだしてしまうだろう。
 b. 「お願いします、あしたにはなんとか……」とモリヨンは叫ぶ。
 c. 順延された運動会は {明日／?明日に／あさって／あさってに} 行われます。

6.2.3. 副詞的名詞句についてのまとめ

以上の調査について、本節のまとめを行う。大きく分けて、副詞カテゴリ内での語彙の制限についての考察、そして副詞・名詞間での品詞的つながりについての考察の、2点が結論として得られる。

6.2.3.1. 時間関係の副詞に関わる展望

時間性の関わる語彙について言及し、「語の意味」を書きだそうとしても、どうしても様々なものが影響しあってくるために対象を絞りにくくなってしまうが、俯瞰的に副詞というカテゴリ全体を捉えることで、いくつか見えやすくなっていく部分もある。1つは、次節で詳細に扱う「空間的分布を表す時間語彙」と呼ばれる現象が、副詞カテゴリの中で起こることの動機である。

(158) さっきレストランがあったけど、あそこはおいしいの? (定延 2002: 187)

(158)で用いられる「さっき」は、時間的な意味内容が主ではなく、「さっき(通り過ぎた場所に)……」という場所を表すものである、というのが定延(2002)における主張であるが、何故わざわざ場所を表すために時間語彙を副詞的に用いるのかと言えば、それは「ある」という状態動詞を副詞的に修飾する「空間語彙」が存在しないためである。「さっき」という直示表現はそのまま time position を示す副詞となりやすいものであり、これが事態性を伴い、そのまま「時点と共起しうる場所」を示す副詞的な形式を持つことは、直示表現の持つ「イマココ」性の表れであると理解できる。また、本章冒頭で挙げたもう1つの例文についても、改めて「副詞的名詞句」の観点から考察が与えられる。

(136) a. 私が仕事をしている {あいだ／あいだに} 寝ているなんて。 (再掲)

この例文における「あいだ」と「あいだに」の意味の違いを検討するとき、注目すべきが二格の有無なのはもちろんだが、それよりもまず、後続する述部の動詞が「テイル」形である、という部分を見なければならぬ。つまり、英語の事例で取り上げられた以下の差分である。

(149) a. I (have) visited my mother this morning. (time position) (再掲)

b. I have been visiting my mother this morning. (time span)

a'. 私は今朝母のところを訪れタ。(time position)

b'. 私は今朝母のところを訪れテイタ。(time span)

当然の話だが、アスペクトの問題で「テイル」が使われているのだから、(149b)は継続的な意味が優先される。進行相が時間の継続を優先するのは、副詞の性質というよりも動詞の性質によるものである。同時に「テイル形が継続を優先する」という事実は「仕事をしテイル」の方にも関係してくる。つまり「仕事をしテイルあいだ」という名詞句は、継続を必要とする（つまり点的ではない）時間語彙であり、なおかつ直示的ではない。直示的なものであれば前置詞（助詞）を伴わずに「時の状況成分」を示す用法（今日、明日など）が存在したが、直示的でない場合、そこには方向性(Direcutionality)がないため、「時の状況成分」を成すための二格を必要とする。そのために、二格を伴わない状態で「テイル形」以外のアスペクトを表現しようとするとう不自然になってしまう。

(136) a'. 私が仕事をしている {?あいだ／あいだに} 寝たなんて。

つまり、(84)で示された中村 (2001) の直示要素と助詞の関係性については、時の状況成分(time position)を示す副詞となる場合の制限について言及したものであり、時の状況成分であるか、時間関係の副詞(Time span etc)であるかは、動詞の形式との関係性を考える必要があるということである。

6.2.3.2. 副詞性を含む名詞句についての今後の課題

本節では、「名詞が副詞的に用いられるとき、助詞の有無が直示性や、その語の表す時間性によって変わり、表したい事態の内容（時制）によっても、取り得る形式が変化する」という大枠の結論が得られた。名詞と副詞の境界について観察してきたわけだが、この領域に残された問題は数多い。とりあげた事例に限っても、「私が仕事をしているあいだ」は、英語ならば *during*, *while* などの意味に相当するものであり、これとの比較も必要になるだろう。*during* は「有標な前置詞」であるので、小沢の分析における *before* などとの対応が見込めるが、*while* との比較（「仕事をしている - アイダ」という構造を考えるならこちらの方が自然である）となると、今度は接続詞との兼ね合いになってくる。この場合の「アイダ」の品詞は一体なんなのだろうか。品詞の区分で議論するならば、自然に「接続詞」のカテゴリで議論されている研究にも行き当たることになる。時点(time position)に関係しているものとして、以下を引用しておく。

(159)

従属接続詞の機能は、文相当の形式を受けて、後続の(主)節に接続することである。動詞や名詞から派生したものが多く、形態的には、動詞の中止形と一致するものと、名詞の一語系と一致するものがある。元の動詞や名詞の性質を部分的にとどめているものがある。

(村木 2012: 310)

この接続詞の議論で取り上げられているものには、たとえば「～途端」や「拍子」「はずみ」「やさき」「最中」「折(に)」「際(に)」が挙げられている。これらに比べると、アイダは単独で意味をなし、より名詞的性質の強い語であるとは思われるが、「～アイダ(に)」形式の振る舞いは、これら接続詞の語群に近いものである。

以上のように、「時間性」を手がかりに品詞論の視野を広げると、最終的にはどのような領域においても時間に関わる相互関係は無視できない要因であり、こうした視座に立った新たな品詞の整理、もしくは、品詞の垣根を越えた新たなカテゴライズの可能性も見えてくる。本節では事例研究を行い1つ1つをボトムアップ的に観察したが、これらの事例を元にして、新たな時間考察の枠組みを構築し、日本語学の体系に組み込むことが求められるだろう。また、時間との関わりにおいて、こうした体系は認知言語学的な概念との接合を強くする。動詞・名詞といった中心的なトピックスに加え、文の修飾を主とする副詞領域の整備が、認知的な道具立てから行われることも期待される。

次節では、更なる副詞の機能性の実例として、(158)でも取り上げた「空間的分布を表す時間語彙」と呼ばれる現象について考察していく。

6.3. 空間的分布を表す時間語彙

前節で観察した通り、副詞はいわゆる名詞カテゴリに含まれる語によって時間要素が表され、これが「時の状況成分」として事態の起こった生起時を定めるものとしての機能を果たす。しかし、実際の用例に於いて、こうした語群は時間指定の枠を飛び越え、実際には「空間的要素」に言及している場合があるという論説がある。これが定延(2002)を中心に扱われている「空間的分布を表す時間語彙」と名付けられた用例で、これらは副詞の時空間の有り様を見る上で重要な事例であると考えられる。本節で、これらの現象について、「時間を表す語」がどのようにして空間要素に関わっていくかを観察することにする。

6.3.1. 「空間的分布を表す時間語彙」とは何か

前節(158)でも多少触れたが、定延(2002)の中で扱われた「空間的分布を表す時間語彙」とは、

具体的には以下のような現象を指す。

- (160) a. さっきレストランがあったけど、あそこはおいしいの？
b. 本当に怖いところもときどきあったけど、まあ楽しかった。
c. たまには愛称で呼ばれるのを嫌う人間がいるから注意が肝腎だ。

(定延 2002: 187)

(160a)は、バスの窓から外の風景をみていてレストランを見つけた人間の発話で、この場合にレストランが今はもう無いが先刻はあったなどと表しているのではない。「さっき」と言っているが、この時間語彙によって、少し前の時点というより、少し戻った地点を表していると言える。(160b)は遊園地でジェットコースターに初めて乗った人間の感想であり、この場合、ジェットコースターのコースの上に「怖いところ」は「常に」存在しているはずであるが、話し手は「ときどき」によって空間的分布のパターンを表している。同様に、(160c)の「たまには」は愛称で呼ばれるのを嫌う人間が現在の世界に少なく分布していることを表す。つまり、時間的な分布ではなく、空間的なものに見える。これらの例にある「空間的分布を表す時間語彙」に関して、定延は「視野」や「探索」といった方策を用いて用法の制限を説明しようと試みている。こうした現象分析によって何が得られるかという点、「人間にとって空間は時間より分かりやすく基本的であるとは限らない」という示唆である。

(161)

空間一般がどれほど分かりやすく基本的としても、話し手が或る個別空間を見知っていなければ、その個別空間は話し手にとって分からないものに過ぎない。見知らぬ個別空間よりは時間が分かりやすく基本的なので、その個別空間のありさまを語る場合は、その個別空間を探索領域とする探索の時間をもとにして「さっきレストランがあったけど～」などと表現する。それが<空間的分布を表す時間語彙>という現象である。(ibid.: 195)

(161)の言説において、「時間語彙」という言葉が何を意味するものかについて言及されていない点には注意が必要であるが、(160)の例の場合、下線で与えられた「さっき」「ときどき」「たまには」などに共通していることは、少なくともこれらが例文の状況においては「生起時」を意味するものになっていないであろう、ということである。これらが「空間を指示している」ことについては、簡単な応答テストで確認出来るだろう。

(162) 「さっきレストランがあったけど、あそこはおいしいの？」

「え？ {どこ/*いつ} のこと？」

(162)で分かる通りに、(160a)のような「さっき」を用いた疑問文に対して、その指示内容を「いつ」で問い返すのは不自然であり、この場合は「どこ」「どれ」などの方が自然である。このことは、「時間語彙」とされるものの示すものが「時間」だけであるならば、大変奇妙なことであろう。

6.3.2. 視野仮説と探索仮説

6.3.2.1. 視野

上述のような表現について、空間メタファーを主な分析手法として用い、「時間語彙は空間語彙の転用である」という主張を行うような場合には、一体どのような説明がなされるだろうか。定延は、そうした「空間メタファー論者」からの1つの主張を仮想しており、その主張に「**視野仮説**」という呼称を付けている。これを端的に記述すれば、上記のような表現は、「空間的分布を表す時間語彙」などではなく、あくまで「時間的分布を表す時間語彙」であるというものだ。その説明の道具立てとして、「**視野(viewing frame)**」という概念が持ち出される。この「視野」とは、「人間が持つ、自分が見たり聞いたりしてとらえられる領域」として設定される。人の五感すべてが視野に含まれ、さらにテレビやインターネットなどで視野は拡張されることもある。ある人間の視野は、その人間と共に移動する。視野は人間が生きて いる間じゅう（少なくとも意識ある間じゅう）続く。

この「視野」を持ち出すことでどのように説明が付されるかと言うと、(160)のような表現は、「空間的分布の表示」ではなく、「時点における視野の表示」と認識出来るということである。(160a)の場合ならば、「走行中のバスから流れゆく車外風景を眺める私の視野内に、先刻レストランがあった（つまり今しがたバスからレストランが見えた）けど～」となる。つまり、時間語彙「さっき」が表しているのは、「少し戻ったところ」という地点（空間）ではなく、やはり「先刻」という時点である。同様に「ときどき」や「たまには」も、「視野が時折どうであるか」を表す。こうした考え方を、「視野仮説」と呼称する。これによって、(160)のような表現は「空間的用法がより基本的で、時間的用法は派生的」という考えの反例にはならず、(161)のような一般的な時空間関係に対する逆転現象は起こらないことになる。

6.3.2.2. 視野仮説の問題点

定延は、このような「視野仮説」は、明示的に言語化されない領域を指すという特徴についてはうまくとらえられているが、いくつかの問題点があると指摘し、それらを4点に分けて論じている。

定延が提示した問題点は以下の4点である。

(163) 視野仮説の問題点

- ① 空間表現の選り好み
- ② 時間語彙の選り好み
- ③ 分散の必要性
- ④ 存在表現とアリサマ表現

(163)①の「空間表現の選り好み」とは、「空間的分布を表す時間語彙」は、空間表現すべてが対応するわけではなく、使われる語彙を選り好みすることについての問題である。これらについて、「視野」を主とした体感領域だけでは説明しきれないとする。以下の例を見よう。

(164) a. ?氷河期の世界にはマンモスの墓場もときどきあった。

b. ?うちの近所にはテニスコートがときどきあります。(定延 2002: 190)

(164)の例文はどちらも不自然である。そして、(164a)の例文の場合、氷河期の世界などは体感領域として捉えにくいために、視野が働かずに不自然になる、という主張が通るため、視野仮説は説明力を有する。しかし、(164b)の場合、「うちの近所」は容易に視野に取めることが可能であるにも関わらず不自然さを持つ。このことは視野仮説では説明出来ない。

問題の2つめ、②「時間語彙の選り好み」とは、同じ状況でも用いられる時間語彙の方に制限がかかるということである。具体的には、以下の例文で示される。

(165) {今/?数秒前に} レストランがあったよ。(ibid.: 190)

(165)では、同じように「ほんの何秒か前に見た」ということを説明する時に、「今」という語が自然なのに対し、同じようにして「数秒前」と言ってしまうといささか不自然になることが観察される。こうした「語彙の選り好み」については、視野を前提条件とただけの視野仮説では説明能力を持たないとする。また、「常時性を持つ時間語彙」の制限として、以下のような指摘もしている。

(166) a. なにしろ田舎だから無人駅がしょっちゅうあるわけよ。

b. ?なにしろ田舎だから無人駅がいつもあるわけよ。

(166)の例においては、1つの電車の路線において、「たくさんの無人駅がある」ということを言った(166a)の場合は自然になるが、「全ての駅が無人駅である」場合に、(166b)のような表現は不適切であることが観察出来る。このような差は、視野仮説だけで説明されるものではない。

3点目の③「分散の必要性」も用法制限の問題で、(160b)の例文は、たとえ複数回「体感」して視野に収めたとしても、「怖いところ」が1カ所では成り立たないとしている。

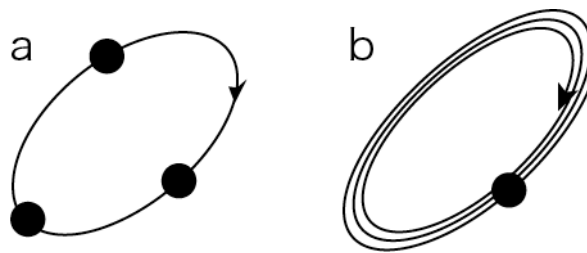


図41 「ときどき」怖いところがある2つのパターン

図41のaは、ジェットコースターに乗った時に1週で3カ所の「怖いところ」がある状態を示し、この場合、「怖いところがときどきあった」ということは自然である。他方、図のbの方は、ジェットコースターに乗った時に、同じコースを3回連続でグルグルと回り、そのコースの1週のうちに1カ所だけ「怖いところ」がある状態を示す。この時も、「ジェットコースターに乗ってから降りるまで」という経験の間にはaの時と同様に3回の「怖いところ」を経験している（つまり視野に収めている）はずだが、これを「怖いところがときどきあった」と表現するのは適切とはいえない。このような違いは、視野仮説によっては説明されない部分である。

4点目の④「存在表現とアリサマ表現」は、こうした用法がアリサマ表現を好まないという点である。ここでいう「アリサマ表現」とは、下の例で分かる通りに、「事物の状態を表示する表現」であるとしている。

(167) a. あと5分したら大きい木がありますよ。

b. ?あと5分したら木が大きいですよ。(定延 2002: 192)

(167)の例は、2人連れ立って道を歩いている場面などを想定し、片方の人物が、もう5分程度歩いたところにとっても大きくて有名な木がある、ということを知っており、もう片方の人物に伝える、という文脈である。この時、(167a)のように表現するのは自然であるが、(167b)はいかにも不自然になる。「5分後の視野」を表示するのが視野仮説における説明だとしたら、このような表現も可能

になると思われるのに、実際には明確な差が出てしまうのは一体何故であるか。こうして4つの問題点をピックアップした結果、定延は「視野仮説ではこの現象を説明するには不十分である」と結論し、さらにこれを発展させた新たな仮説を提唱するに至る。

6.3.2.3. 探索仮説

上記のような「視野仮説」に残された問題点を解決するために定延が提案するのが、「人間の行動」という要素を加えた「**探索仮説**」である。ここで提案された「探索」の概念は以下のように説明される。

- (168) 人間は日々、それまで知らなかった空間（例えば見知らぬ部屋）を探索することによって、心内世界を広げ充実させる。探索が及ぶ領域（見知らぬ部屋）を**探索領域**と呼ぶ。探索には「探索領域はどんな様子なのか？」という問題意識が必要である。この問題意識を**探索意識**と呼ぶ。探索に臨む認知者の意気込みと言ってもよい。見知らぬ部屋を見ていても、ただぼんやりと眺めており、探索意識が無いのであれば、探索を行っているとは言えない。(定延 2002: 192) (下線は執筆者)

また、これに加えて**マクロ探索**と**ミクロ探索**という概念も導入されており、たとえば「その部屋がどのようなものか?」「無くした手帳はどこか?」のように課題や意識が定まった探索は**マクロ探索**、そして探索領域である部屋の中で一瞬一瞬連続して行われる、スケールの小さな探索が**ミクロ探索**である。この「探索」という概念を「視野」に加味することによって、とりあげた4つの問題点を説明することが出来るとする。

6.3.2.4. 「探索仮説」による問題点の分析

(168)で「探索」という概念を導入したことにより、これを用いた人間の「探索活動」を定義する「探索仮説」が設定される。それは、およそ以下のようなになる。

- (169) 「空間的分布を表す時間語彙」とは、見知らぬ空間を探索領域とするミクロ探索という体験が語られる際に成り立つ現象である。(定延 2002: 193)

例えば(160a)の場合、「さっきレストランがあったけど～」と言えるのは話し手がその街をよく知らず、街をバスから眺めて探索するということが自然であるから、「空間的分布を表す時間語彙」の使用条件である「探索」が容認される。(160b)もこれと同様である。(160c)に関してはいくらか適

用法が異なるが、「話し手が社会をまだよくは知らず、従って社会を探索することは自然だからである」としている。また、これに続けて「この話し手にかぎらず、社会という広大な空間は人間一般の探索領域と見なされることがよくある」ともあり、(160c)のような文脈においては、「空間的分布を表す時間語彙」の使用はごく自然なことであるとする。以下では、前節(163)で持ち上がった視野仮説の問題点を1つずつ分析していく。

まず、①「空間表現の選り好み」については、(164b)の例文が不自然であるのは、話し手が近所界隈を熟知しており、「近所」という空間自体が探索行動の対象にならないと考えられるからである。熟知した空間ゆえに、テニスコートの空間的分布を語る際に、わざわざそれを自分の探索体験の形で語るべき理由は無く、それ故に「空間的分布を表す時間語彙」に必要とされる探索が行われない。

②「時間語彙の選り好み」について、(165)の例で「数秒前」よりも「いま」のような時間語彙が好まれるのは、この現象が探索という体験の表現に成立する現象であるためである。また、(166b)の例にあがった「いつも」のような常時性の時間語彙を嫌うのも、これらの語彙はきわめて規則的な分布を示すので、体験のまま表現する（「?田舎だから無人駅がいつもある」）よりも知識にまとめあげて表現する（「田舎だから駅はすべて無人駅だ」）方が自然である。

③「分散の必要性」について、図 41 の b の設定の方が不自然なのは、正確には、モノが1カ所で分散していないこと自体が問題なのではなく、モノの所在をX箇所と特定出来るほどにその空間を熟知してしまっていることが問題であるとする。つまり、ジェットコースターを3週する例の場合、1週目で既に知ってしまった領域は探索する必要がなく、2週目以降は探索と捉えにくい。そうすると、探索によって与えられた「怖いところ」は1つだけであり、「ときどき」という語は不適となる。

④「存在表現とアリサマ表現」について、(167)のような表現が存在表現を取りやすいのは、存在表現があらゆる表現の中で基本的な地位を占めているためである。我々は存在しない木について、その大きさを語ることは出来ない。つまり、アリサマ表現は存在表現を前提とした付加的なものであり、一瞬で行われるミクロ探索において、存在情報はアリサマ情報よりも獲得されやすいと考えられ、「探索」と密接に関わった「空間的分布を表す時間語彙」においては、存在表現の方が優先されることになる。以上のように、人間の体感を基にした「視野仮説」に加えて「探索」を導入することにより、「空間的分布を表す時間語彙」の振る舞いは説明される。

6.3.2.5. 探索仮説による時空間の関わり

「空間的分布を表す時間語彙」の振る舞いに「視野」「探索」などが大きく関わっているとすると、空間メタファーを基盤とした時間語彙の理解についても1つの分析が得られる。具体的には、

第3章でも取りあげた「具体から抽象へ」という空間メタファー論の大本となる概念に、別方向からの展望を与えることになる。一般に、「人間にとって空間は時間より分かりやすく基本的」であるとされるが、「探索」が採用されたことによって、「人間にとって空間は時間より、分かりやすく基本的とはかぎらない」可能性が出てくる。(161)で述べられた通り、空間一般がどれほど分かりやすく基本的としても、話し手がある個別空間を見知っていなければ、その個別空間は話し手にとって分からないものに過ぎない。「分かりやすさ」という尺度で言えば、時間の方が「見知らぬ個別空間」よりも分かりやすく基本的である可能性があるのだ。そのため、個別空間のアリサマを語る場合には探索という体験の時間を基にして表現する。それが「空間的分布を表す時間語彙」という現象である。空間と時間の関係は、空間を「空間というもの一般」と「個別空間」にわけて論じる必要が生まれ、「何をもって基本的であるとするのか」という問題から、時間と空間が言語に及ぼす影響を再検討する必要性が生じる。

6.3.3. 探索仮説の検討と両義的原義図式

以上のような分析により、定延は「空間的分布を表す時間語彙」の仕組みを説明している。こうした「探索仮説」による分析で端的に現れたのは、その時間と空間の関係性についての主張である。「そもそも空間と時間を峻別することに疑問を呈する(定延 2002: 186)」とあり、この現象の分析はダイレクトに時間と空間の両義的な状態を念頭に置いている。そして、その背景として「探索」と名付けた「体験」に裏打ちされた事象を持ち出した点についても興味深く、実際の経験基盤に様々な因子を探る認知言語学的に正当な方向性と言える。しかし、この仮説についても、いくつかの疑問点は残っている。ここではそうした「探索仮説」に至るまでの分析過程に対する疑問点をあげ、なるべく独自の用語を用いない形で、時空間の関係性を一般化することを試みる。

6.3.3.1. 視野仮説の有効性

大きな疑問の1つは、果たして定延の仮定した「視野仮説」というものがあるのかどうか、という点である。確かに「空間的分布を示す時間語彙がある」という主張に対して「それは空間的分布ではなく時間分布である」という反論はありえるだろうが、仮に視野仮説を採用したとしても、それだけでは対象となる現象が時間分布を示しているということにならない。例えば定延の推論の通りに(160a)の例文を「走行中のバスから流れゆく車外風景を眺める私の視野内に、先刻レストランがあった(つまりつい今しがたバスからレストランが見えた)けど～」という意味内容であると解釈したところで、結局「私が先刻視野に入れた場所」に言及していることには変わらず、つまりは「空間分布」を示すことになっている。時間と状態の関係性については再三言及しているが、「経験」という1つの事態から特定の時間要素、空間要素を示そうとする場合、時間と空間が1対1対

応している。その上で、(160a)の例文の場合、「さっきのレストラン」が「数秒前まで存在していたレストランが現在は無くなっている」などということは意味しないわけで、時間的な要素に言及したのでないことは、(162)の検討などからも瞭然である。視野という概念を導入しようがすまいが、この表現において表示されたのは、あくまで「空間的分布」である。更に厳密にいうならば「空間要素を含んだ認識事態」である。とすると、定延によって言葉を尽くして提案された「探索仮説」の付加は多少的外れな印象が拭えない。「視野仮説」という仮想的な反論を想定しないとすると、「空間的分布を表す時間語彙」という現象は、「時間的な表現が基本的で、空間表現が派生的な語彙」というだけの存在になる。そして、その背景に必要なのは、上記のような「経験」を基にした時間と空間の対応関係、つまり経験から両義的に獲得された出来事概念に集約されるのではなかろうか。このことは、定延がとりあげた数々の「問題点」を1つずつ解体することで検討される。

6.3.3.2. 問題点の再分析

以下では、定延が「視野仮説」を導入しても説明出来ないために「探索仮説」を採用する論拠となった(163)の4つの疑問点を、改めて検討することにする。これらの問題点について、「視野仮説」に含まれる以外の理由が存在したり、そもそも問題ではなかったりした場合には、自ずと「探索仮説」の必要性は不確かなものとなるだろう。

まず1つ目は、①「空間表現の選り好み」に関して、「ときどき」を巡る生起制限である。

(160b) 本当に怖いところもときどきあったけど、まあ楽しかった。

(164b) ?うちの近所にはテニスコートがときどきあります。 (再掲)

(164b)の例文に関して、「視野に入れることが出来るのに不自然なのは何故か」という問題を取り上げていたが、むしろ問題となるのはあくまで「経験」が背景としてどの程度反映されるか、ということではないだろうか。「ときどき」という語彙に含まれる「偶発性」の意味は無視出来るものではなく、「正確にその存在する(空間的、時間的)位置を把握していない場合」においてのみ、「ときどき」という語彙が用いられると考えれば、(164b)が不自然なのは単に「ときどき」という語彙が持つ意味の問題に集約される。このことは、「時間→空間」という次元の差がなくとも存在するものであろう。(170)の例の場合、期末テストはおおよそその施行時期が決まっており偶発性に乏しく、複数回の「時点」で行われるという意味では正しいが、実際には不自然な文章になっていることから分かるだろう。

(170) ?うちの学校はときどき期末テストがあります。

続いて視野仮説の2つ目の問題点、②「時間語彙の選り好み」の問題については、以下の例が問題になるのであった。

(165) {今/?数秒前に} レストランがあったよ。 (再掲)

(165)の例で「数秒前」よりも「今」のような時間語彙が好まれるのは探索という体験の表現に成立する現象であるためであるということだったが、概ねこの説明で的を射ていると思われる。さらに「経験」という因子に引き寄せるならば、(160a)の場合の「さっき」やこの例の「今」に比べて、「数秒前」の場合、どうしても時間的な分布を強く想起させるため、時間から空間への橋渡しが行いにくい。これは、具体的な数値や数詞の存在が大きいと考えられる。言い換えれば、これらの「具体的な数値や数詞を含む語」については、特定の要素（時間要素、空間要素）に強く焦点化されるもので、他方の要素を持つ語として理解されにくいとも言えるだろう。また、以下の問題についても「語彙の持つ特性」と考えるより他無いと思われる。

(166) a. なにしろ田舎だから無人駅がしょっちゅうあるわけよ。
b. ?なにしろ田舎だから無人駅がいつもあるわけよ。(再掲)

この現象について定延は「常時性の時間語彙は規則的な分布を表すので体験のまま表現する必要が無い」と説明しているが、常時性と生起の不自然さの関係には疑問が残る。似たような常時性をもつ「ずっと」の場合、その容認度は随分変わってくる。(171)のような事例については、常時性を持つはずなのに用いることが出来るのは何故だろうか。

(171) a. ?なにしろ田舎だから無人駅がずっとあるわけよ。
b. なにしろ田舎だから無人駅がずっと続くわけよ。
c. ずっと麦畑。

3つ目の問題点、③「分散の必要性」については、ジェットコースター3周の例から「領域を熟知してしまうほど知っている場合には探索の必要が無い」とまとめているが、この例の場合も、「ときどき」という語彙の持つ偶発性を含む意味の問題にまとめられると考えられる。その証拠に、「ときどき」が明らかに時間語彙として用いられる場合にも、この制限は適用される。

(172) a. 京大ではときどき妙なイベントがある。

b. (何年も大学で生活していて) ?京大ではときどき入学式がある。

最後に④「存在表現とアリサマ表現」の問題であるが、これに関しても、やはりこの現象に特有の制限ではないと考えられる。そもそも(167b)の文は、「空間的分布を表す時間語彙」を用いずとも、意味の通らない文である。

(173) a. あの丘を越えたら大きい木がありますよ。

b. ?あの丘を越えたら木が大きいですよ。

このように、定延が取り上げた問題のほとんどは、「時間語彙を空間表現に用いる際に発生する制限」ではなく、「時間語彙（と呼ばれるもの）を用いる際に現れる制限」でしかない。つまり、このことと「視野仮説」の有効性は関係性が乏しく、「空間的分布を表す時間語彙」の特殊性が揺らぐものではない。むしろ、ここで問題となるのは、空間的にも、時間的にも共通して用いられた語彙に含まれた個別の意味の方であろう。そもそもの問題として、定延は何をもって「時間語彙」「空間語彙」という隔たりを設けたのかが、はっきりしていないのだ。

6.3.3.3. 「ときどき」の持つ時空間意味の事例

こうした検討によって、「空間的分布を表す時間語彙」を分析する際には「視野仮説」および「探索仮説」では不十分であると考えられる。しかし、これまでの反証においても、必要十分な説明能力を持つ答えを得られたとは言い難い。問題は、再三現れた「語彙の特性」、「個別の意味」といった文言である。「何故そのような意味で理解されるのか」という問いに対し、「その語にそのような意味があるから」という解答は、まったく説明能力を持たない。そこで、改めて「語彙の特性」とは何か、元来「時間語彙」と認められ、それ故に「空間的分布を表す時間語彙」と称される振る舞いを見せる数々の語彙が、どのような性質からこうした現象に現れるのかを、前出の「ときどき」を用いた例で具体的に検討することにする。

(160b)や(164b)であげられたように、「ときどき」は「空間的分布を表す時間語彙」を形作る。この時に、(164b)の方は不自然になってしまうという問題があり、これについては、「ときどき」の持つ「偶発性」に関わるのではないかということの前節で指摘した。ここで、以下の例を見る。

(174) この学校では、ときどき授業開始の鐘が鳴る。

(174)の例文を読んだ場合、普通は「授業が始まる前には必ず鐘が鳴る」という読みにはならず、「何らかの理由で昨日は1時限目と3時限目に鳴り、今日は2時限目に鳴った」であるとか、「毎日3時限目には鳴らないけれども2時限目と4時限目には鳴る」というように、ある程度の不規則な要素を孕む読みになる。毎時必ず鐘が鳴るならば、「ときどき」を用いた(174)は不自然になるだろう。不規則性が含まれる「この学校のチャイムは壊れているので、ときどき鐘を鳴らす」ならば問題ない。このような差については、純粹に「ときどき」がどのような意味を持つか、ということに理由を求める以外にはなく、「ときどき」という語彙に認められる「意味」としては、なんらかの「偶発的事象」が含まれるのは間違いない。「反意図性」と言い換えてもいいたろう。(174)の例では「鐘が鳴る時間」という時間要素が焦点化しているために時間語彙であるように思われるので、この時に「ときどき」は「偶発的事象」の意味を持つ時間語彙として機能することになる。「ときどき」とは、漢字で表記するならば「時々」である。そこにはあまりに明示的な「時間要素」への焦点化があり、純然たる時間語彙、つまり「両義的原義図式」(第3章、図7参照)では「完全時間義」のみを持った語であるとの認識が強いことは、十分に想定できる。そして、これが空間意味を獲得できるかどうか問題となるわけだ。以下の例を見よう。

- (175) a. 本当に怖いところもときどきあったけど、まあ楽しかった。 (=160b)
b. ?うちの近所にはテニスコートがときどきあります。 (=164b)
c. 通学に使っている電車の線路沿いには、テニスコートがときどきある。

改めて(44b)(45b)でとりあげた事例であるが、この時の(175a)は、「ときどき」を用いて空間的要素に言及した、「ときどき」の空間用法と考えることが可能ではないだろうか。この例において、発話者の経験した「怖いところ」は発話者の意図したポイントではなく、突如として「経験した」「怖い時間を経験した空間」であり「怖い空間を経験した時間」である。こうして「偶発的经验事象」を表す「ときどき」を用いて、経験した時間ではなく、場所に言及した表現と見なすことが出来るのではないか。ここで比較したいのは、(175b)と(175c)の対比である。(175b)が不自然であることは定延の述べた通りだが、これに文脈を付け加えた(175c)の場合には、その容認度があがる³²。これは一体何故か。考えられる理由としては、(175c)の例文の場合、「通学」という文脈的背景が付け加えられたために「移動」のイメージが強く喚起されるということがある。そのため、「移動中にテニスコートを視認するという偶発的事象」が喚起され、「ときどき」の使用が可能になる。他方、(175b)の場合には、具体的な「偶発的经验事象」のイメージが喚起されない。「うちの近所」にテニ

³² 簡単な聞き取り調査を行った程度ではあるが、この(175c)を不自然であるとする意見は無く、逆に(175b)の方は不自然であるという意見が過半数を占めた。

スコートが点在することには偶発性は無く、ただ「そこにある」だけである。このため、具体的な経験から想起されるような「ときどき」の両義的原義に適合する意味内容が喚起されず、このような例は不自然となる。

以上のように、「空間的分布を表す時間語彙」という現象は、元来時間要素に焦点化する比重（頻度、と置き換えても良いかもしれない）の高かった語が、事態の双方の要素が想起可能な状況下において状態要素について焦点化し、「空間語彙」に近付いた形のことであると推察出来る。言い換えるならば、この時に「時間語彙」と呼ばれていたものが、「時間語彙」という絶対的なステータスを獲得しておらず、「空間語彙」として振る舞うことも可能になる。そして見方を変えれば、こうした現象が起りうるということ自体、多くの語には空間的体験、時間的体験が同時に付随して多元的な「経験」の中で意味を与えられていることにもなるであろう。

6.3.4. 時間に関わる副詞類の分類と検討

定延 (2002) で扱われた「空間的分布を表す時間語彙」は、元来時間要素を表すものに関わっていた現象であるから、そこで取り扱われる語はすべて副詞に分類されるものである³³。そこで改めて、ここで登場した副詞的であるとされる表現から、時間に関わるものをまとめていく。副詞の分類については 6.1. 節でも取り上げた仁田 (2002) の分類を参照し、そのカテゴライズが「空間的分布を表す時間語彙」とどのように対応するのかを観察する。仁田 (2002) において副詞は 5 つに分類され、それぞれ「結果の副詞」「様態の副詞」「程度量の副詞」「時間関係の副詞」「頻度の副詞」となっている。このうち、上記の定延の研究で現れたのは「時間関係の副詞」と「頻度の副詞」の 2 種類である。更に、この 2 つのカテゴリの中でも下位区分が存在しており、それぞれ「時の状況成分」「時間関係の副詞」「頻度の副詞」「度数の副詞」となっている (図 42 参照)。以下、この分類を細かくみていく。なお、それぞれの分類にどのような語が含まれているのかは別表を参照されたい。

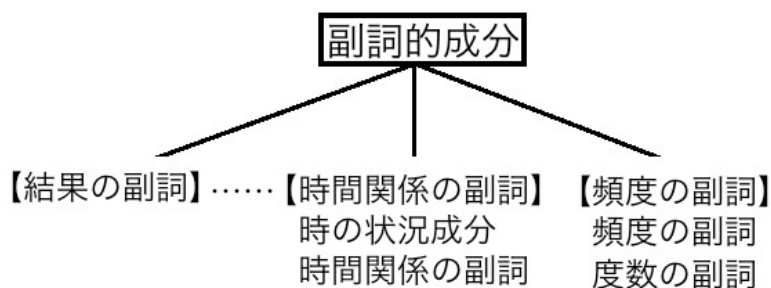


図 42 仁田 (2002) における副詞の下位区分

³³ 「さっき」「数秒前に」「ときどき」「あちらこちらに」「たまには」「しょっちゅう」など

6.3.4.1. 時間関係の副詞

「時間関係の副詞」に分類されるものには、さらに大きく分けて2つの下位分類があり、それぞれの振る舞いは大きく異なる。1つ目は(140)~(142)で取り上げた「時の状況成分」であり、「時の状況成分」とは、「述語成分の表す事態の生起時を表すもの」となっている。

(140) 1910年10月30日、美しい湖にのぞんだハイデンでアンリー・デュナンは、82歳の生涯を閉じた。 (ibid.: 24)

(141) 或日の事でございます。お釈迦様は極楽の蓮池のふちを、独りでぶらぶら御歩きになつてゐらっしゃいました。(芥川龍之介「蜘蛛の糸」) (ibid.: 26)

さらにこれを、「不定時」と「発話時」のどちらを基準にしているかを分けた上でその前後に分け、さらにそれとは別に「絶対的時点」も設定している。これらの中では、「空間的分布を表す時間語彙」に用いられそうな語は比較的限られている。まず、「不定時」を基準としたものは全般的に用いることが出来ない。また「絶対的時点」を表すものも、基本的には使用出来ないとみていいだろう³⁴。そして、「発話時」を基準としたタイプについても、「発話時を含む時間帯」については使うことが出来ない。となると、「空間的分布を表す時間語彙」に用いられるのは、「発話時を基準としたその前後」のタイプだけである。また、その中においても自然に使えるものと、そうでないものがある。これらの差については、時間のスケールの差が関与していると考えられる。

(176) 当時→この前→昨日→先ほど、今しがた、さっき→[現在]
→あと5分したら→このあと、今に→今後→明日→将来

³⁴ よほど時刻が定まったコンテキストならばこの限りではなく、例えば決まった時間の通勤電車で「8時12分に東京タワーがあります」は、考えられるかもしれない。

表4 「時の状況成分」に含まれる語群

太字は筆者が「空間的分布を表す時間語彙」に無理なく使えると判断したもの。

下線は定延 (2002) で扱われたもの。括弧書きは、仁田の例にはないが定延が取り扱ったもの。

【不定時】

{含む} そのとき、その朝、その頃、このとき、当日、あるとき

{以前} その前、前の日、一週間ばかり前、数年前、あらかじめ、前もって

{以後} 翌日、翌朝、あくる日、その後、次の瞬間、一分後

【発話時】

{含む} 今³⁵、今日、今月、今年、最近、近頃、当節、昨今、このごろ、今頃

{以前} 今しがた、さっき、先ほど、昨日、当時、この前、(数秒前に)

{以後} 今に、明日、来週、このあと、今後、近々、将来、(あと5分したら)

【絶対的時点】

{直線} 昭和三十三年七月、1980年、九時ちょっと過ぎ

{循環} 朝、晩、午前、春、月の初めに、お盆に

これらの観点から、「空間的分布を表す時間語彙」に用いられる語については、以下のような条件が想定されるのではないか。

- ① 発話時を前提として、その時点との前後関係性を示す語
- ② その中でも、比較的近接して空間と時間の共起性の高い語

唯一座りが悪いのは定延のあげた「数秒前に」と「あと5分したら」の違いだろう。

(165) a. {今/?数秒前に} レストランがあったよ。

(167) a. あと5分したら、大きい木がありますよ。(再掲)

「数秒前に」が(177)の条件をクリアした上で不自然に感じられるのは、「さっき」「今しがた」の

³⁵ 「今」については、仁田も「過去・現在・未来の全てのテンスを取り得る」としており、判断が難しいので保留とする。

ような、より優先度の高い語彙が存在するためではないかとも考えられる。「つい先ほどの事態」を表す際に、わざわざ「数秒前」という「絶対的時点」を指定する必要性が薄く、あくまで「現在より少し前の地点に事態があったこと」を伝えることの方が優先される。これは以下の組み合わせからも伺える。

(165) a. {いま/?数秒前に} レストランがあったよ。

(177) {いま/?数秒前に} カメラに何か映ったぞ。

(165a)は「どこに?」と聞き返せるので空間の意味を含む場合。対して(177)は「どこに?」という聞き返しは不適なので、純粹に時間の意味と考えられるが、どちらの場合でも「いま」という方が自然であろう。対して「あと5分したら」の場合、空間的な用法でも自然に見えるとする(167a)。これは、「5分後」という絶対的な時間のスケールを伝達することが目的であり、「3分後でもなく、10分後でもなく、5分後」であるから、このような表示が可能である（もちろん、「あと少ししたら大きい木がありますよ」の方がより自然であるようには見える）。

次に「時間関係の副詞」と仮称されたものを検討する。これらについては、「基本的に、事態そのものの有している時間的性格から引き出されたものとして捉えることのできる、時間の中での事態の出現や展開や存在のありようを表すことを通して、事態の実現・成立のあり方を限定し特徴づける副詞的成分 (ibid.: 201)」とある。分類としては「**事態存続の時間量を表す副詞**」を、その量の大小で分類したほか、「**時間の中における事態の進展**」を表す語を、様態自体で表示するか、それとも時間で表示するかによって分けている。そして「**起動への時間量**」は、事態そのものの起点までの所要時間について、その大小で分類してある。これらを見ていくと、「時の状況成分」に比べると多くのものが「空間的分布を表す時間語彙」として用いられることが分かる。まず、「**事態存続の時間量を表す副詞**」については、その大小によらず、ほぼ使用可能となる(表5)。

(178) a. ずっと 麦畑が続いている。

b. ここからはしばらく 桜並木です。

c. 今通った道、一瞬 舗装路があったね。

他方、「**時間の中における事態の進展**」および「**起動への時間量**」については一考を要する。どちらのカテゴリにおいても、そこには「進展」「起動」といった動作の有り様が存在するため、これらの語群は「存在」を表す表現(定延の言葉でいうところのアリサマ表現)との共起は困難である。以下のような事例では空間的要素との繋がりが強いと思われるが、そこに現れるのは動作動

詞となり、存在動詞との共起は見られない。

- (179) a. 次第に坂が急になっていく
b. 急に道が折れた。

表5 「時間関係の副詞」に含まれる語群

【事態存続の時間量を表す副詞】	
{大}	ずっと、いつまでも、長いこと、長時間、永遠に、
{中}	しばらく、当分、しばし、暫時
{小}	少し、ちょっと、一時、一時的に、つかのま
{極小}	一瞬、瞬時、一拍
【時間の中における事態の進展】	
{進展様態}	次第に、だんだん、徐々に、いよいよ、どんどん
{進展時間}	年々、日々、日増しに、刻々と、刻一刻と
【起動への時間量】	
{僅少所要}	急に、至急、不意に、いきなり、だしぬけに
{中期所要}	程なく、間もなく、そのうちに、数年して、
{長期所要}	ようやく、やっと、とうとう、ついに

「空間的分布を表す時間語彙」とは、あくまでもなんらかの要素の空間的指示を行うものとして規定されうるものであるため、動作を前提とした副詞群は適用されないものとなる。つまり、表4で示された「時の状況成分」のグループ及び表5で示された「時間関係の副詞」の中で「空間的分布を表す時間語彙」に用いられる語は、以下のようにまとめられる。

- (180) 何らかの事態のありようをその実現・成立のあり方で表す時間語彙は、動作性を前提とせず直示性を持ち時間と空間の共起性の高いもの、または事態の存続の長さに関わるものが、共起する事態の空間的な因子を表示することが可能である。

6.3.4.2. 頻度の副詞

定延の例に登場した副詞のもう1つの側面に、この頻度の副詞がある。「頻度の副詞」については、仁田は「事態の外側から、事態の成立のありようや成立状況を限定し特徴づけたもの (ibid.: 261)」としており、「時間関係の副詞」との差を説明している。

表6 頻度の副詞に含まれる語群

<p>【頻度を表す副詞】</p> <p>{高頻度} 絶えず、始終、<u>しょっちゅう</u>、よく</p> <p>{中頻度} しばしば、たびたび、ちよくちよく、<u>時々</u></p> <p>{低頻度} 時たま、<u>たまには</u>、まれに、滅多に</p> <p>【度数の副詞】</p> <p>{絶対数不定} 何度も、何回も、幾度も、</p> <p>{絶対数指示} 二度ほど、十数回、三たび、百万べんも</p> <p>【再発を表す副詞】</p> <p>また、<u>またも</u>、ふたたび、もう1度</p> <p>【繰り返しの期間】</p> <p>毎日、日々、[5分おきに]</p> <p>【「イツモ」「常ニ」の類】</p>
--

まず、これらのうち「**頻度を表す副詞**」とされるものは、その頻度の高低に関わらず、「空間的分布を表す時間語彙」に用いられる。同様に、「**再発を表す副詞**」や「**繰り返しの期間**」に分類されるものも、全般的に使うことが可能である。仁田の例で出された「毎日」「日々」などはスケールが大きいため困難であるが、例えば「5分おきに踏切がある」のような使用は問題ない。しかし、「**度数の副詞**」については検討が必要である。仁田によれば「度数の副詞」は、「頻度を表す副詞」で限定されなかった生起回数の全体量が限定されているのが大きな差であるとする。そして、これらの語の場合、「頻度の副詞」に比べるといくらか不自然になってしまう。

- (181) a. ここに来るまでの路線は、しょっちゅう踏切があった。
 b. ここに来るまでの路線は、何度も踏切があった。
 c. (?)ここに来るまでの路線は、二度ほど踏切があった。

これも前述の「数秒前」と同じで、具体的に絶対時（絶対的回数）を表示する必要がないためと考えられる。また、定延の分析に絡めて興味深いのは、仁田がわざわざ他のものと分けて説明を付した『「イツモ」「常ニ」の類』である。仁田は「いつも」を例にとって、似たような意味と考えられる「ずっと」と比較し、以下のような対比を持ち出している。

(182) a. ??さきほどからそういう風に生きたいといつも考えています。

b. さきほどからそういう風に生きたいとずっと考えています。 (ibid.: 265)

始まりの時点を表す「さきほどから」などとあわせると、「いつも」が逸脱性をもつ。これを適格にするには「少年の頃からそういう風に生きたいといつも考えています」のように、間隔をおきながら事態が複数回生じ存在しうるほど、始まりの時点が離れていなければならない。頻度の副詞には事態と事態の間に含まれるインターバルが不可欠であり、「いつも」はインターバルをおいた事態の各生起において、どの生起間隔を取ってみても、事態が存在していることを表す。

(183) 週末はいつも、この池でくつろぐことにしているのだ。 (ibid.: 265)

これによって、事態そのものが内的な存在時間の限界性をもたないもの、ありようの同質的な広がりである「状態性」の事態であっても、繰り返され数えられるものになる。

(184) a. 白石少尉は、いつもビリだった。

b. 死は生物の宿命とはいえ常に不意打ちだ。 (ibid.: 266)

「イツモ」や「常ニ」は、問題にしている間隔・インターバルのどこをとっても事態が存在していることを表しているのであって、生起・存在する事態と事態との間隔が無い（もしくは非常に短い）ことを表しているのではない。つまり、各間隔の間の大きさには関わらない。以下の例から、その特殊性は確認出来るだろう。

(185) a. 時たましか会わないが、いつもここで会う

b. *時たましか会わないが、しょっちゅうここで会う (ibid.: 267)

こうした「イツモ」「常ニ」の特性が、そのまま「空間分布」への使用に対して影響していると思われる。(171)との対比で定延のあげた例を確認する。

(186) a. なにしろ田舎だから無人駅がしょっちゅうあるわけよ。

b. *なししろ田舎だから無人駅がいつもあるわけよ。 (定延 2002: 191)

c. なにしろ田舎だから無人駅がずっとあるわけよ。

(186b)の文意は(186c)で意図したのと同様に「すべての駅が無人駅である」という事態であるが、「いつも」は生起する回数自体を特徴付けるのではなく、「何らかの事態が生起するたびに必ず」という意味を表すため、このような意味にそぐわないのである。

以上のように、基本的に「頻度の副詞」も「空間的分布を表す時間語彙」には自然に用いられることが多く、制限がある場合も、それは時間的な用法の際に現れる制限が同じように引き継がれているのだと考えられる。

6.3.5. 「空間的分布を表す時間語彙」のまとめ

仁田 (2002) の分類にしたがって、それぞれが「空間的分布を表す時間語彙」とどう対応するかをみてきたが、これらの分類をまとめると以下のようなになる。

- (187)・事態の生起時を表す「時の状況成分」の場合、発話時に隣接した限られた用法でのみ空間的な意味をもちうる。
- ・事態そのものの有している時間的性格を表す「時間関係の副詞」の場合、動作性を伴わず、存続を表すものがそこに共起する空間的な意味を表しうる。
- ・事態の外側から、事態の成立のありようや成立状況を限定し特徴づける「頻度の副詞」については、「イツモ」「常ニ」のような語以外の、インターバルを表示する語については、共起する空間的な生起も表しうる。

こうしてまとめると、「空間的分布を表す時間語彙」を動機付けているものが、事態のありようを表示した時に共起する「時間」と「空間」であることが確認出来る。つまり、様々な副詞は「事態」の時間的側面を切り出すからこそ「時間語彙」と呼ばれることになるが、その「事態」の含む空間性を取り出すことができれば、それは「空間語彙」となりうる。そこでは、あくまで具体的な事態を媒介とし、ある種メトニミー的に時間から空間への転用が行われているのである。定延の提唱した「探索」とは、こうした「事態」に含まれた空間と時間を明示的にひも付けし、「いつ」「どこで」の注意をまとまりとして喚起するための道具立てであったと考えられる。現象に携わる制約からこの「探索」の条件を絞り込んだわけだが、本論ではそこまでの絞り込みを行わず、制限を「語彙そのものが時空間を超えて持ちうる意味」に還元した。つまりそれは両義的に言葉が保持した時空間の別のない根源的な意味内容ということになるだろう。

6.4. まとめ

本章では、主に「副詞」と呼ばれる品詞カテゴリを中心とし、その中に含まれる時間の問題を大きく2つの側面から切り出した。6.2. 節においては、副詞と名詞の境界がどのような状態であるかを事例から確認し、その結果としては、主に時間に関わる名詞要素が、品詞を跨いで副詞的に、より具体的に言えば「時間関係の副詞」と呼称される時の状況成分として働くことが、日英両言語において確認されることを示した。そして、こうした名詞と副詞の共通性については、「時間を表す名詞」がそもそも時間の性質を写し取ったものであり、動詞述語文の修飾役割を果たすことが目的である副詞的修飾成分としての性質を本来的に備えていることを確認することになった。時間の性質は次元・動性・方向性・順序などの要素から与えられ、空間的・物質的な典型的な名詞群とは一線を画すものになっている。他方、こうして副詞として用いられる時間に関わる語群は、それが用いられる実際の「事態」を想起し、経験に基づいた時空間の共起性から、6.3. 節で取り上げた「空間的分布を表す時間語彙」という現象を起こす。ここで確認されたことは、事態の有様を時間的に取り上げる各種副詞の機能が、そのままダイナミックな認知の過程を反映し、空間的な視座にも影響を与えるまでの関係性である。これにより、時間的な名詞は副詞として機能し、更にはこうした修飾成分が空間的な事態把握にまで影響を及ぼすという、「時間語彙」の持つ境界性を超えた根源的な重要性が確認できる。

第7章 結論と展望

7.1. 各章のまとめ

言語による時間の姿というものは、言語自体の分析においても、そして時間という対象の分析においても非常に有意義なものであり、この「言語による時間像」を精察することにより、双方の研究領域に大きな発展をもたらすことは疑う余地がない。しかし、実際には言語研究からの時間へのアプローチは、起点となる言語の性質そのものに束縛され、その間に密な関係性を想定し、時間本来の姿の表れであることを詳らかにすることは困難な状況であった。ことに、時間の関わる語彙の個別研究に於いては「時間語彙が空間語彙の借り物である」という1つの結論を拠り所にし、その不自由な枠の中でのみ、捉えられているのが現状である。そのような枠組みは、無論一定以上の真理を含み、人間本来の時間知覚の有り様としても正しいものではあるが、それだけに取束させ、時間に関わる全ての言語活動について、そうした一方向的な性格付けを決定してしまうのはあまりに乱暴である。本論文は、そうしたある種歪んでしまった言語観に警鐘を鳴らしつつ、新たに時間と事象の融合した姿としての言語観を打ち出すことを最大の目的とし、様々な形で時間の姿を捉えることを試みた。

第2章において俯瞰した歴史的時間観は、本稿における「是正した時間観」を提示する上で欠かすことの出来ない前提条件である。歴史学、物理学、民俗学、人類学にいたるまで、様々な分野において「時間とは何か」が問われているにも関わらず、言語学においては、「時間とは何か」という核心的な問いにはなかなか踏み込むことができず、ある種の不文律として、固定された時間の姿がまかり通る現状がある。この傾向は、ヒトの認知のありように踏み込んだはずの認知言語学の分野においていくらか改善され、「時間を知覚するヒト」という主体的活動として時間との接し方を考察されるようになってはいるものの、時間自体の存在を大前提として行われた分析というものは未だ寡数であるのが現状である。本論では、改めて「言語」という立ち位置から時間という対象を観察するために、哲学的思索から始まる時間観を確認し、そこから物理学・哲学を並行して取り扱ったマッハの議論へと接続することで、現在の認知言語学の枠組みに必要であると思われる「時間」の姿を簡素ではあるが提示した。

3章では、そうした古典的時間観を踏まえた上で、改めて言語という道具から時間を見る時に、どのような要素が必要かを問い直した。Langacker を基盤とする認知言語学の枠組みにおいては、時間という概念はどのような意味・形式の研究にも立ち現れる基盤的な概念として取り入れられており、その重要性については意識的である。そうした認知言語学の基礎理論において与えられる時間は「基本ドメイン」と定義され必要最低限の道具立てとして、認知基盤を作り上げ、更に個々の言

語要素の性質を特徴付けるものとして取り沙汰される。3.1. 節では、純然たる理論言語学の深奥に踏み込むまでには至らないが、あくまでこうした基盤研究において与えられた時間の役割を確認し、本論の論旨が認知言語学的にも正当であり、「時間」という一要素をクローズアップした追試的論旨であることを保証している。そして、そのような基盤の上でも特に注意して取り扱うべき対象が、3.2. 節で取り上げた空間メタファー理論であった。空間メタファーにおける時間の立場というものは、冒頭でも取り上げた通りに「空間からの借り物」としての性格を強くしており、時にはあまりに強すぎる理論として安易な分析を導きかねないものである。メタファー研究は認知言語学の様々な分野の中でも発展の目覚ましいトピックであるが、現時点では、時間という対象を分析する上で、十分な理論的背景が整っているとは言い難い状況である。そもそも「時間とは何か」が定まっていない状態では、要素間を1対1対応させることが基本であるメタファー理論には限界がみえるであろうし、ヒトの認知活動の中でも最も根元的要素であるはずの「時間」に対する知覚が、その起点を他の概念からの写像にのみ依っているとすることは一定の懸念がある。本論ではこのメタファー理論の射程がどこまでのものであるかを定めることが1つの目標であることを当該の節で主張したのも、こうした状況についての危機感を訴えるためのものである。こうした「メタファー以外の言語派生の方向性」については、後の4章、ならびに6章などで具体的に提示される。また、3.3. 節では同様に多義語のプロトタイプ分析という手法についてもその根本的な目的意識と意義を確認すると同時に、時間に関わる語彙の場合、必ずしも一方向的な分析のみが有用であるとはかぎらないことを示唆している。このような問題意識も、メタファー理論についての懸念と根本を同じにしており、言語における時間の立ち現れ方を再検討する動機となっている。

そして3.4. 節では、寺崎 (2009) で主たる論旨となっていた「両義的原義図式」を今一度とりあげ、改めてその概念の有用な部分を切り出すとともに、抱えていた問題点についていくらかの修正と留保を行うことで、現時点において妥当と思われる射程を定めた。つまり、漠然とした「原義」という名前の概念に、「時間固有の性格」が何であるかを具体的に設定し、時間意味が立ち現れる際の制限、時間のみが持ちうる権限などを絞り込むことで、明確な「時間ドメイン」の性格を与えることである。3章において、これは「順序性」という言葉でまとめられたが、以降の章においても、この「順序性」については繰り返し確認されたものであり、時に「方向性」、時に「相関性」として、時間固有の性質を描出するものとして確認することができる。

4章以降は、具体的な事例をいくつか扱う事例研究の部門である。4章では、大きく名詞とされる品詞カテゴリについて、時間に関わる1つの語義獲得の可能性、メタファーと異なる形での分化の例として「サキ」を取り上げた。認知過程については議論の盛んな日本語の「サキ」をとりあげることによって、概念メタファー理論による時間の把握図式に不備があることを指摘するとともに、改めて「両義的原義」の考え方を適用することで、意味ネットワークの全体像が捉えられることを示し

た。先行研究においては、様々なモデルによって「サキ」の意味図式を描こうと試みられていたが、その過程で空間メタファー理論の働きかけがどうしても大きくなってしまい、時間という対象を「動くものか」「ヒトが動く領域か」という二分法で考える必要があった。しかし、本論では時間の本義として「順序性」という1点を定めることにより、碓井(2001)で「順序のドメイン」として設定されたものを時間の中に取り込み、本質的には同じものであることを示した。また、寺崎(2009)の論で不備としてあげられていたメタファー理論との関わりについて、「時間における外在的サキ」と呼称した現象が具体的な空間知覚から得られたメタファー的解釈法であることを提示し、時間における2つの「サキ」の最大の焦点である「LATER IS FRONT」と「LATER IS BACK」式の表現の違いの原因を説明した。こうして4章の「サキ」の議論で得られた事実は、時空間にまたがるとされていた名詞表現について、その本質に時間のみを抽出することが可能であり、空間に依拠せずとも時間独自の意味を表しうることである。これにより、典型的な名詞の概念原型に含まれる「物質性・空間性」を保持する名詞以外にも、空間的特性を持つ名詞について、改めて時間的な側面から意味形成を問い直す必要があることを示した。

5章では、「アタリ」のように時間要素を本来的に持ちうる形式以外の名詞について取り扱った。これらの名詞は概念原型である「空間性」を強く持ち、本論においても既存の研究同様に「空間から時間に派生した」と考えられる事例に含まれる。実際、5.1. 節で取り上げた「アタリ」については、「周辺空間」という意味で該当空間を同時的で均質に知覚する必要があるため、時間の持つ「順序性」「方向性」とは相反する要素を含んでいることを示し、用法の全てが空間表現をモト領域とする概念メタファー的転写であることを確認した。その上で、どのような用法に時間独自の制限がかかり、その原因は時空間のどんな性格の違いから起こるものかを分析した。

「アタリ」と様相を異にするのは、より次元性を時間と共有しやすい「アイダ」である。5.3. 節ではこの「アイダ」を「ウチ」と比較しながら、時空間にどのように広がりを持つかを観察した。その結果導き出された事実は、「アイダ」には「二つの極の異なる境界」という本質があり、これは「サキ」同様に時間の本質と相容れる領域である。そのために「アイダ」は時間的な用法でも独自の広がりを見せ、空間的な表現ではなしえない形式を取り、多様な意味を表しうることを観察した。この時に重要なのは、「アイダ」という名詞が意味を保持しながら、助詞との接合によって副詞的な働きを見せるようになるという部分である。実際には4章で分析した「サキ」にも同じことが言えるが、「アイダ」については、「ウチ」との対照が可能だったことから、更に「アイダニ」「アイダ」という2つの形式についての分析も行った。副詞的に働く「アイダニ」と名詞単体がそのまま用いられる「アイダ」の差を観察することで、経過を記述するための副詞的表現がどのように名詞から生まれ、それがどのような範囲で意味を変化させるかが分かり、より広範な語の意味を探ることが可能になった。そして、5.3. 節においては、こうした助詞との接続について、より密に焦点

を絞り、助詞の機能という方向性から形式名詞「トコロ」に関する副詞的表現をいくつか取り扱った。興味深いのは、「トコロ」の絞り込む空間用法が既に「場所の焦点化」という機能を有していたことに加え、これが時間用法となり時点指示に用いられるときに、助詞との接続で意味が複数に分化するところにある。空間用法の場合に助詞の機能により意味に差は生じるが、時間のように独自の制限、意味変化を起こすわけではなく、あくまで「空間+助詞の機能」で説明出来るのに対し、時間用法においては、実際の場面性などによって「トコロ」本来の意味、助詞の機能以外の部分にも意味が強化されていることにある。「トコロヲ」における<観察・視認><干渉・阻害>意味の制限などは、「トコロ」が時間に用いられる場合に、どのような事態把握とつながりを持って成り立ったものであるかを更に精査することが求められるだろう。

6章は、こうして名詞が副詞的な機能を持つに至ったことを、副詞側の視点を中心にし、どのように境界を跨ぐものであるかを取り扱ったものである。6.1. 節で参照した仁田 (2000) の分析では「副詞的修飾成分」と呼称された「述語・動詞文を修飾する働き」は、特に時間に関わる意味を持つ場合に多数のバリエーションを持つものである。日英比較を主目的とした小沢 (1991) では、英語ではいくつかの「副詞的名詞句」の категорияがある中でも、基本的には時間に関係する名詞がその多くの割合を占めることを示し、更に時間的な名詞の中でも直示表現との関わり、「方向性 (Directionality)」との関係に言及し、副詞的名詞句における時間語彙の特異な位置取りを理論づけた。本論ではさらに、この小沢の分析を日本語の副詞群と比較し、共通する部分が多いことを指摘、日本語の問題に還元する際に、小沢の提唱した「方向性」の概念が時間の持つ「順序性」の問題に直結していることを述べた。副詞カテゴリーがどのように定義されるべきかという議論は尽きないが、時間に関わる副詞的修飾成分は、名詞や形容詞（の連用形）など、品詞としての軀を逃れ、「時間要素への言及方策」として再分析することも可能であるかもしれない。

こうして副詞カテゴリーがどのように名詞などから創出されるかが概観された後、6.3. 節では、逆に副詞的であるとみなされていた語群が、空間要素へと働きかけることになる「空間的分布を表す時間語彙」について、定延 (2002) を下敷きとして考察を試みた。「空間から時間」という流れは一見すると4章で扱われた「サキ」、5章で扱われた「アタリ」などとは逆方向の働きに見えるが、この逆転した現象の動機付けを探ることにより、空間と時間の関係性に相補的に成り立つ平等な関係性が含まれることを提示した。この中では、特に「経験」を基盤とした時間と空間を関係付けた認知様式について言及し、定延の言葉では「探索」とされた具体的な身体経験が語彙の用法に影響を与え、時間要素が関わっていたものが、普遍的には空間的体験、つまりは実体験と切り離せないことを示した。つまり、これまで「時間語彙」と思われてきた語についても、その根本にあるものが事態そのものの要素を内在した「両義的原義」、時間を無視することが出来ない、時空間の渾然とした「事態把握」によって概念形成が行われるということの示唆である。

7.2. 総論

以上、全体では4・5・6章を中心に、時間に関わる種々の現象を分析、考察してきたが、その根底にある目的を改めて確認すると、第1の目的は時間知覚の言語への表れ方について、時間と空間の関係性を問い直すこと、そして第2の目的は、時間を中心とした分析手法・理論を構築し、旧来よりの日本語学で培われてきた知見に、新たな分析の視座を与えることである。第1の目的については、時間哲学へと回帰し、純然たる時間概念を追求するまでに至ることこそ困難であるが、時間の根幹を「順序性」という簡素な概念に依拠させることによって、いくつかの言語現象において、時間の存在意義、時間独自の言語への影響というものが確認できた。特に第4章における「サキ」の分析では、過去の研究では不十分であった各々の用法間関係性を、時空間の特性の別、並びに空間メタファーの存在という2方向から検討することで、より実際の認知方策に即した意味分化の方向性が確認できたと思われる。また、第5章では「アタリ」という空間優位の語彙、「アイダ」という両次元にまたがる境界的な語彙の2つを取り上げることにより、時間特有の拡張傾向の一端を捉えることができた。

第2の目的については、主に5章の「トコロ」と助詞の関係など、実際の用例を見ての分析はいわゆる日本語学における事例分析の手法に則ったものであり、助詞に機能特性を与えたトップダウン的な分析から、改めて「トコロ」が時間意味を経た際の制限発生や機能分化を確認することができた。6章では日英比較を基盤とした「副詞的名詞句」の分析から、言語を跨ぐ人間本来の認知の有り様を確認するとともに、日本語の中で用いられる副詞カテゴリの分類考察にも踏み込み、その境界領域には時間概念が大きく関わることを示した。また、認知言語学的な洞察がベースとなっていた「空間的分布を表す時間語彙」に関する分析では、より実際の使用に即した形での現場性を重視した示唆が得られ、時間関係の語彙を取り扱う上では無視できないであろうイマココの現場性・直示性などとの関わりも見出すことになった。

こうした個々の知見を総合して、改めて「両義的原義図式」の提唱する原理を確認したとき、「人間が本質的に知覚している事態の有り様」「時間と空間が渾然一体となった両義的な事態把握」という概念の重要性が、強く主張されるものになっている。

7.3. 今後の展望

本論で提示した事実以外にも、時間に携わる言語現象は広範に存在する。むしろ時間に関わらない認知活動がない以上、全ての言語は時間に支配され、影響を受け続けることになる。こうした時間の姿を言語観に反映させることに最も適した枠組みとして、ヒトの認知を基盤とした認知言語学が存在していることを考えれば、今後の展開としては、より時間との関係性に焦点を当てた認知活

動の分析手法の基盤作りが求められる。本論では「時間ドメイン」という言葉について、「時間の持つ順序性を中心として事態認知に関わる諸活動領域」と解釈したが、こうした漠然とした理解が、認知言語学の想定するその他の基本ドメインと並び立つものであるかは検討が必要である。また、順序性という言葉で表された「相対的時間差分」の知覚については生理学的な分析も盛んに行われている分野であるから、より生物学的な方向からの裏づけも新たな言語理論の構築に貢献することが可能だろう。

具体的な言語事例としての今後の展望については各章末尾で述べた通りであるが、改めて確認すると、まずは4章の「サキ」の分析と同様に、時空間で多岐にわたる変化を見せる語彙について、時間の性質に焦点を絞った同様の分析を繰り返すことで、より総体的な時間の本質を探ることが可能になるだろう。今回は中心的に扱えなかった部分であるが、「サキ」の類似事例としての「マエ」との比較は重要であるし、それ以外にも「アト」「ノチ」「ウシロ」の差分があり、「アイダ」との関わりでは「ナカ」「ウチ」「ハシ」「スエ」などの語が同じように俎上にあがるだろう。これらの語群の違いを十全に説明し、それぞれの時間との関わりが明示化されることで、本論で得られた両義的原義図式に保証が得られるものである。

また、品詞論としての時間語彙分析も今後引き続き重要な課題であり、新たに与えられた「時間観による品詞の分類」は、これまでの言語研究に重なる部分がほとんどであるが、それだけでは説明し得ない重大な相違点があるのもまた事実である。本論では機能論的視点はほとんど与えられていないのが実情であるので、形態、機能、そして実際の談話での用法など、様々な側面から品詞の境界を切り出し、その中に現れる時間要素を弁別することにより、新たな品詞論の構築も期待されるものである。

最後に「空間的分布を表す時間語彙」に関わる部分では、より実際の使用に即した語の意味解釈の問題が取り上げられている。本論では副詞領域を中心に「時間語彙の変化」を取り扱ったが、分析の及ばなかったその他の領域、形容詞、接続詞、独立語に至るまで、あらゆる語彙が時間との関わりでその意味を変質させる可能性を有している。こうした多数の領域について、「時間」という1つの要因を基にして扱うことで、発話行為や語用論的な側面にまで、意味の問題を問い直すことも可能になるだろう。

参考文献

- 浅野百合子. 1975. 「『うちに』『あいだに』『まに』をめぐって」, 『日本語研究』 27.53-62.
- Croft, William. 1993. "The Role of Domains in the Interpretation of Metaphors and Metonymies." *Cognitive Linguistics*, 4: 335-370.
- Fillmore, C. J. 1997. *Lectures on DEIXIS*. Stanford: CLSI Publications.
- 深田智・中本康一郎. 2008. 『概念化と意味の世界』 東京: 研究社.
- Gibbs, Raymond W. Jr. 1994. *The Poetics of Mind: Figurative Thought, Language, and Understanding*. Cambridge: Cambridge University Press. (辻幸夫・井上逸兵 (監訳) 2008. 『比喩と認知 心とことばの認知科学』 東京: 研究社.)
- 潘鈞・小澤伊久美. 2006. 「時間認識は言語にどう表れるか」, 『月刊言語』 35: 44-51.
- 服部四郎. 1955. 「日本語・監修者註」, 市河三喜・服部四郎 (編) 『世界言語概説下巻』 301-305. 東京: 研究社.
- 日野資成. 2001. 『形式語の研究 文法化の理論と応用』 福岡: 九州大学出版会.
- 本多啓. 2005. 『アフォーダンスの認知意味論 生態心理学からみた文法現象』 東京: 東京大学出版会.
- 池上嘉彦. 1981. 『「する」と「なる」の言語学』 東京: 大修館書店.
- 池上嘉彦 (編). 1985. 『意味論・文体論』 東京: 大修館書店.
- 井上京子. 1997. 『もし「右」や「左」がなかったら』 東京: 大修館書店.
- 井上慎一. 2006. 『やわらかな生命の時間』 東京: 秀和システム.
- 伊藤創. 2008. 「『6時に』と『6時で』 —空間と時間の関係—」 関西言語学会発表資料.
- Johnson, Mark. 1987. *The Body in the Mind*. Chicago: University of Chicago Press.
- 神尾昭雄. 1980. 「『に』と『で』 —日本語における空間的位置の表現—」, 『月刊言語』 9:55-63.
- 河上誓作 (編著). 1996. 『認知言語学の基礎』 東京: 研究社出版.
- 金水敏・工藤真由美・沼田善子. 2000. 『時・否定と取り立て』 東京: 岩波書店.
- 北原保雄. 2010. 『日本語の形容詞』 東京: 大修館書店.
- 工藤真由美. 1995. 『アスペクト・テンス体系とテキスト』 東京: ひつじ書房.
- 国広哲弥. 1981. 『日英語比較講座第3巻 意味と語彙』 東京: 大修館書店.
- 国広哲弥. 1982. 『意味論の方法』 東京: 大修館書店.
- 国広哲弥. 1997. 『理想の国語辞典』 東京: 大修館書店.
- 久野暉. 1973. 『日本文法研究』 東京: 大修館書店.

- 黒田航. 2007. 「<意図的行為>と<使役>と<状態の変化>との関係を考慮した<移動>のオントロジーの明示化案」. [http://www.hi.h.kyoto-u.ac.jp/~kkuroda/papers/ontology-of-motion.pdf\(2015/3/18\)](http://www.hi.h.kyoto-u.ac.jp/~kkuroda/papers/ontology-of-motion.pdf(2015/3/18))
- 久島茂. 2002. 『<物>と<場所>の意味論』 東京: くろしお出版.
- 楠見孝 (編) . 2007. 『メタファー研究の最前線』 東京: 大修館書店.
- Lakoff, George. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things*. Chicago: The University of Chicago Press. (池上嘉彦・河上誓作 他 (訳) 1993. 『認知意味論』 東京: 紀伊国屋書店.)
- Lakoff, George, and Mark Johnson. 1980. *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press. (渡辺昇一 他 (訳) 1986. 『レトリックと人生』 東京: 大修館書店.)
- Lakoff, George, and Mark Johnson. 1999. *Philosophy in the Flesh. The Embodied Mind and Its Challenge to Western Thought*. New York: Basic Books.
- Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar*. Vol.1. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar*. Vol.2. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford University Press.
- Larson, Richard. K. 1985. "Bare NP Aderbs". *Linguistic Inquiry* 16: 595-621.
- Mach, Ernst. 1977. 『時間と空間』. 東京: 法政大学出版局.
- 益岡隆志・田窪行則. 1987. 『日本語文法 セルフ・マスターズシリーズ3 格助詞』 東京: くろしお出版.
- 益岡隆志・田窪行則. 1992. 『基礎日本語文法 一改訂版一』 東京: くろしお出版.
- 益岡隆志. 1995. 「時の特定、時の設定」, 仁田義雄 (編) 『複文の研究 (上)』 149-166. 東京: くろしお出版.
- 松本曜. 2003. 「語の意味」, 松本曜 (編) 『認知意味論』 17-71. 東京: 大修館書店.
- 松中義大. 2001. 「接続助詞『うちに』の認知言語学的考察」, 『東京工芸大学芸術学部紀要』 7:41-49.
- 松中義大. 2008. 「日本語接続助詞に関する一考察 『うち』『なか』を中心に」, 篠原和子・片岡邦好 (編) 『ことば・空間・身体』 179-211. 東京: ひつじ書房.
- 見田宗介. 1999. 「時間コンセプトの4つの形態—時間の比較社会学から」 長野泰彦 (編) 『時間・ことば・認識』 33-54. 東京: ひつじ書房.
- 宮島達夫・仁田義雄 (編) . 1995. 『日本語類義表現の文法 (上) 単文編』 東京:くろしお出版.
- 宮崎清孝・上野直樹. 1985. 『視点』 東京: 東京大学出版会.
- Moore, K. E. 2000. *Spatial experience and temporal metaphors in Wolof: point of view, conceptual mapping, and linguistic practice*. Berkely: University of California at Berkeley doctoral dissertation.

- Moore, K. E. 2001. Deixis and the FRONT/BACK opposition in temporal metaphors. In Alan Cienki, Barbara J. Luka, & Michael B. Smith (Eds.), *Conceptual and Discourse Factors in Linguistic Structures*. 153-167. Stanford: CSLI Publications.
- Moore, K. E. 2004. Ego-based and Field-based frames of reference in space to time metaphors. In Michel Achard & Susan Kemmer (Eds.), *Language, Culture, and Mind*. 151-165. Stanford: CSLI Publications.
- 初山洋介. 1995. 「多義語のプロトタイプの意味の認定方法と実際—意味転用の一方向性：空間から時間へ—」, 『東京大学言語学論集』 14: 621-639. 東京大学言語学研究室.
- 初山洋介・深田智. 2003. 「意味の拡張」, 松本曜 (編) 『認知意味論』 73-186. 東京: 大修館書店.
- 森田良行. 1980. 『基礎日本語 2』 東京: 角川書店.
- 森田良行. 2002. 『日本語文法の発想』 東京: ひつじ書房.
- 村木新次郎. 2012. 『日本語の品詞体系とその周辺』 東京: くろしお出版.
- 鍋島弘治朗. 2002. 「メタファーと意味の構造的性 —プライマリー・メタファーおよびイメージ・スキーマとの関連から—」, 山梨正明他 (編) 『認知言語学論考』 2: 25-109. 東京: ひつじ書房.
- 鍋島弘治朗. 2007. 「領域をつなぐものとしての価値的類似性」, 楠見孝 (編) 『メタファー研究の最前線』 179-200. 東京: 大修館書店.
- 長野泰彦 (編) . 1999. 『時間・ことば・認識』 東京: ひつじ書房.
- 中村ちどり. 2001. 『日本語の時間表現』 東京: くろしお出版.
- 中右実. 1994. 『認知意味論の原理』 東京: 大修館出版.
- 中右実 (編) . 1997. 『空間と移動の表現』 東京: 研究社.
- 新村朋美. 2006. 「日本語と英語の空間認識の違い」, 『月刊言語』 35: 35-43.
- 仁田義雄. 2002. 『副詞的表現の諸相』 東京: くろしお出版.
- 野矢茂樹. 2002. 『同一性・変化・時間』 東京: 哲学書房.
- 岡智之. 2013. 『場所の言語学』 東京: ひつじ書房.
- 小沢悦夫. 1991. 「副詞的名詞句の性質について」, 『早稲田商学』 343: 135-166.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- 定延利之. 2000. 『認知言語論』 東京: 大修館書店.
- 定延利之. 2002. 「時間から空間へ?—<空間的分布を表す時間語彙>を巡って」, 生越直樹 (編) 『対照言語学 (シリーズ言語科学 4)』 183-215. 東京: 東京大学出版会.
- 佐々木正人・三嶋博之 (編) . 2001. 『アフォーダンスの構想』 東京: 東京大学出版会.
- Schank, Roger C, and Robert P. Abelson. 1977. *Scripts, Plans, Goals, and Understanding*. Hillsdale, NJ:

Lawrence Erlbaum Associates.

- 瀬戸賢一. 1997. 『認識のレトリック』 東京: 海鳴社.
- 瀬戸賢一. 2005. 『よくわかる比喩』 東京: 研究社.
- 篠原和子. 2002. 「空間的前後と時間概念の対応」, 『日本認知言語学会論文集』 2: 243-246.
- 篠原和子. 2008. 「時間メタファー『さき』の用法と直示的時間解釈」, 篠原和子・片岡邦好 (編) 『ことば・空間・身体』 179-211. 東京: ひつじ書房.
- 竹林一志. 2007. 『「を」「に」の謎を解く』 東京: 笠間書院.
- 田中元. 1974. 『古代日本人の時間意識—その構造と展開—』 東京: 吉川弘文館.
- 田中茂範. 1997. 「空間表現の意味・機能」, 中右実 (編) 『空間と移動の表現』 1-123. 東京: 研究社.
- 寺村秀夫. 1982. 「時間的限定の意味と文法的機能」, 『寺村秀夫論文集 I』 127-156. 東京: くろしお出版
- 寺崎知之. 2009. 「時間・空間語彙の認知言語学的考察 —両義的把握モデルに基づく語彙の分析—」 京都大学 人間・環境学研究科 修士論文
- 寺崎知之. 2010. 「空間語彙と時間語彙への意味分化の考察 —日本語の「サキ」の分析—」, 『言語科学論集』 16: 1-23. 京都大学.
- 友松悦子・宮本淳・和栗雅子. 1996. 『どんなときどう使う日本語表現文型 500』 東京: 株式会社アルク.
- 碓井智子. 2001. 「空間認知表現と時間認知表現 —日本語マエとサキの認知言語学的考察—」, 京都大学 人間・環境学研究科 修士論文.
- 碓井智子. 2002. 「空間認知表現と時間認知表現: 日本語の「サキ」の認知言語学的考察」, 『日本認知言語学会論文集』 2: 150-158.
- 碓井智子. 2004. 「空間から時間へ —写像の動機付けと制約—」, 『言語科学論集』 10: 1-17. 京都大学.
- 渡辺実. 1995. 「所と時の指定に関わる語の幾つか—意味論的に」, 『国語学』 181: 18-29. 日本語学会.
- Whitrow, Gerald. James. 1972. *What is time?* London: Thames and Hudson Ltd. (柳瀬睦男・熊倉功二 (訳) 1993. 『時間 その性質』 東京: 法政大学出版局.)
- 山田進. 1981. 「機能語の意味の比較」, 国広哲弥 (編) 『日英語比較講座第3巻 意味と語彙』 東京: 大修館書店.
- 山梨正明. 1988. 『比喩と理解』 東京: 東京大学出版会.
- 山梨正明. 1993. 「格の複合スキーマモデル—格解釈のゆらぎと認知のメカニズム」, 仁田義雄 (編)

- 『日本語の格をめぐって』 39-65. 東京: くろしお出版.
- 山梨正明. 1995. 『認知文法論』 東京: ひつじ書房.
- 山梨正明. 2000. 『認知言語学原理』 東京: くろしお出版.
- 山梨正明. 2004. 『ことばの認知空間』 東京: 開拓社.
- 山崎馨. 1992. 『形容詞助動詞の研究』 大阪: 和泉書院.
- 矢野円郁. 2010. 「時間記憶の認知心理学 —記憶における経過時間とその主観的感覚—」 京都: ナカニシヤ出版.
- 吉村公宏. 1995. 『認知意味論の方法』 東京: 人文書院.